

行くに相似てゐる。其の際に道義的墮敗といふ如きことまでは考へずとも、肉體的併びに精神的活動が減退し、生殖力がいよゝ衰弱し行くといふ事柄を以てしても、職業生活の下層より上層へと向上する純潔なる血液の注入を健全なる社會の新陳代謝の主要條件なりといふことを示すのに十分ではあるまいか。其の間にこそ吾人は常に、徐々たる社會的向上が可能にされ、斷えざる上流職業階級の革新が行はれると云ふ現代の大問題を看取したのである。而して遺傳説よりすれば、その結果であるべき階級制度の中に、吾人は常に文化發展の發端をこそ認め、決して其の終焉を見なかつたのである。

## 一〇 五千年來の大都會様式



大都會なるものは決して昨日や今日の事にては非ず。テールベス<sup>1)</sup>、メムフェイス<sup>2)</sup>、バビロン<sup>3)</sup>、ニネベ<sup>4)</sup>、スザ<sup>5)</sup>、エクバター<sup>6)</sup>ナの名は、吾人を驅つて茫漠たる太古に導き入るゝではないか。舊約全書の中の約拿書第三章には、「大都會」ニネベは三日路の延長を有したりしと記してある。ヘロドトス<sup>7)</sup>はバビロンの都を敘して曰く、『それは驚く程大なる四角形をなして、その各邊は百二十シユタディウム<sup>8)</sup>の長さを有し、従つて全周四百八十シユタディウム（吾々の尺度に換算すれば八十八基米）を算したり』と。故にその都會は四百八十四平方基米の面積を占め居たりしこととなり、今日のベルリンの約八倍、ドレスデンの殆んど十二倍に當つてゐる。一神學統計學者はニネベには、「右と左の差別<sup>9)</sup>を辨へざる人間の數、十二萬を數へたり」との豫言者ヨナの記録より推算して、百萬の人口を包有し居たりと斷じた。所でそれがどのやうな状態にあるにしても、住民大衆が堅固なる城郭の中に鎖されるものなることは疑ふべからざる所にして、その城郭の大なること、常に其の當代の人のみならず、後世の行客のその廢墟を過ぐるものをして轉々驚嘆を禁ぜざらしむるものがある。さりながら、これ等古代の大都會を、直ちに以て今日の吾人のそれと比較する譯には行かぬのである。彼處には聯絡ある道路網は僅かに一本すらなく、多數大小の家屋群を有して障壁を繞らしたる領地があり、その間には耕地、庭園、牧場、果樹園等散在し、戦時に際してはその四邊の住民及びその畜類を擧つて抱擁したりしものなるが、其の廣袤の大なる、これを包圍すること極めて困難の事であつた。斯くの如くなるが故に、アリストテレス<sup>9)</sup>が、バビロンはその陥落に方つて、已に三日間敵の手中にありながら、都の一部はなほ少しもそれを知らずにあつたと述べてゐるが、その決して荒唐ならざるを肯ひ得るのである。

〔一〕 第一卷、一七八。なほ以下の事柄に關しては、特にホエールマン著『古代に於ける大都會の人口過剩』(Pöhlmann, Die Uebersiedelung der antiken Grossstädte) 一八八四年ライプナヒ版を参照せよ。

1) Theben 2) Memphis 3) Babylon 4) Niniveh 5) Susa 6) Ekbatana  
7) Heradot 8) Stadium 9) Aristoteles



〔二〕シュースミル著『神の秩序』(Götter, Ordnung) 第二卷、三三五頁以下。

〔三〕『政治學』(Polit.) 第三卷、1、111。

されど斯種の都會の成立は、武家系統の強力なる個々の統率者による大國家の建設<sup>●●●●●</sup>てふこと、相提携して行はれたものらしく思はれる。かるが故に其等の大都會なるものは同時に帝都にして、その中央には王城聳立す。この王城は更らに繞らずに巍峩たる石壁圍牆を以てして、それ自ら一つの城郭を形作り、その裡には王者がその財寶、婦女、衛兵、併びに無数の奴隸を抱へて居を占めてゐる。近くには國神の祠を鎮き、その周りには同族の自由民を住まはしめ、以て緩急に際して直ちに彼等を召集し得るの便に具へ、且つ男子遠征するも婦女童幼をして遊牧盜民の侵襲を惧るゝの要なからしめてゐる。此等の種族が代る／＼小アジア地方の支配權を掌握したのであつて、即ちカルデル族に代つてアッシリア族起り、アッシリア族に次いでバビロニア族及びメーデル族生じ、メーデル族倒れてベルシヤ族覇を稱したのであつた。然かも此等大都會にして全く破壊し盡されたるものはたゞ僅かにニネベの都一つを數ふるのみである。ベルシヤ王は皆、三箇の帝都に代り住みて、冬はバビロンに、春はエラムのササに、夏はメデイナのエクパタナに遷り住み、到る所國君の後嗣なりとの威を示したのであつた。

〔四〕トイエル著『古代史』(Erl. Meyer, Gesch. des Altertums) 第三卷、十五節參照。

然るに古代エヂプトの多數都市にては、其の事情全然異りて、權勢を恃む支配者は何れも、位に即くや、必ず『己が都を建つる』事に着手し、之に命ずるに己が名を以てするといふ事が、所謂中新國家時代の國君(紀元前二一三〇—一〇五〇年)の間には可なりによく恪守されて居り、古代國家時代の國君(紀元前二八〇〇—二二三〇年)の間にも行はれてゐたものゝ如く推測される。此の都は何れも、その當時大神殿ありしが故に宗教的中心點となりたりしかのテ

ベスの設計に従ひ、之に則つて建てられしものにして、王宮あり、穀倉あり、倉庫あり、遊園あり、池臺があつた。かくて宮廷の歌人は、その輪奐の美を讚へ、歌うて曰く

わが大君の建てませる城

その名もゆかし「大捷」と呼ぶ。……

所はパレスティナとエヂプトとの間

糧食豊かに充ちあふれたり。

その美觀、南なるヘリオポリスのそれとまがひ、

メムフィスの都のごと永久に榮えん。

太陽はその地平より出でて

その中程にして没す。

四方の民草住む町をすて、

西の域へと、移り住まふし……

アムモンの神は都の南、メテツヒの殿堂に在まし、

アスタルテの女神は東の方に鎮座ます。

ウドイトの神の鎮むるは北の方ぞ。

その中に聳ゆる牙城の大いぞ

まさに地平線にたぐへつべく

一〇 五千年來の大都會様式



此處を守る神はアムモンの神の愛人、ラムセスなり。云々

〔五〕 以下引用する所はエルマシ著『古代エジプトと其の生活』(Ermann, Aegypten und Aegyptens Leben im Altertum) 二四二頁以下による。

〔六〕 「國王其の中に住む」との意である。——ヘルマン

〔七〕 神々は其の故郷の位する方位に分れて堂宇を建てられることとなつて居た。——ヘルマン

此等の帝都の中たゞ一つメムフィスの都のみは長き春秋を存続し居たりしが、その他は皆、その都を建てし王者の逝くや直ちに荒廢し盡し、ナイルの河の洪水は民家の土壁を泥土に委して、強制的に移り住まはしめられたる住民は茲に再び四散して、王者が建てし三尖塔のみぞ果敢なき人生の跡を止むるばかりである。

斯くの如く不思議なる現象は今日に至る迄、アフリカ、殊にサハラ沙漠の南縁より赤道に跨れる廣き區域に現はれつつあるのである。吾人はこれに據つて大都會の最古の様式に接したるが故に、暫らく此點に停滯して、以て之れが研究を爲さんと欲す。抑々かの地にありて、比較的大なる國家の建設せらるゝ所、其處には必ず、武家種族中の俊邁なる支配者個人がよくその原因となるものにして、彼は近隣諸民族を歸服せしめし後、己が武人を率ゐて要害堅固なる都市を建設し、以てその臣下を懾伏せしめたのである。しかるに、此の王の一朝にして崩ずるや、その後繼者は他の土地に新たに王都を營むものにして、爲めに古き都は倏忽として荒涼の地と化し、淺茅が原と荒れ果てつ、よし尙ほ人の棲むありとするも極めて狭き地域にすぎざるに至るのである。斯くの如きは國が他の征服者によりて征服されし時にも起る現象なるが、しかし其の際に此の征服されし都が屢々代官の居地となりて、陰影の如き生存を續け行く場合がないではなく、此の時はその例外である。

〔八〕 シュレルツ著『文化起源史』(Schurtz, Urgeschichte der Kultur) 四四七頁以下参照。

〔九〕 二九頁参照。

斯かる都市の死骸はスーダン殊にフルベ諸州に於ける程よく示されてゐる所はなく、それに依つて吾人は此の地方に回教の侵入したことを推し得るのである。旅行記を手にして、ゾコト、カノ、ガンド、クカ、カトセナ、マセナ<sup>2)</sup>の大都會の廣表を読む時ヘロドトスが叙べしかの古代バビロンの有様をまざまざと想ひ起させる。峻嚴なる賦役によりて建設せられ維持せられるこの龐大なる城壁は廣き面積を繞らして、人家は其の中の極く小地域を占むるばかり、大部分は田畑、牧場、園圃に使用されてゐる。而して其の中、唯一の堂々たる建物と云へば、それは支配者の宮殿のみであり、その近くには、毎日盛んなる市場が開かれる。生命財産の安固はその時々たゞその城郭内のみ存して、足一度郭を出れば、沙漠を荒らす盜民の變幻出没するありて、武装せしめて城郭を去るものは誠に禍なる哉である。吾人は又バルト、ナハティガル<sup>4)</sup>諸氏の紀行を見、此等の大都會が遠方より彼等に與へし堂々たる印象と、一度足をその城郭内に踏み入れて、識り得たる蕭條たる荒蕪の光景とを読みしこと、幾度であつたらうか。かの著名なるティムブクトウ<sup>5)</sup>の都すら、一八九四年にフランス人が劍を抜かずして陥れたりしその當時には、たゞ徒らに疊々たる廢墟にすぎなかつた。それは實にツァレーグ蠻族の鐵腕の下に已に死の都と化し去りたりしものであつた。

〔一〇〕 例へば、バルト著『北部及び中央アフリカ旅行及び其の發見』(Barth, Reisen und Entdeckungen in Nord- und Zentralafrika) 第二卷、四九、七八、一一三、一四八、一六八頁及び隨所参照。

古代支那及び中世のアラビヤ諸國にもそれに類するものに接し得る斯かる都市様式は、吾人これと呼んで原始的專制君主的都會と爲すことが出来る。鐵の如く冷酷なる壓制の手がそれ等を創り出したものであつて、人民を驅つて此の大都會に又此の要害を固めたる大陣營に結集せしむるに至つたのである。被征服種族の調貢は支配者の倉裏を満たし

1) Fulbestaaten 2) Sokoto, Kano, Gando, Kuka Katsena, Masena  
3) Barth 4) Nachtigal 5) Timbuktu



て、數千人より成る宮廷國家併びにそれに隸屬する小者達の多數を養うて僅に餘りがある。而已ならず絶えず戰爭によつて『莫大なる分捕品』を得てゐたのである。極めて僅數の工業と、少許の外國貿易とは、城外の舍營地に於て行はれ居たりしとは云へ、かゝる都市はこれを概觀し來れば、單なる防禦機關、統治手段にして、經濟的に云へば、それは純乎たる一消費體たるにすぎず。而してその住民はその庭園、田野、果樹等によつて利を得る所ありたりと雖も、それ以上この都市は國民の貨財生産に對して何等資する所がなかつたのである。

次に眼を古代の古典民族たるギリシヤ人及びローマ人に轉ぜんか、元來彼等の全歴史は即ち都市の歴史である。彼等の國家は即ち都市國家であり、彼等の制度は即ち都市制度であり、彼等の文化は即ち都市文化であつた。彼等とても固より其の歴史を、廣濶なる村落 (village, vic) に散在して土地の果實より生活し、住む土地に應じて各種族毎に分れて緩やかな結合をなせる純田園生活の状態を以て始めたりしものなるが、斯かる状態は、かの東洋諸民族の間に見し如き、或る一人の族長が多數又は一切の種族の支配者となり、專制權力によつて彼等に奴隸的服従を強ゆるといふが如き最後に終らずして、各種族相集つて都會を形作る<sup>1)</sup>と云ふ事となり、かくして田園的生活法を抛つて、築砦に適せる地點に堅固なる城壁を繞らして、其處に自由なる共同體を建設し、以て外敵の侵入に備へ、強力なる內的協同生活を保障するに至つたのである。此のことは決して音にギリシヤ人併びにイタリア人の間のみに非ずして、實に殆んど一切の地中海沿岸民族、即ち東は小アジアより西はスペイン、ガリヤ地方に至るまで等しく行はれたる發展の經過である。其等の地方に於ては、到る所として、小民族が、一部はその自由の意志より、一部は有力なる權力者の命令に基きて、相聚まつて都會を形成しゐるに會せざるなき有様である。否、夫れのみ止まらず、ローマの皇帝時代に於ては此の制度は實に野蠻諸國にまで波及して、ガリヤなるアプロゲル人の一族はローマ植民地ヴェンナに生じ、ゲルマンのウビール民族

はコロニア・アグリッピネンジス<sup>1)</sup>、即ち今日のキョルンの地に生まれたのであつた。

斯かる都會化の著しい過程が最も早く行はれたのはギリシヤ人の間に於てであつた。彼等はこれを呼ぶに *synoikismos* (集團移住の意) として固有の語を以てしてゐる。抑々ヘレニズムの精神が作り出せるもの中最も偉大なるものとして云はば、それは皆 *Polis* (都市國家) の法律及び秩序中に包含されつゝありと稱するも決して過言には非ずと信する<sup>2)</sup>。ギリシヤ人又能くこれを自覺し居たりしが故に、此の都市國家的發展の尙ほ未だ十分に遂げられるざりしかのアイトール人、アカルナン人、ロクリス人の如き山地種族を目するに半野蠻人を以てしつゝあつたのである。史上著名なるギリシヤ民族の中、此處に一つの例外を爲すものがある。それは即ちスバルタ人にして、その騎士たる支配階級は防禦なき五箇の村落に住んでゐたのである。然れども其他の地方に於ては、かの *synoikismos* は遺憾なく遂行せられて、或は全住民が一個の都會に集合することアッチカに於けるが如く(傳説によれば英雄テーゼウス<sup>2)</sup>によつて建設されしといふ)、或は多數の都市的中心點の形成さるゝことポイオチアに於けるが如くであつた。

〔一〕 以上の所論に根據を與ふるものはヒミール・クーン著『古代都市の成立に就て』(Emil Kuhn, Über die Entstehung der Städte der Alten, Konenverfassung und Synoikismos) 一八七八年、ライプチヒ版なるが、アルクハルト著『ギリシヤ文化史』(Jac. Burckhardt, Griechische Kulturgeschichte) 第一卷、及びフランク著『ギリシヤ都市國家論』(H. Francoite, La Polis grecque) 一九〇七年、パテルホルン版。

ギリシヤ人の此の *synoikismos* は、これ分散して住居せる者は一旦緩急に際して相互に扶助すること極めて困難なるものありしのみならず、各地方々々にして各自その思ふが儘に任意の目的を追及し行くあらんか彼等の政治的協働は危殆ならしめられるといふ事實に根柢するものであると、ギリシヤ人によつて考へられてゐる。斯くの如く然り、其の都市

1) Colonia Agrippinensis

2) Theseus



發生の原因は外敵に對する防禦と市民的協和との爲めに存したのであつて實際にかの都市共同體が軍事上併びに政治上の實行力、公共心及び公共建造物に於ける藝術行動に及ばしたる貢獻の偉大なるものありしことは、實に古今東西にその比を見るを得ざる所である。ツキユディデス<sup>1)</sup>曾て言を爲して曰く、『今假りに、ラコニアの都スバルタとアッチカかの都アテンとが、其の神殿併びに城郭の礎石に至るまで破壊し盡されたりしとせんか、後世の人スバルタ人が勳業の譚を聞かば、以て荒唐にして信すべからずと爲すなきを保せずと雖も、アテン人が輸せる精力に至りては、その實狀よりも二倍も大にこれを評價すること無きにしも非ず』と。

〔11〕 ツキユディデス (Thukydides) 第一卷、一〇。

人民總員の市場に於ける集會に演說者の聲が行き渡るを得、市民は相互に皆、個人的知己なりといふが如き小なる都市國家を以て、ギリシヤ人は政治的精神の最高發現と爲してゐたのである。プラト<sup>2)</sup>やアリストテレス<sup>3)</sup>が今日に残したる國家の理想圖はその本來の特徴より云はゞ、實に此の現實に基きて形成されたるものに過ぎず。彼等には、人間は市民となつて、又市民は都市國家の中に於て向上すると考へられ、國家を外にしては眞に價値ある人世なしと彼等には思はれたのである。

嚴格に實施されるれば、*symmachie* とは全地方の一切の住宅を擧げて都會の中に聚合すると云ふことである。然れども此の目的を遺憾なく實現し得るものは、たゞ例へばプラタイアイ<sup>4)</sup>とか、テスピアイ<sup>5)</sup>等の如き小なる共同體にのみ限られ、アッチカかの如き比較的大なる地方に於ては、成る程田舎に尙ほ多數の住民が居住した儘ではあつたが、しかし一切の官廳は都市に存し、たゞ例へば小農の一部が、小作人併びに富裕なる地主の奴隸と共に、耕作の爲めに都市の外に定住しつゝあつたのである。これは一朝外敵の襲來するや、直ちに家畜財寶を携へて城内に避難せんが爲めである。裕

1) Thukydides 2) Plato 3) Aristoteles 4) Plataiai 5) Thespiiai

福なる市民にありては、多くの場合都市の内にその家を構へ居たりし外に、田舎にも家を所有して、平時には一年の或る季節を彼處にて過したのであつた。然れどもその如何なる場合に於ても、都市國家に於ける理想的市民なるものは地主と農夫とを兼ねしもの、理想的國家なるものはその市民の食糧を自己の土地に於て生産するものであつた。従つてこの理想的國家に於ては、都會と田舎との間に確執の生ずる餘地がなかつたのである。工業は外國人(歸化人)と奴隸との手に委ねられてゐた。たゞ多くは彼の『長き城壁』によつて都城と聯絡されるたる海港を有する都市に於てのみ、商業が住民の貨財供給に對して樞要なる地位を占めつゝありしに過ぎなかつたのである。

多様の自然的區劃が存して、自主的都市公共團體が最高の政治單位を構成した國に於ては、假令強烈なる國民的意識ありたりとするも、一個の國民的統一國家の發生は到底之を期待し得べからざるは、敢て収々の要なき所。斯くの如くにして其等の都市は相互相守りて、此處に同盟を結び、所謂「攻守同盟」を作つたにせよ、又其の二三都市が此の同盟に於て覇權を掌握するに至ること、デロス海上同盟に於けるアテンの如きにせよ、又ある有力なる公共團體にして他の團體を征服してその領土を併せ、又はその地の市民を抽籤によつて配分したりしものもあつたにせよ、通常、多數の都市が包藏するたる強大なる膨脹力は、遠隔の地に郷都の面影を隈ばしめる植民地を建設するといふことに表はされたのである。斯くの如くにして漸次地中海の岸といふ岸、島といふ島には、殘る隅なくギリシヤの植民都市が撒布されたのであり、此處よりして更に野蠻諸國の内海へまでもギリシヤの都市制度が侵入するに至つたのである。今日のロシア内地即ち古へのブディネルの地には、亡命せるギリシヤ人の建てしゲロノス<sup>2)</sup>と呼ぶ都市あつて、その長さ三十シュタディウムを數ふる城壁は木以て作られ、その都の家屋も又その寺院も同じく木を以て作られてゐたのである。未開なる土着の民は漂泊民なりしに、『このゲロノスの人のみは田畑を耕作し、麵麩を食とし、庭園を有してゐたのである』。而し

1) Symmachie

2) Gelonos



て彼等の祭壇にはギリシャ風に神像を安置し、「三年毎にディオニソスの祭典を営み、杯盤狼籍の大騒ぎを演ずるのであつた」<sup>(11)</sup>。斯くの如く到る處に政治組織の一定形式を造り出させたといふのが、ギリシャ的都市制度が有する文化弘布の勢力であつた。而してアレキサンダー大王及びその後継者の國家に於いてマケドニアの勢力と相結ぶに至つて、それは初めて大なる領土國家の釀母となつたのである。斯くて此の時代即ちヘレニズムの時代に於て漸く、アレキサンドリヤ<sup>1)</sup>、ゼロイキア<sup>2)</sup>、アンティオーキアの如き眞の大都市の發生を見るに至つたのである。さりながら東洋的要素の大いに混和することあらざりせば、果してよく斯くの如くなり得たりしか否かは大いに疑問なき能はずである。

〔一三〕ヘロドトス(Herodotus)第四卷、一〇八頁以下による。

純粹のギリシャ國粹は決して大都市を作り出しはしなかつたのである。多數の人々は全盛期のアテンの都を目して大都市なりと稱するかも知れない。しかしその總人口に關する精確なる數字は今日に残されるものなしと雖も、住民中の二三の階級に對する古き記録を基礎として近時の學者によつて行はれた總人口の推算によれば、アッティカ全體にて二十五萬より六十四萬の間を上下してゐたといふ。それには市民、歸化人及び奴隸を合算してゐる。而してアテンの都はその海港なるピレエウスの町を加ふるも、なほ且つ十五萬人以上の常住者を數ふことを得なかつた。古代より市民數に關して多數の記録があつて、それには二萬乃至三萬と記されてゐるが、それは思ふに實際を穿ちたるものと爲し得べしと信ずる。此の際觀過すべからざる事實は、大部分は山岳の地たるこの國に産する糧食の量が寡少なりしこと、かのピレエウスの港を積換地として營みつゝありし活潑なる中間商業の大部分が歸化人の手によつて行はれてゐたといふことである。斯くの如き多數の人をしてよく都市生活を営ましめ得た所以の唯一のものは、實にアテンがかのデロス海上同盟に於て調貢の義務ある幾百の都市及び島嶼の上に掌握してゐた盟主權を變じて作り出した統治關係であ

1) Alexandria

2) Seleukia

3) Antiochia

つたのである。斯くてアテンの市民階級は一大國家の君主となつた。アリストテレスはこれを數へて、二萬以上の者が常住此の權能によつて活計を立てつゝあつたと述べてゐる。<sup>(12)</sup>

〔一四〕此の計算はボエック著『アテン人の財政』(Boeckh, Staatsverwaltung der Athenen) 第二卷、三、四二頁以下、マロ著『ギリシャ・ローマ時代の人口』(Thaloch, Die Bevölkerung der griechisch-römischen Welt) 五七頁以下、及びマイ

ハ著『古代史研究』(Ed. Meyer, Forschungen zur alten Geschichte) 第二卷に據らざるを得ず。

〔一五〕『アテン人の國家』(Staat der Athenen) 二四。尙ほ注意すべきは、アリストテレスが、その計算の頭初と末尾とに、ア

テンの人口が都市に集中するに至りし理由、實に此の點に存すと力説してゐることである。

次に研究の眼をローマに移さんと欲す。これ實に吾人の問題に對して全然特殊の重要性を有するものである。蓋しその隆盛時代に方りてや、一都市の支配權の能く全世界の半ばを覆ふに至り、その行政組織は此の廣大なる領域に汎ねく都市を建設せしむるに至りしが爲めである。これぞ、己が勢力範圍に歸したる領土を眞に都會化するものといふべきである。實に「市民植民地」及び「ラテン人植民地」はイタリアに於ける都市的支點として、ローマ帝國の勢力伸展を標示したるものにして、前者は海岸に、後者は内地に於けるそれを示したのである。後世更らに「農耕植民地」及び「軍事植民地」なるものを生じたりしが、前者は無産者階級を移住せしめる社會政策的根據より、後者は恩賞として土地を老兵に給與すとの理由より生じたるものである。斯くの如くにしてアウグストゥスの時代に至りては、『イタリア全土は、ポー川に至るまでローマの都市領よみ成り』、吾人が今日呼んで『地方』と稱するが如きものゝ存在を見るを得なかつたのである。今日なほイタリアの大部分に土地所有權者が都會に住居するといふ制度が盛んに行はれつゝあるは其の淵源正に此處に存すと見得るのである。此の制度は更らにイタリアより各地方に波及したのであるが、其の一部はギリシ

1) Bürgerkolonie

2) lateinische Kolonie

3) Ackerbaukolonie

4) Militärkolonie



★の Synokismus 又は今日見る郊外地の大都市への併合と似たる作用（ローマ人はこれを呼んで *attributione* と云つてゐる）により、又一部は皇帝及びローマ實業家の手による都市建設又は所謂陣屋都市への都市権の賦與によつてなのである。ローマ帝國に於ても亦、地方公共團體なるものは遂にその跡を潜めて、公法的地位を占むるものはたゞ都市のみであり、田舎は都市の範圍を構成するものであつた。かるが故に、ローマ人が野蠻未開の諸國に遠くその文化及び言語を弘め得たりし功は、これを此の都會化の制度と被征服者に市民権を賦與したる大度量とに歸すべきものである。

〔一六〕 以下敘ぶる所につき参考すべきは、クーン著『ユスティニアン時代にまで及ぶローマ帝國の都市及市民制』(E. Kuhn. Die städtische und bürgerliche Verfassung des römischen Reichs bis auf die Zeiten Justinians) 全二卷、一八六—

五年、ライプチヒ版、及び『國家學辭書』(Handwörterbuch der Staatswissenschaften) 増冊第二卷、五四四頁以下なるイ  
オハム (Ed. Meyer) 筆『植民、ローマの部』である。

〔一七〕 ローマの人口に就きては、余はウィーテルスハイム著『民族大移轉史』(Witersheim, Gesch. der Völkerwanderung) 第一版、第一卷、一六九頁、ベロツホ著前掲書、三九二頁以下によりたり。此のベロツホの學說に反對してゐるのは Jahrbuch für NO. u. Stat. の第三年、第一三號、一六九頁以下のゼーク (Zeck) の議論なるが、それに對して更らにベロツホは同誌三二八頁以下に駁論を試みてゐる。

ローマの都そのものが世界に於ける最も祝福された土地十萬方哩以上を蔽ふ國家の中心點として、眞箇の大都市に發達したりしは、當に理の當然にして、敢て訝しむに足らざる所。然かも其の住民數に至りては、今日なほ一致せる見解に到達し得ざるは勿論にして、近時の計量によれば七十萬より二百萬の間を上下してゐる。然り而して斯くの如き多數住民の食糧供給にして、もしかのタイバー川による海上連絡が行はれて地方の稅米の都に輸致せられ得るものあらざりしとせば、古代の交通手段によりては到底考へ得べからざりし所である。ローマの住民は独自の營利源を有せず。輸出

1) Lagerstadt

工業の生ずるあるを見ず。否な、多數人の集合する際には必ず小商業及び賦役によりて生計を營み得るものなるが、しかも當時の奴隸經濟はその可能をすら制限したのである。故にローマの住民はアテンのそれと同じく主としてその統治者たる職分によつて生活しつゝあつた。即ち富者はその官職より直接その財を得、貧者は國費によつて『麵麩と遊び』とを給せられてゐたのである。其の各人がわれこそは世界の共同支配者よとの誇りを感じ居たる首府の市民の三分の二以上は、實に國家の施米によつて僅かにその生を繋ぎ行かざるべからざりし状態にあつたのである。而して此の國家施米の受領者數はシーザー以前已に男子卅二萬人の多きを數へたりといふ。今これに婦人小兒を加算し來れば、少くも六十萬人の無産者が存在したることであらう。後世、コンスタンチノーブルが首府となるや、其の地も亦これと相似たる状態にあつたのである。

〔一八〕 後章、第十二講参照。

イタリヤの其他の都市及び地方の人口については十分によく解つてゐない。アレキサンダー大王の後繼者等の建設したる各首都にして、ローマ皇帝によりて確立されし平和状態の下に、その昔のまゝの人口を維持し、或は更らにそれを増加したるものもあるであらうし、又それこれの都市では、帝國の他の地方より可なり多數の人口を招來したるものもあるであらう。が然し吾人は今、曾てツキユディースがアテンに就いて敘べたことが、直ちに此等地方諸市に當て嵌まり得ると思ふ。即ちそれ等が残せる建築物を眺むる時、吾人は到底それ等の都市を高く評價せざるを得ないのである。當時此等の諸都市には眞の建築熱の流行するものあり、愛郷心は小なる自由市さへも驅つて、寺院、柱堂、水樋の美をローマと競はしめるに至り、一個人にして鉅萬の財を擲つて斯種の美建築を營み、公共の使用に供したるものすら決して珍らしからざりしを見る。然かもそれは何れも堅牢なる石造なりしが爲め、かゝる華麗なる建築物の素晴らしき廢墟の多



数が古のローマ帝國の到る處に残されてゐる有様である。かくして古代より存する無数の數字記録が吾人に語りつゝある都市城壁の延長は、いよ／＼以て住民の數を測る尺度たるを得ざるものである。蓋し其の城壁もて圍まれ居たりし土地の幾部分が果して人家にて占められりしかを知り得ざるが故である。

〔一九〕余はマロツホ著前掲書、四七七頁以下、及びフリートレンデル著『ローマ風俗史後説』(Friedländer, Darstellungen aus der Sittengeschichte Roms) 第三卷、(六)、一七五頁以下に據るを以て満足せざるべからず。

然れども其の一度ゲルマン・ラテン民族の中世に入れば、状態は此處に一大轉化を示す。この時代にありても亦、多數の都市ありて、それ等は可なり均等に地方に散布しりたりしとは雖も、それ等の間には否な一部はそれ等よりも古く、地方移住地、小邑、村落、小村の存したりしを見るのである。而して今、其等の村邑を都會に均等に割り宛つれば、都會の一に對して平均三十乃至四十の村邑ありし割合となる。斯かる居住の制度は、都市が古代に於けるとは全然別箇の役割を演ずるに至れる社會制度を指示するものである。

〔二〇〕余が知りゐるは地方團體の數のみにして、一九〇〇年には總計七萬六千九百五十九を數へ、其中三千三百六十は二千以上の人口を有し、七萬三千五百九十九は二千以下の人口を有してゐた。『獨逸帝國統計四年半報』(Vierteljahrshefte zur Statistik des Deutschen Reichs) 第一卷(一九〇二年)、三、八二。從つて村落の數が更に多數なるべきは勿論である。尙ほ本書一二五頁を参照せよ。

固より中世に於ても、都市は尙ほ第一に防禦機關、即ち砦であつた。故にそれ等は何れも強固なる城壁もて繞らされ、地方住民も戰時にはその中に保護され得る權利を有してゐたのである。さりながら此等地方住民は古へのローマ帝國に於て見たやうに、その都市に吸収されてはゐなかつた。彼等は獨自の社會制度と政治的地位とを有し、特別の地方官廳を有する公共團體を組織して、村長あり、陪審官あり、鄉村裁判官あり、獄吏ありといふ有様であつた。而して彼等地方

住民は貴族、王侯、社寺團體の獨自の領主制度の下に屬し、かの都市が獨自の都市法、都市裁判所を有しりたりし如く、それは地方法、地方裁判所の下に隸屬してゐたのである。斯くて都會人は、これを市民1)と稱し、地方人は、これを農民2)と呼んで、兩者は全く峻別されし階級を組織してゐた。かるが故に、古代に於ては都會が田舎を併呑し居たりしに反し、中世に於ては兩者は夫々獨立して平等の權利を享有しつゝあつたのである。<sup>3) 4)</sup>

〔二一〕固より中世の市民權を有する郭外在住民制の間には古代に於けると相似たる發達をなせる形迹の認め得ざるもの無きにては非ず。拙者『十四五世紀に於けるフランクフルト・アム・マイン市の人口』(Bevölkerung von Frankfurt a. M. im XIV u. XV. Jh.) 第一卷、三六六頁以下参照。

斯くの如くにして、それはローマ・ギリシャ時代の世界とは全然別箇の世界である。實に古代と中世との間に存する經濟的差別を眺め來る時にのみ、初めて解し得る世界なのである。ギリシャ及びローマの都市住民は、よしその勞働は常に奴隸又は小作人の手に委ねるたりしにもせよ、しかもなほ土地所有者であり、土地耕作者であつた。クセノフォン3)及びカト4)ト確言して曰く、「善良なる市民は同時に善良なる農民なり」と。然るにわが中世都市の市民に於ては然らず。彼等とて、固より、圍園を作り、數頃の田を耕し居ざりしには非ざれども、しかも第一義よりすれば、彼等は營業者であり、手工業者であつた。都市と田舎とは經濟的任務に於て相分れ、田舎は原料及び食料品を産出し、都市はその原料に加工し、其の地域に産し得ざるものを遠隔の地より商業によつて呼び寄するの働を爲してゐた。而して市民と農民とは都市の市場に相會して相互の生産物を交換した。かくの如くにして都市とその周邊の地方とは一種の自然的強制によつて、一閉鎖的經濟領域を作成し、相互間の分業によつて、自ら供給し自ら充足しつゝあつたのである。都市は更らに追放權及び留置權を用ゐて、己に有利なる關係を人為的に確保せんとする傾向を有し、手工業者は田舎に住むべか

1) Bürger 2) Bauer 3) Xenophon 4) Cato



らずとの原則 (Friedezwang, Meilenrecht) を立てたのであり、手工業者またその原則の貫徹に腐心したのである。

ゲルマン民族及びラテン民族の中世都市はこれ實に田舎の内部發達の自然的産物にして、商工業を營む住民の地方的集合である。かるが故に、それは独自の『生業状態』<sup>1)</sup>を有してゐる。ギリシヤ人及びローマ人の都市の如き單なる消費中心點にては非ずして、高き意味に於いて貨財生産を爲す營利行爲の座なのである。『勞働は市民の飾であり』、その市民はアッティカやローマの市民の如く被征服者の調貢又は奴隸及び小作人の汗の上に生活するものではない。然かも彼等の生存は確證せられてゐたのである。これ中世都市は都市市場の使用をその都市の手工業者組合にのみ許して、他國の競争者に許可することは例外の場合に過ぎざりしが故である。即ち都市は市民皆相等しく生活を營み行き得るやうに努力したのである。

〔二二〕 ロシアの諸都市がこれと全然その趣を異にして、古代の専制君主的都市と甚しくよく似たる地位を占めつゝありとこのこと<sup>2)</sup>就きてはミルコフ著『ロシア文化史摘要』(P. Milukow, Skizzen russischer Kulturgeschichte) 第一卷、一八六頁以下に掲げられし興味深き敘説を参照せよ。

又その成立より云ふも、中世都市の大多數は古代のそれとは趣を異にしてゐる。古代都市は、已に知るが如く、通常、公權の命令の結果であつた。固より中世に於てもそれと似たる現象なかりしに非ず(ハインリヒ第一世の都市建設を爲したる事蹟を見よ)。然れども大多數のドイツ都市は地方公共團體より漸次に生長し來れるものにして、その都市權は如何にも王侯の附與に基くものなりとはいへ、この事は以て其の都市に對し隸屬關係の原因を供するものにては非ずして、寧ろ市民的自由への大道を都市に拓くものであつた。

都市の占めし經濟的地位は一地點に多人數を累積するを許さなかつた。かるが故に此の時代に於ては、吾人は大都會

1) Nahrungsstand

なるものを求めんとするも得る能はず。斯かる言を爲せばとて、吾人は此處にキョルン、フランクフルト、シュトラスブルク、アウグスブルク、レーゲンスブルクの如き古き都が有する高き名聲に瑕をつけんと欲するものにては非ず。從來、これ等の都市が中世に於いて人口六萬を數へしといひ、又八萬を算したりしと稱し、更らに十二萬を唱へしといふの説ありしが、それ等の假定は已に反駁を免れることが出来なかつた。而して今日吾人は、ニュルンベルク、シュトラスブルク、ニョルドリンゲン及びユヒトラントのフライブルクに對して、中世人口調査の結果と、其の他の多數都市に對しては徵稅簿及び市民表に基ける十分信憑するに足る計算とを有してゐるのである。これによつて次の如き都市人口の數字を得るのである。

- リュベック (第十四世紀末) 一一一、三〇〇
- シュトラスブルク〔アルサス州の〕 (一四七三—七七年) 一〇、七二二
- ニュルンベルク (一四四〇年) 一〇、一六五
- ウルム (一四二七年) 一〇、〇〇〇
- アウグスブルク (一四七五年) 一八、〇〇〇
- チューリヒ (一四一〇年) 一〇、五〇〇
- フランクフルト・アム・マイン (一三八七—七七年) 一〇、〇〇〇
- バーゼル (一四七一—五年) 九、〇〇〇
- エーゲル (一四四六年) 七、三〇〇
- マインツ (第十五世紀末) 五、八〇〇

一〇 五千年來の大都會様式



ニョルドリッゲン (一四五九年)

フライブルク(「ユットラントの」)(一四四四年)

フライブルク(「シュレジアの」)(一四七四年)

ユーベルリッゲン (一四四四年)

ドレスデン (一四七四年)

ライプチヒ (一四七四年)

ブツバハ (一四二二年)

マイセン (一四八一年)

三九二

五、二九五

五、二〇〇

五、〇〇〇

四、八〇〇

三、二〇〇

四、〇〇〇

二、二〇〇

二、〇〇〇

右の如くなるが故に、其等は平均して、今日の小都會の尺度をすら越す能はざるを見る。然かもなほそれ等が農業的領地權に拮抗して確乎たる強さを握り居たりし所以のもの、實にその自由なる憲法生活と、その或る意味に於て完成しある社會經濟的組織とに存するものと爲すことが出来るのである。その他に、中央權力の脆弱にして、しつかりした帝都を作り出し得ず、又二三の都市を州廳又は縣廳の所在地として儕輩に抽んでしめ得る徹底的行政組織を知らなかつた事も、其等諸都市に好都合であつたのである。

〔113〕 簡載ならんが爲め、余はイナマ著『國家學辭書』(v. Inama, Handwörterbuch d. Staatsw.) (III) 第二卷、八八六頁以下、併びに Statist. Monatschrift 第一卷 (一九〇六年)、二八一頁に據る。

然るに中央集權的國家の完成と共に、事情は此處に全然一變せざるを得なかつた。かくて吾人は都會制度の近代的发展に到達したのである。近代の國家は到底、獨立的なる特殊權力の存立を默許するの寛容を有するものに非ず。かく

して中世的都市自主權には、貴族及び僧侶の領地制へと同様に、判決が下されたのである。今日の國家の眼中に存するものはたゞ直隸の公民階級のみ。租税割當及び募兵割當を都市又は領土に課すること止みて、各個々の公民が直接に納税と兵役との義務を負ふこととなつたのである。かくして多方面に岐れてゐる職業的吏員階級の手によつて運営される其の行政組織をして十分にその職能を發揮せしめんが爲め、社會は再びその自然的要素に分解せられ、改めて聚群せらるゝの必要に會したのである。斯くの如くにして、都市、小邑及び村落は今や國家に對し、たゞ國家の任務を遂行し行く爲め局地的に區分せられたる團體組織たるの意義を有するに過ぎざるに至り、縣行政及び州行政といふ階段建築に於て中央行政の先頭となれる行政體制に於ける最下級の機關たるに過ぎなくなつたのである。而して各地方協同體はその各自の特殊力量に應じて、國家全體の安寧福祉の爲めに奉仕せねばならぬのである。

さりながら、此等地方協同體が實際的に、そして經濟的方法でその任務を果さんが爲めには、各地方は到底分化せずして止み得なかつた。何れの公共團體もが、己がその承役の一員となりるる國家に對して皆同じやうな働を爲すことは出来ないのである。國內の治安は多數の都市城郭をして無用の長物と化せしめ、中世に於ては各都市何れも要塞を築き居たりしもの、此處に至りては、國家全土を防禦せんが爲めに少數の國境塞を以て足るに至つたのである。以前には各都市何れもその備兵を抱へたりしもの、今や強大なる軍隊を屯せしむべき僅數の衛戍都市を以て事足るに至つたのである。斯くの如くにして、一都會は帝都となり、他は或は州廳、縣廳、地方裁判所、區裁判所の所在地となり、更に他のものは大學、工藝學校、美術大學を有し、或は鐵道線集合點となり、歲市の地となり、湯治場となる等、各方面への分化を示したのである。斯くて各都市は全國に對し、又他の土地に對する一定の機能を引き請けるのであるが、此等の機能は常に必ずしも都市にのみ特有なる性質にては非ずして、地方居住地もまた斯かる機能を脱することを得なかつた



のである。

この現象は特に、近世大工業の完成以降、又交通手段の異常なる増大と完備とを遂げし以來、著しく現はるゝに至れるものにして、爾來國民的全生産は經濟範圍に汎ねく分布せられ、以てその生産各部門が夫々に最も都合のよき立脚地を得る様にと心懸けられてゐるのである。斯くの如くにして工場地區又は家内工業地區なるものが生じ、それと同時に山間谿谷の地及び平原の全地方は化して、半ば都會的性質を帯ぶるに至つたのである。都市の或るものは特殊なる工業及び商業の部門を發展せしめ、遂には其の地方のみならずその國民全體の需要をさへ遙かに超越するに至れるものあるかと見れば、都市の他のものにあつては工業上及び商業上の一切の活動萎縮して、村落の程度にまで轉落し、斯くてその名に結ばれし歴史的の都市權はその生業狀態即ちその人口數と激しい矛盾を生じてゐるものもある。斯くて都市と田舎との間に横はりし差別は撤廢されて行く。即ち一方、勃々として隆起し行く工業都市の附近に於ては、工業設備及び勞働者住宅が漸く郊外地、近在地にまでも建て進み行くことの爲めに、又他方、衰頹し行く「農業都市」の近傍に於ては、その都市が周圍なる田舎に漸次近付き行き、若くは人口稠密せる工業村落の生起することの爲めにある。

〔二四〕 ドイツ帝國には一八九〇年に於て、總計二千二百八十五箇の「都市」があつた。然れども其中の人口十萬以上を有するものは廿六、五萬より十萬までのもの廿二、二萬より五萬までのもの百四、一萬より二萬までのもの百六十九を數ふるのみであつた。然るに人口一萬より五萬までを有する村落及び郊外公共團體の數は五十六を算したのである。——プロイセンにては其の當時、人口一千以下の「都會」四十六ありしが、其の十四はポーセン州に、その十二はシュレジエン州に、十はヘッセン・ナッサウ州に、三つはブランデンブルク州に、西プロイセン及びウエストフアレン州には各二箇を、ザクセン州及びライン地方（シユライデン市は五百十五人）にては各一箇宛を有してゐた。斯かる小都會の存在と相對し他方には人口一萬以上を有する地方團體の數實に三十七の多きを算したのである。——古き都會の一部が如何に落後したりしかば、バーデン大公國に關する次の記録

によりても知らるべし。即ち一八八五年には其の公國は百十四箇の「都會」を有し居たりしが、其中の人口二千以上を有するもの僅かに六十三、然かも一萬以上を算するものに至りては僅々九つに過ぎなかつた。而して殘餘五十一箇の「都會」は如何と見るに、其中の四十二は人口一千乃至五千、四つは五百乃至一千、五つは實に五百以下（即ちクラインラウフエンブルクは四百四十一人、ノイフライシユテットは四百二十七人、アルーメンフェルトは三百四十九人、フュルステンメルクは三百四十一人、ハウエンシユタインは百五十七人）であつた。而して都會一に對して、平均、村落十四が割當ることとなつてゐた。然るに二千以上の人口を有する地方團體は全體に於て百二十九ありて、村落の數は其中の六十六を算してゐる。かるが故に古き都會の中、近世的都市でふ概念に應じ得るは僅かにその五割五分にすぎず、之れに反して村落中、その四分は統計學上、都市に算入せられ得べきものである。

斯くの如き國民的分業的全的變化が行はれ得んが爲めには、人間の同時的移住の行はるゝを必要とする。この必要件にして滿されざらんか、地方都市及び農村にしてその耕地が最早それ以上を開拓し得べき餘地無きに至りたる場合、いよいよ増加し行く人間數に對して如何の策を立て得るであらうか？ 然かもその人口が現存の營利機會に應じて國內に新たに分布され得んことを期すべく、到底古き營業及び居住の制限を撤廢せずして止み得べきものに非ず。即ち營業の自由と移住の自由とが導入されねばならぬのである。

現代の人口大移動と共に、其處に一つの新しい世界が出現した。この新しい世界の眼中には、最早や都市の特權なるもの存せず、又郷土への拘束なるものもないのである。都市と田舎との間に横たはる差別は彌が上にも消え失せて、吾人はたゞ僅かに居住地の廣さの差といふことを見るのみとなつた。中世にありても「都會へ都會へ」の現象無きにはあざざりしが、一度都市に於て一切の手工業が定員に滿ちた時には、それ以上新しき來住者を住まはしむべき餘地がなかつたのである。斯かる場合には、官府は來住の制限と同業組合の門戸閉鎖とを以て之に對抗したのである。今日に至



りては乃ち然らず。營利可能の限界といふ如きものに、少くとも大都會にありてはなほ將來永く之に接することが出来ないものであり、従つて今日の大都會の不斷なる發育は何時に至つて果してよくその終局を見るべきかを明言するに由ない有様である。

吾人が今日眼のあたり體驗してゐる大都市發展の全經過は、その吾人に襲ひ來りしことの、殆んど疾風迅雷の夫れの如く餘りにも豫期せざりし所なりしが爲めに、吾人をしてその本質とその意義とに就て十分明確なる認識を得ることを得ざらしめてゐる。實に其の發展の起源を尋ねるに、その年代は現在の世代の年長者の年齢を殆んど越えては居ないではないか。然り、百年前にありては、今日のドイツ國の領土に於て十萬以上の人口を有したりし都會はたゞ一つ（ベルリン）を數へ得たりしのみ。ハンブルクは辛うじて十萬に達し得たりしに過ぎず。一八五〇年に至りてはドイツに於ける人口十萬以上の都會の數は漸く増して五個となりしが、その増加の原因は主として内部的増加にあつたのである。而して一八七〇年にはその數八となり、それ以後長足の發達を示して、一八八〇年には十五、一八九〇年には二十六、一九〇〇年には三十三、一九一〇年には四十八となつたのである。

今、人口十萬以上の都市を大都會とせば、一八五〇年に於てはドイツ人三十八人毎に一人の大都會人の居たりしもの、一八七〇年には二十一人に一人、一八八〇年には十三人に一人、一八九〇年には已に八人に一人を算し、一九〇〇年には六人に一人、一九一〇年には五人に一人の大都會居住者を數ふる割合となつたのである。而してイギリス、フランス、イタリア、ベルギーに至りては、ドイツに於けるよりもなほ早く、同様の發展を遂げしことは周知の事であつて、植民地諸國、特に北アメリカ合衆國に於ては、ヨーロッパの我が國に於けるよりも一層急速なる發展の跡を示したりしこと、疑ふべきの餘地なき事實である。就中最も長足の進歩を示したりしは英國にして、一八九一年已に人口の三二%

を下らざる多數が人口十萬以上の都會に、二一・七%が二萬乃至十萬の都會に住み、僅かに二八%が地方各州に住んでゐたのである。

此等すべての國々に於ては、人口がいよ／＼三少數の地點に集中し行く傾向あること殆ど疑を挟む餘地がない。然れども此處に演ぜられる過程を稱して、『都雅化』<sup>Urbanisierung</sup>即ち文化人の都會化なりと爲すものあらばそれは極めて不正確な特徴付けたるに過ぎないであらう。斯くの如きは、將にギリシャ・ローマの古代に於てこそ用ひ得たれ、近世の『聚推』<sup>Agglomeration</sup>は、其處でも亦、内的經濟發展の結果が問題となつてゐるといふ限りに於て、中世都市の形成に等しいものである。然しながら此の發展は十八世紀の中葉以降消々停止せざる人口増加の壓迫の下に立つものにして、その人口の増加たる最近二三十年間わがドイツに於ては毎年約一割を算してゐる。此の期間、新らしき都市の建設せられたりしもの極めて稀有なるが故に、既存の居住地に於て、人口は自力の（内的の）増殖によりて、いよ／＼増加し行きしものなること疑ふべからず。例へばかのドレスデンの如き、一八〇〇年には四萬の人口なりしもの、唯だ死亡數と出生數の差による人口の自然増加によつて、一九〇〇年に至るまでに僅に大都會の列に伍するに至つた。即ち十萬の限界を超えたのである。而してその他にもなほ多く斯くの如きものが我が四十八個の大都會の中に存するを見る。固よりその大都會の中、キヨーン・ヒスベルク及びダンツィヒの如き二三のものは、十八世紀の末葉以來プロイセンの全人口又はそれを圍繞せる各地方の全人口の増加したると同一率を以て増加し行かば當然有せざるべからざる丈の人口數を今日は有し居るものである。一八一六年已に約二十萬の住民を有したりしベルリンは、古プロイセン地方が當時有したりしと同様の人口増加率を以てせば、十九世紀末期以前に已に早く五十萬を超過しるべからざる筈であつたのである。

これに依つて觀得る如くに、今日の大都市は、一七五〇年以來増加したる人口がその以前の住民數と相等しい割合で



その當時存する凡べての居住地に配分されたものと考へる場合に、其等大都市に生ずる自然増加に、一部分は其の存在理由を有してゐる。然れどもそれがほんの一部分であることは言ふ迄もない。蓋し其處にはそれと同時に人口の場所的推移も行はれたが故である。斯くて新たに増加せる多數の人間は相等しき割合もて既存の土地に配分せらるゝの結果を生ぜずして、ある土地に於てはその自然増加によるよりも速かに、他の土地は夫れよりも遅く、人口の増加を見るに至つた。そしてその原状を維持してゐるものは極めて僅少にして、その多くは衰頹に赴いたのである。世人は此の改層過程を言ひ表はすべく都會へてふ合言葉を以てしてゐる。然れども世に又、斯くの如くしかく不適當なる言あるを覺えぬのである。見よ、人口が最も多く増加して今日尙ほ増加を見つゝある所、それは實に地方公共團體にして、人口の原狀維持に停滞し、又はそれのみか減少の狀をすら呈しつゝある所、それは實に都會なることを。

斯くの如く時代と共に推移し來りしこの状態は、多數居住地の公的・法的地位と甚しき矛盾を來すに至つた。多數の土地は歴史的權利よりして都市なる名を有し、市制の下に屬しつゝある。然かも其の人口の大きに關しては極めて多數の地方公共團體に劣りゐるもの尠からず。之に反し多數の地方公共團體は、一萬、一萬五千、否な二萬、三萬更らに四萬以上の人口を有して居り、それ等住民はなほ依然として地方公共團體の行政組織の下に立ち、なほ將來もかゝる取扱を受けて行くことであらう。プロイセンに於ては一九〇〇年十二月一日、全體に於て人口各一萬以上の公共團體數三百十八を算したりしが、其の中七十三（即ち二三・九%）は地方公共團體にして、其の中の最も大きな二つ（エッセン縣のアルトンドルフ及びボルベック<sup>3)</sup>）は合して十一萬以上の人口を有してゐた。一八九五年以降その七十三箇の地方公共團體の人口は全體に於て約四割の増加を見たりしに反し、人口一萬以上を有する都市公共團體二百四十五の人口は僅かに二割の増加を示したるに過ぎず。ザクセンに於ては、密集人口の五分の一は大なる地方公共團體に屬してゐるのである。

1) Zug nach der Stadt

2) Altendorf

3) Borbeck

統計學者また夙に、古き都市概念が無意味のものとなし、今日にありては居住地はたゞその人口の多寡によつてのみ區別せられべきものなるを認めたのである。斯くて彼等は、吾人がそれを親しく目睹した此の強力なる動きの中に、謂はゞ二つの異なる世界が葛藤を起しつゝあることを示してゐる。即ち古き『都市』は没落して仕舞つた。夫等はその歴史的使命を果し終りて、今や羸瘦の老齡に墮し緩かに死に赴きつゝあるのである。史的權利に保護せられつゝ、今日もなほドイツに都市の名を冠してゐる土地の半數以上は、最早都市なる名を擔ふの實がないのである。蓋し夫等は都市的生存を營み居ざるが故であり、官廳統計はそれ等を呼ぶに地方都市といふ適切な名を以てしてゐるのである。然るに其れに代りて新らしき社會構成體が、以前の都市の立脚地を利用して出現し來つたのであつて、實にかの地方公共團體の如きそれである。然かも國民生活に於ける其等の任務は古き都市のそれとは別箇のものであつて、其等の文化的使命の此の變化と夫等の驚嘆すべき發達とは密接な關係があるのである。

然れども現代の都市人口累積を特に過去の都會と區別する所以のもの、實にそれが發達の有機的種類に存する。即ち何等外力の強制がそれを作り出したのではない。石造の巍峨たる建物とアスファルトの街路とを滿たしてゐる幾十萬の大衆、彼等又はその近き祖先は自由の意志によりこの地に集まつて來たのである。そは主として經濟的動機に促がされてであつた。而して此處を去らんと欲すれば、何時去るも何人の自由である。しかも、爲めに巷闕空しく、門戸荒れ果つることなく、却つて年々歳々幾千百の新らしき『貸長屋』<sup>ミッテ</sup>を建て、魔の力もて引き寄せらるゝが如く都會に牽引され來る多數民衆を收容せざるを得ざるの狀態である。然かもなほ何時の日にか、この發育の終局すべきかを達觀し得るもの、よく一人もないのである。

斯くの如き多數の人間を養ひ行く可能は、近代的交通技術及び工業組織より生ずるものである。ドイツ國の凡べての



大都會を平均して、一九〇七年にはその人口五一・七％は工業に、二五・九％は商業及び交通業に、八・七％は公務及び自由業に、九・七％は無職業者に（その中七・四％は差益業者及び恩給生活者）、而して最後の四％が其の他の各種營業に屬してゐるのである。而して商業及び交通業者の少くも三分の二は工業の用に使用せられ、もしくは工業人口への供給によつて生活を営み居り、その他の職業種類の一部も更に此の工業従事者を對手としてその收入を得つゝある事實を考量し來らんか、大都市人口の四分の三は直接間接に工業によつて生活しつゝあると云ひ得るのである。故に最も早く大都市の範圍を乗り越えた都市は、それが或は首府たり、或は帝都たり、或は衛戍地たり、或は華浮歡樂の地たりしといふ事情によつて、かくなり得たものとなすやも知れざれども、それは斷然誤謬たるを免れ得ない。蓋し今日の大都市は社會團體に於ける經濟上受働的にして實際上消費的なる部分であると、最近主張されてゐるが故である。

我々の近代都市——實際に都市の名を冠し得るもののみに限るが——は、勞働の場所、最も強力なる國民的生産の地として、確かに中世都市に等しきものである。然れどもその兩者の間には著しき差別の存することを忘れ去ることを許さない。即ち中世都市はその生業狀態を調和的に發達した小工業に根柢せしめて、その小工業の販路は都市市場の直接取引が地方住民を呼び寄せ得る丈の範圍に限られてゐたのである。之に反し近代都市は一方的に發達せる大工業によつて、全國民的市場、否なそれ而已ならず屢々國際的市場を標準として生産しつゝあるのである。而して其の營利の餘地は目下なほ無際涯にして、綽々たる餘裕が存するのである。斯くの如く然り、かの中世都市はその本質より云へば小都會たるを免れ得ざると同時に、この近代都市はその性質よりして、大都會的發達をなす傾向を有するものである。然りと雖も、主として生産協同體たることは兩者其の揆を一にする所にして、之に反し凡べての古代の都市形式は經濟的に觀じ來れば、消費協同體の性質を有してゐる。原始的専制大都市は戰利品及び調貢物の集積點にして、肉食獸がその

獲物を引き摺り來る洞穴と何等擇ぶ所を見ないのである。而してその都市が中心點となりたる國にして大ならんか、都市もそれに應じて其の廣さを擴張したのである。古代に於けるギリシヤ・ローマの二古典的國民の都市は城壁を以て固めたる土地所有者の居住地とも稱すべく、その廣狹は一般に彼等土地所有者が擗取した都市管轄區域の延長に比例してゐたのである。然れども當時の運搬技術の發達微々たるものありしが爲めに、その發育には通常狹き範圍しか與へられてゐなかつた。たゞその例外は海市及び殊に一國の首都であつたが、後者とてもなほ多くの原始的専制都市の特徴を示してゐたのである。

然かも夫等に増して一層明らかなる差別を示すもの、それは政治的差別である。かの専制都市は統治種族を皆集めて收容し、それ以外に住むものはたゞ被征服種族のみである。ギリシヤの都城は自由なる共同體にして、都市即ち國家であり、國政と市行政とは一にして離すべからざるものであり、都市對都市の關係は純然たる國際法的なものである。古代イタリヤに於ても亦、これに類する形像の片鱗を認めるのである。ローマの強勢となるに伴れて、一時は、その統治權の擴大されるといふことは、これ即ち首府の都市權中に他の弱小なる都市を併合することを以て表現せんとするが如き觀を呈するに至つたのである。斯かる事の永續せざりしことは敢て論ずるの要なき所なるが、徹底的なる領地的行政組織を生み出ししなかつたのである。斯くて領土を有する自由都市は各自獨立的に併立して、その内制はローマの古き制度に模してゐた。而して中世都市に於ても、それは政治的自主權への強度なる傾向を示して居り、經濟的に彼等に依從するたる地方公共團體を統御したものは僅か二三少數の都市を出でなかつた。それにも拘らず中世都市も亦、その政治的地位に於ては著しく近代的都市公共團體とその趣を異にしてゐる。それ等は殆んど國家内に於ける國家とも稱すべきものであつた。之に反し今日の都市は、よしその人口よく數十萬を數ふるありとも、政治的には全國家組織の非獨立的



なる一部たるにすぎず。その市政なるものは官廳の監督と指導との下に國家目的を充たし行くものにして、その獨立的活動範圍はたゞ『委任されたる國家任務』の埒外に出でないのである。

論じ去り論じ來つて乃ち知る、わが近代都市は全進化に於て一新様式を示すものにして、吾人が屬する文化範圍に生じたる過去の都市様式の何物も之れに相似たるものなきことを。近代都市を創り出したるもの、それは專制君主の命令にも非ず。人民團體の決議したる Synokismos にも非ず。政治的軍事的の植民にも非ず。更らに又、中世に見たりし都市權交附といふ如き公法的行爲にも非ず。それは實に純社會的發展の深奥より發して、國民的自由の基底の上に成長したるもの、それが近代文化の凱旋式に際して堂々旗を翻し來んとする要求は、かの羊皮の紙の上に捺印したる反古證文に基くものにては非ずして、眞に社會淘汰の事實に根據を有するものである。蓋し此の社會淘汰によつて、近代都市は國民がその精神的併びに經濟的勢力に於て示した最高ものを己れの中に統合してゐるのである。現代の人口大中心點たる都市が有する驚嘆すべき牽引力の據つて來る所以を探ぬるに、それは實に都市が企業的經營及び自由競争でふ地盤の上に立てるその經濟制度によつて、秀抜なる才能を抱ける者はその何人たるを論ぜず、それに最高の報償を與ふる戰場を開きつゝあるといふことに存するものと云はねばならぬのである。然かも實際に臨みては、斯くの如き報償への希望は空しく水泡に歸すること多く、人生の奮闘者にして、あはれ刀折れ矢盡きて中途に挫折するもの、又決して寡ならざるにも拘らず、なほ滔々として新手の群の押し寄せ來りては、其處になほ幾分の餘地の存する限り、勞働の角逐場裡に現はれ來る状態にある。

吾人が今日目のあたり體驗しつゝある發展は、一度はその究極の目的に到達するの期あるべく、その時には十六世紀より十八世紀までの古き都市が示したるが如き固執の状態、いな寧ろ剛直の状態が現出し來るものあるべし。然れども

今日吾人が斯くの如きことに就きて勞せんは、徒らなる杞人の憂たるに過ぎざるものがあるであらう。又凡べての大變革に固有なるが如く、今日の人口の改層に特有なる脈はしき隨伴現象につき今日甚しき悲觀を懷くもの寡ならずと雖も、それは亦空しき徒勞である。大都市生活なるものは、已に技術といはず、學術といはず、藝術といはず、社會的福利事業といはず、一切の範圍に於て豫想せざる程の國民の精力を放出せしめたものではあるまいか。而して吾人は最後に於てわが史的考察の結果として、次の如くに確言することが出来るのである。曰く、『勞働自由選擇の都市なる近代都市は、あらゆる古き時代の都市様式に比して立ち優りたる社會的生存の形式にして、ギリシヤの都城すらなほその例外とはなつてゐないのである。しかも近代都市は堂々たる大いさを有するものあるに拘らず、それ自身にありては何等の意味をも有せず、他を統御せんとするものにも非ず、又、他を擲取せんとするものにも非ずして、國家的に組織される國民の承役的部分として向上に精進し、眞に社會的なる文化發展の軌道を人類統體の爲めに開拓するものである』と。



二 中世都市の社會組織



中世の都市人口の社會組織を知らんと欲せば、先づ以て中世の國家及び社會と近世のそれ等との間に横たはる大なる差等を解しなくてはならぬ。

近代社會が吾人に示すかの人間の大量關係及び交互作用の行はるゝ廣大なる領域は中世に於て殆んど之に接し得べからざることは、現代國家の總括的なる勢力充溢と統一とに接し得ざるが如く然りである。この兩者の存せざりし所以のもの、蓋し他にあらず。眞に國民經濟的なる交通生活の一般利益の中に横はる包括力に缺けるたりしに依るものと云はざるを得ない。

國家に就きては、このことを管々しく證明する要がない。學問上の用語としては、以前には『帝國史』と云つてゐた所で、實際には『ドイツ皇帝史』を説いてゐるが、それは已に古くから、古代國家の包括力は一に懸つて皇帝の人格にあつたと云ふことを承認してゐたのではあるまいか。皇帝暗弱なれば國家崩壊し、明君位にあるあつて、到る處に親臨せられ、巡回職業として——經濟學者は斯かる言ひ方を爲し得るものだが——政治を施す時んば、國運は隆々として榮えたりしこと、吾人の皆よくこれを辨えゐる所ではあるまいか。之に反し近代國家に至りては全く然らず。そは一個特異の位置を占めて、最も俊秀なる名君の去來と風牛馬相關しないのである！歐洲に於て最も不完全なる政治的共同體すら、それが殆んど無政府の状態と稱するも不可なき内的潰亂の渦中に存しながら、尙ほ且つ維持されつゝあることを教へつゝある今日、吾人何を苦んで、それに就いて論議するの要があらう。

次に社會に就きて考ふるに、近代國家の強固は已に、以前よりは一層緊密なる生活協同及び國家所屬員全體の間の多種多様な交互作用なくしては到底考へ得べからざる所なのである。否な管にそのみに止らず。驚くべき交通の發展は社會的大衆關係をして單一國家的境界を越えて、遙かに速くその臂手を延ばさしむるに至つた。そは世界市場を作



り、世界工業を生み、國際的分業、國際的顧客、外國に於ける投資と「利益範圍」を創成するに至つたのである。否々、そのみならず、經濟狀態の同種性が異なる國々の職業階級及び財産階級の間さまへ、假令尙ほ未だ外的結合を要するに至らずとも、已に利益と見解との共同を喚起せしむるに至つたのである。

之に反して中世に於ては、その社會生活は狭く限られたる協同體の内部に動くに過ぎず。小なる地方的集團のお寺中心の利害關係<sup>1)</sup>が優勢を占めてゐたのである。而して國家領域の全般を覆ふが如き社會的連繫は僅かに指を屈するに過ぎず。當時國際的性質を有する唯一の社會的組織は教會であつたのである。

而して更らにかの國家そのものを考ふるに、それを近代國家の豊富なる勢力と對比し來らば、如何に貧弱に、如何に脆弱なる状態であらう。今日政治的協同體の強制力に服してゐる多數の事柄は、中世にありては社會の自由なる自己行動に任されてゐた。最も重要な協同目的はその遂行を狭く限界せられたる地方團體の手中に委ねられてゐたのである。

然り、此等小なる組織的社會集團は充溢せる勢力と重要さとを獲たりしこと珍らしからず。斯くてその結果は多數人をして此等の社會集團を、少くとも頭初からは然らざりし政治的形態、即ち國家内の國家なりと誤り解せしめるに至つたのである。

以上論じたる所、これ全幅的に都市の上に妥當するのである。

そのはじめ農民の居住地たるに過ぎずして、それに城壁を繞らすことによつてのみ纔かに村落より區別されたる都市は、やがて市場及び自由交通の座と化し、それに聯關して又、市民的自由の地となつたのである。而して隷屬的地方住民中の俊秀なる要素の逃避所となり、その擁護の下に、從來社會に見るを得ざりし二箇の新職業階級を早急に相繼いで發生せしむることとなつた。その二箇の新階級とは曰く、手工業者階級及び商人階級である。而して其の二箇の階級は

1) Kirchturmsinteressen

土地所有と相並んで（尤も土地所有より獨立してはゐないのであるが）、此處に新しき財産種類を創成するに至つた。それは即ち營利動産である。

かくて都市は徹頭徹尾、社會的構造である。即ち地方住民の保護地及び逃避所であり、經濟交通の中心點であり、工業經營の集中地にして、又實に實物經濟の支配せる時代の内部にあつて貨幣の流通する緣地<sup>1)</sup>であつた。

ドイツの諸都市が此の都會的基礎の上に立つて、如何なる政治的勢力地位を獲るに至りしか、又それ等が中世末に於て、神聖ローマ帝國が崩壞して生じたる多數の小領土權を超えて如何なる優秀の地位を占むるに至りしか、尙ほ如何にして夫等が領主及び皇帝と對抗して漸次獨立的意味を得るに至りしか、更らに進みては、如何にして夫等が健腕を揮ひて貴族を屈服せしめ、國內の平和を保障したりしか、かくて遂には立つて古ドイツ帝國議會議員としての地位の承認を強要するに至りしかの經過に就きては、世人の已にノに周知する所、縷説の要を見ないと信ずる。

夫等都市に斯くの如き政治的意義を附與したりしもの、そは何であつたのか？ その人口の大なりしが爲めか？ 同業組合が古き土地所有權者階級と永き争鬭を續けて、遂にその貫徹を見るに至りしかの共同組合制度によるか？ 或はその貨幣に富みしが故か？ 抑々又その兵強かりしが爲めか？

余は信ず、此等一切の要因の中その何れにても非ず、少くとも其の中の單なる一個のみではない、と。然り、其の都市が有したりし主要の強さは寧ろ都市をして一旦緩急に際し、當時に於て問題となり得た諸勢力の何れにも服従しなかつた統一的に結合された民力を提げ來つて、以て輪贏を決するを得せしめた其の住民の多幸なる社會的編制及び組織に基けるものであつたのである。

今、都市發展の頂點に達したる時代にして、同時に近時の研究が遺憾なく解釋を與へてゐる時代なる十四五世紀を吾



人の觀察の標準として取り來る時は、一見直ちに當時の人口數の極めて僅少なりしことに氣づくのである。その當時の人口數が調査されてゐる一切のドイツ都市は、今日の概念より云はゞ何れも小都市と稱すべきものである。然るに從來長く、當時の放粗的農業を以てしては到底養ひ行くを得ざる程の多數の人口状態を信じ來れるその眞意を、今日に於て訝しまざるを得ないのである。

〔一〕 前の三九一頁參照

而して此の少數の人口を以てしては、此等の都市の大多數は自己の存立を主張することが出来なかつた。二三年毎に疫病流行し、飢饉襲來し、私闘行はれ、攻撃に遭遇して、甚しき缺陷を來さしめられた。斯くの如くにして夏期二三ヶ月間にして人口の十分の一、六分の一、四分の一が死んで行つたことが屢々であつた。一三二六年より一四〇〇年までの間に悪疫流行の年卅二回、一四〇〇年より一五〇〇年にまでに約四十回を算してゐる。斯くの如く然り、この最近二十三年以降吾人が驚歎と憂慮との的となりゐる都市の間斷なき膨脹は、中世にあつてはこれを見る事が出来なかつたのである。當時とて固より大量の都市來住なるもの無かりしには非ず。即ち一方には、都市に於ては個人的自由を享樂し得ると同時に、有利なる營利状態の存したりしこと、他方には、都市の城壁外にありては斷えざる法的不安があり、且つ地方に於て農奴の壓迫が行はれたりしこと、が、年々歳々多數の都市移入者を招致せしめたのである。都市に於ても、死亡によりて生じたる缺損を補充し、以てその防禦設備を適當に維持し行かんが爲め、夫等移入者を歓迎したのである。しかも兩三年榮えたる膨脹の後には、又新たな反動が現はれたのであつて、一定の人口數を長き年月の間大體に於て安定して維持し行くを得ば、當時の人々は以て十分の満足を感じざるを得なかつたのである。上述の如き人口運動の經過を明らかに觀察し得る所、フランフルト・アム・マイン市に優るものあるを見ない。茲

に於てか、吾人は以下の考察を此の都市に限らんと欲するのである。斯く研究をこの都市にのみ限らんとすることには其處に二重の根據がある。即ち其の一つは、幸なる哉、十四五世紀のフランフルトの人口につきましては、他のドイツの都市は到底及び得べからざる程の範圍に於て、統計的研究を提供する極めて豊富なる行政文書及び記録が残存してゐることであり、其二は、中世に於けるこの市の優秀なる地位はこれを無視しもしくは疑ふを得べからざる種類のものであつて、この都市に於ける人口の研究によつて得たる結果は、直ちに取つて以てこれを樞要なるドイツの國內都市一般に當て嵌むるを得るのであり、斯くてもし他の樞要なる都市の人口に關する正確なる研究によつて反證が舉り來らざる限り、それには確かに他の諸都市に對する一般的妥當性を賦與し得るものなりと爲すことが出来ることにあるのである。

フランフルトに於ては、その住民數の異動は殘存する税表(ベデー帳<sup>1)</sup>)に就いて、十四世紀の半ばより十五世紀の終りに至るまでを精確に探究し得るのである。これ蓋し此の税表には納稅義務者の總體(貧民及び納稅不能者をも含む)を示しあるが故に、それに示されし數の増減がやがて當時の人口數の上に可なり精確な結論を齎らし得るが故である。而已ならず一三八七年及び一四四〇年につきては今日に殘存する市民表よりして當時の人口數を計算し得るが故に、此の計算の前者とそれに時間的に近き税表とを結合せしむれば、其處に住民の總數に對する納稅義務者の數の大凡の割合をも確定し得るのである。而してそれによれば、

年 次	納稅義務者數	人口概算
一三五四	二、六六九	七、八〇〇
一三五九	三、一三五	九、二〇〇

中世都市の社會組織

1) Bedebuch



一三六五	三、〇七二	九、〇〇〇
一三七〇	二、七四九	八、一〇〇
一三七五	三、〇五一	九、〇〇〇
一三八〇	三、〇六〇	九、〇〇〇
一三八五	三、四〇五	一〇、〇〇〇
一三八九	三、二五六	九、六〇〇
一三九四	二、六二四	七、七〇〇
一三九九	二、六七六	七、八〇〇
一四〇六	二、三九七	七、〇〇〇
一四一〇	二、四六一	七、二〇〇
一四二〇	二、三八二	七、〇〇〇
一四二八	二、四三一	七、一〇〇
一四六三	二、五九五	七、六〇〇
一四七五	二、八一七	八、三〇〇
一四八四	二、五二七	七、四〇〇
一四九五	二、六二一	七、七〇〇
一四九九	二、五八三	七、六〇〇

之によれば、その数字は納税義務者に於て二千四百より三千四百を、人口總數に於て七千より一萬の間を上下してゐる。固よりその人口總數を以て調査の結果に依るもの、如くに見られ度くはないのであつて、それは單に説明の便に役立つにすぎないのである。而してその人口はクロンベルク戰役の前年、一三八五年頃その頂點に達し、その後百年間はその十分の六乃至十分の九を上下して、一度もその頂點に達し得なかつた。斯くて一四九九年に至りては僅かに七千六百人を數ふるに過ぎざるの状態となつた。しかも一三八五年より一四九九年に至る期間に五千三百人以上の新市民の移入を見てゐる。即ち此の期の頭初に存しなりし數の約二倍である。かるが故にその都市の内部異動に於て出産が規則的に死亡によつて減少した數を補ひ行きしものと假定すれば、人口はたゞ外より移住し來りし者のみによつても、其の年の終りには尙ほ且つ殆んど三倍に達しなくてはならぬ筈である。然るに實際はさにあらず、其のはじめにありし數の僅か四分の三を算するのみである。今もし、その人口が一三八五年より一四九九年に至る期間に於て、最近五十年間に於ける近世フランクフルトの人口増加率を以て増加し行きしものと假定せば、一五〇〇年には約十萬を以て數ふべき筈であつたのである。

斯かる人口状態の動搖不定なることに接する時は、人間界一切の事物の無常にして不確かなるものあるを語る中世の無数の記録の冒頭に表はれてゐた感傷的な言葉を、痛切に想ひ起さざるを得なくなる。而して今、此の特異なる人口變化の経過と密接の關係を有する事柄として、年齢、性別及び健康状態による都市社會の自然的成層が甚しく不都合なるものであつたことを知るのである。

今、ある人口がそれ自身急速に増加し行き、從つて年少年齢階級が多數に存するものを稱して少壯人口といひ、之に反しその増加の遅々たるものを老衰人口と呼ぶのであるが、かの多數の小兒數を有するドイツ及び北米合衆國は即ち少



壯人口にして、フランスは實に老衰人口を有するものである。即ち平均年齢を見れば、フランスに於ては三十一歳、ドイツにては二十七歳であり、合衆國にあつては二十四歳にも足らぬのである。

斯くの如き意味より言はゞ、中世都市の人口は老衰人口に屬するものである。

十五世紀中葉のニュルンベルク、バーゼル及びフライブルク（ユットラントの）に就いて、存する都市の報告と、フライブルクのそれとを照合せしむれば、中世都市に於ては一般に小兒數が他の年齢階級の數に對する割合は今日よりは小であつたに違ひないとの結論に到着せざるを得ないのである。

吾人が知る一切の事柄より推定して、婚姻の受妊率は中世に於ては極めて大であつたに違ひないが、當時醫術の不完全なりし爲め、小兒にしてその出生するや間もなく死亡したりしもの寡なからず。而已ならずその誕生の第一日に教會に於て行はれし洗禮の爲め命を失ひしもの多數なりしは、今日なほロシアに於けるが如く然りである。之に加ふるに住居の不健康を以てし、爲めに生じたる小兒病が多數の生靈を犠牲に供したのである。故に死産兒及び出産の第一年に死亡したる嬰兒の數を極めて大に見積るも、尙決して不當なることには非ざるべしと信するのである。

〔11〕 此れに就きての極めて詳細なる事實は、ストリッカー著『フランクフルト・アム・マイン市醫術史』(Stricker, Geschichte der Heilkund in Frankfurt a. M.)一八四七年版、八一頁に記しあり。

中世に於けるフランクフルトなる一名望家の歴史を調べんか、その一家は非常によく子供に恵まれた婚姻であつたにも拘らず、しかも殆んど常に僅に一夫婦もしくは二夫婦によつて維持され行き、且つ一家のよく二世紀を繼續し得たりしは極めて稀なりしことを知り得るであらう。例へばロールバッハ<sup>1)</sup>家にては十四世紀末より十五世紀末までに、約六十五名の子供が生れたが(死産兒はなし)、その中にてその両親の死後まで生きてゐたのは僅かに十八人にして、結婚したも

1) Familie Rorbach

のに至つては纔かに十二人にすぎなかつたのである。最も名望あり最も富裕なりし家族に於てすら、尙ほ斯かる急激たる死亡に接するものある時、手工業者及び貧者の子供の運命如何なりしぞ。蓋し思半ばにすぎるものがあるであらう。宜なる哉、都市は假令疫病の流行するなく飢饉の襲ふなくとも、尙ほその人口の安定を保たんとせば、地方よりの多數の移住者を要したることや。

而してこの年齢構成と優るとも劣ることなき不利の状態にありしものは、實に體性の別による人口編制である。

今日にありて已に、成年男女間に男子より女子の數の過剩なりとの事柄は極めて由々しき事柄にして、現時の多數の社會問題中に一個の「婦人問題」をも加ふるに至りし程なるが、中世に於ては吾人は正に婦人の悲境をさへ論じ得る程である。余は固より此處にフランクフルトの總人口に對して、正確な數字を明示するを得ないけれども、一三〇五年の

上町の徵稅原簿には男子納稅義務者と婦人納稅義務者との割合は一、〇〇〇對一、一〇〇と記され、一四七五年のニイデルシュタット及び新町の該原簿には一、〇〇〇對一、一四〇と示されて居る。更に同業組合表には、多數の寡婦が目立つのである。又ニュルンベルクに於ては、一四四九年に成年男子一、〇〇〇に對して一、二〇七の婦人を算し、バーゼルの二教區に於ける四十歳以上の人口中一四五四年には、一、〇〇〇の男子に對して、一、二四六の婦人あり、一五七六年に至りてもなほ、ローシュトックにては男子一、〇〇〇に對する婦人の數一、二九五を數えてゐたのである。

固より近代都市に於ても之に類する變態的數關係なきにしも非ざれども、中世の經濟制度が婦人をその家に結び付けんとしたる排他性の爲めに、今日よりも一層喜ばしからざる社會上並びに風教上の惡結果を免かるゝを得なかつたのである。而して此の惡結果は都市状態が狭少なりしが爲めに、到底此處に或る救濟處分に訴へざるを得なかつたのであるが、それに對しては或る計畫性と健全なる考量とを與ふることが甚だ困難であつたであらう。而して斯かる救濟處分と



して稱すべきものは即ち尼寺の建立、獨身婦人慈惠院の創立及び工業への婦人の使役といふことであつた。その慈惠院とは「受惠婦の家」<sup>1)</sup>又は「神の家」<sup>2)</sup>と稱するものにして、富裕なる市民の寄附行爲になり、多數の婦人に住むべき家と與ふる他に、地代及び其の他の收入をも彼等の生計に當てゝゐるのである。フランクフルトに於ては、その殊に名高きもの五十七を數へ、それには約三百人の受惠婦を收容して居た。其の外二つの尼寺(カタリーネンとワイスフラウエン)には殆んど六十人を收容することが出来たのである。

(1) Mayr's Allgem. statist. Archiv 第二卷、三八五頁以下の拙稿を参照せよ。

(四) なほ詳細は拙著『中世に於ける婦人問題』(Die Frauenfrage im Mittelalter) 第二版、チュービンゲン、一九〇九年版に就きて見よ。

婦人が營利業に參與したりとのことに就きては、吾人は殆んど一切の職業種類に彼等を見ざるなく、婦人の手にて爲し得る仕事のある限り同業組合を組織して居た手工業の間にすら、然りであつた。フランクフルトにてはパリー及びその他二三の都會に於けるが如く、婦人獨占の同業組合は無かつたものではあるが、婦人にして尙ほ此處でも「女親方」として自前の權利で二三同業組合に加入してゐるものに接し得たのである。就中その多かりしは纖維工業及び小賣商業に於てであつた。實に今日にありては最早普通は婦人の従業者を見得ざるに至りし浴場、理髮店等の營業にすら、これを見たのである。一三八九年より一四九七年の間には十五人を下らざる女醫を算し、一三六八年には十一軒の免許兩替店中その六つまでは婦人の手にて經營され、一婦人は木綿關稅の収益賃借人として、他の一婦人は都市公秤局の監督官として立つてゐたのである。

斯かる實例は吾人に教ゆる所極めて深長なものがある。即ち一方に於て、養ひを受けざる婦人の多數が如何なる活

1) Bekinenhaus

2) Gotteshaus

計の手段に走つたかを示すと同時に、他方に於て、都市の人口數の少なかりしが爲め、役に立たせ得べき人の手は、よし極めて微力なるものにもせよ、なほ擧げて共同體の役務に服せしむるの要ありしことを示すものである。

然かも尙ほ第三の關係に於ても亦、中世の都市人口の編制は不都合なものであつた。抑々その第三の關係とは何ぞ。曰く、健康状態に關するものである。長きに渉る肉體上並びに精神上の不具者の數は非常に大きなものであつた。

其の第一は癩病患者にして、此の恐るべき禍害は遂に彼等を社會の外に放逐するに至らしめたのである。此の恐るべき病が正に十四五世紀に方つて、如何に廣く世の中に弘がりつゝありしかは、癩病院の數及びその分布によつて唯だその概略を推し得べく、いかなる小都市とても其の設備に接せざるなき状態であつた。フランクフルトに於てこの目的に使用したるは、城壁外にありし施療院にして、その收容人員が多數であつたに違ふなかつた事は、院專屬の酒場さへあつた事を以てして尙ほ且つこれを察し得ると思ふ。

聾者、盲者、聾者及び精神病者の數も亦、今日と比して相對數に於て遙か多數であつたのである。

固より依然として尙ほ學問に於てさへ、近代は生活力を急激に消耗せしめ、憎惡の念を激發せしめ、強烈なる社會的對立の情を懷かしむるが爲めに、精神病者の増加に特に好都合なる状態にあつたといふ見解が廣く行はれつゝあるを見る。然りと雖も、今、批判的な眼を開いて、その爲めに集められた數字を検し來らんか、斯くの如き主張に對する證明は決して得られてゐないと云はざるを得ないのである。寧ろ多數の事は人口調査に際して行ふ調査(更らに最近では殆んど全く止めて仕舞つてゐるが)の結果増高を示してゐることも、それは調査の精確度が増加したといふ事に歸すべきであるといふ事に一致してゐるのである。而して今、精神病の原因の中に生理的要因と心理的要因とが併立して作用するものだとすれば、中世は此の二つの關係に於て、現今よりも一層大きな危險を提供してゐたといふ事は僅か考へただ



けでも納得が行くのである。即ち過剰と缺乏、暴食と飢餓、淫樂と禁慾といふ如き極端なる有爲轉變が人間の生活の中に頻々として起伏し來り、悽慘なる殘虐の光景、各種の暴行、攻城、虐殺、私闘、惡疫、飢饉、此等が宗教上の迷信や無慈悲にして屢々不公正なる裁判と組んづ解れつして、人心を根底より搖り戦かした。斯くて確乎たる線の上を恙なく滑り行く如き斷えざる發展の靜かなる快適は中世にはあかの他人であつたのである。

而して此等の事柄が人間の精神状態に對して如何なる結果を齎らすに至りしかは、何人の敢てこれを推定せんとするものがあるであらうか。然れども今記録編纂者の許に、中世の後期の數世紀に當り、眞の流行的精神病が人口の全層を襲ひし状態を讀み、黒死病が人心に及ぼしたる印象を窺ひ、小兒十字軍、鞭打教徒巡行、ユダヤ人虐殺、ライン諸都市に於ける舞踏狂の話に接する時、吾人は此等二個の現象系列の間に一つの關係を求めずには居られないのである。かのフランクフルトの行政記録中に、『痴者』即ち「精神不具」(nit wol bei Sinnen)の者に關する記事ほど盛んに現はれて來るものが他にはないといふ事が、以上の事と相一致してゐる。精神病であるといふ概念に對して三十もの異なる言ひ表はし方があるのである。當時の市會計簿には自分の市の精神病者の救済と、外人の同病者の放逐との爲めの費用が經常の項目を作成して居る。而して自分の市の精神病者は塔即ち公私の拘禁所に隔離されたのであるが、一四七七年には更らに病院の傍に、彼等の爲めに特別なる建物が設けられることとなつたのである。

然れどもこの禍害が如何に蔓延し居たりしかに關しては精確なる數字の與へられるものなきは言ふまでもない所なるのみならず、其の當時狂人と白癡とはその何れが數に於て優りたりしかをも明らかにならぬことが出來ないのである。尙ほ跛者、啞者、聾者、癩痢病者に關しても亦、それ等が毒々敍べられてゐるといふこと以外には、何等確言し得るものはないのである。

之に反し盲者に關しては、可なり信憑するに足る數字を示し得る好都合がある。即ち此の不具の頻度は、人口調査に方つて調査されるが爲め、先づそれを述べやうと欲するのであるが、即ち最近の調査によれば、人口一萬中、ドイツにては七人、オーストリア、フランス及びイギリスにては八人、イタリアにては十人、スペイン及びアイルランドにては十一人、ノールウェーにては十三人の盲人がある。然るに中世のフランクフルトにては、一三九九年より一四九九年までの間、十年毎に盲人の數が概略調査されてゐるが、その數は人口一萬に對する二十人乃至四十二人の割合に當る高さであつた(一八七一年には僅に五人)。而して今日にては唯だ僅に歐洲の一民族の間だけに盲人頻度が斯かる高さに達してゐるのであつて、それはフィンランド・エストランド民族である。即ちフィンランドにては一萬人に對して六十九人、エストランドに於ては四十六人の盲人を算してゐる。

中世に於ては、此等各種の不具者の不幸を到底癒すべからざる天命なりと考へた爲めに、彼等の爲めに夫々に特殊の病院を建てることを考へなかつたのである。而して彼等が兎に角丈夫で、他人に危害を與へざる限りは、色々の仕事を課せられたのであつた。しかもその仕事たるや、極めて不適當のものすら屢々であつた。一四四〇年には町の評定官は多數の盲人を、門衛又は夜警として使用したのではあるまいか。然れども其れのみか大多數の盲人は乞丐によつてその生を營まざるを得なかつたのである。この状態は吾人の問題に對して價値なきものではないのである。蓋し今日に於ても尙ほロシアにては乞食が組合を作りつゝあるが如く、中世にはかの不具廢疾者は相寄り相扶けんが爲め、教會を中心とせる組合を結成して居た。そしてフランクフルトにも亦斯かる一組合の成立せるものがあつた。それは「盲跛托鉢僧組合」<sup>1)</sup>であつた。而して斯種の組合が當時廣く行はれたりしことは、寧ろ難症なる不具廢疾者の頻度を語る一證左ではあるまいか。

1) die Bruderschaft der Blinden und Lahmen zu den Karmelitern



是に由つて之を観る、自然の人口にして我が中世都市の人口の如くしかく不都合に組織され得たるもの他に容易に之れに接し得ないことを。即ち婦人數の超過は、彼等が家事及び營利の仕事に使用せられず、又は財團によつて絶えず保護を受け行く間は、經濟の負擔と見らるべきものである。加ふるに營利能力なき多數不具者を以てし、經濟に對する消極的數量を意味したものであるに於ておや。蓋し彼等不具廢疾者は健康者の側より、常に生活の資を要求したのみに止まらずして、更らに看護及び監督の爲めの特別の勞働失費をも要求したが故である。たゞ小兒の數が少なく、従つて人口の増加を甚しく阻止してゐた事は經濟的見地よりして全然不利益ならざる觀を呈してゐる。即ち小兒は經濟よりその養育及び教育の費用を要求する純乎たる消費者にして、従つて小兒の數寡き家族はその他の事情にして凡べて同一なりとすれば、小兒の多き家族よりも遙かに稼ぐことが出来、遙かに節約を爲し得る状態に存するものである。然しながら斯くの如き見解は現代に於てこそ極めて權威を有しをれ、營利機會には缺くる所なくして、働き手に缺けるたりし中世にありては、何等の意義をも有し得ざりしものである。然り、中世都市にとりては小兒數の寡少は大なる不幸であつたのである。

吾人は更らに進んで狹義に於ける人口の社會的編制に眼を轉ずるの時、徒らに皮相なる觀察を下さば、如何にも政治上の門閥及び階級差別なるものが著しく眼に着くものがあるけれども、かくの如きものは十四五世紀に於ては極めて無意義なものであつたのである。此の事は次に敘ぶる所によつて知り得らるゝであらう。

我々の目的の爲めに、全住民を二分して常住人口と、動搖人口とに爲すことの適切なるを覺ゆ。而してこの常住人口中より更らに僧侶及びユダヤ人といふ二個の閉鎖的な集團が浮き出して來るが、此等に就きては暫らく此處に論ずることを措かうと思ふ。其の殘餘の常住者は政治上より分類せられて、市民<sup>1)</sup>と市民權を有せざる市住民<sup>2)</sup>となる。然るに後者

1) Bürger 2) Nichtbürger od. Beisassen

の數は極めて小である。蓋し市の評定官は市民ならざる者のその何人たるを論ぜず、それを故意にその町に居住せしむるを許すべからずとの原則を奉じたりしが故である。かるが故に吾人は此の區別にもこれ以上の注意を拂ふを要しない。而して市民階級は十四世紀の終りに至るまでは公共團體と同業組合又は組織されたる手工業者といふ、殆んど對等の勢力を有するたる二箇の集團に分れてゐた。その公共團體の頭に立つものは門閥家<sup>1)</sup>であつて、それは後世に至つては、Patrizier とも稱された。案ずるにフランクフルトに於ても亦、以前は此の門閥家が國王の役人と共に市政を左右してゐたものと思はれるが、しかも已に古く何時の頃よりか評定官職の三分の一は、かの同業組合に明渡したのである。この門閥家の數は僅少にして、その中に含まるゝ所は普通六十名乃至百名の家族員を有する二十乃至三十家族を出でないのである。そしてもし絶えず他の市民階級及び他國より新らしき血液の導入せらるゝものあらざりせば、その數は夙に一層の減少を驗したであらう。

それを除きては、公共團體と同業組合との區別は何等社會的の意味をも有するものに非ず。殊にそれは市民を營業者とその他の職業種類に従事する者とに分割する事と同様の意味を有するものではない。十五世紀によく行はれた門閥家、同業組合者及び非組合者てふ三分法は同じく主として政治的意味を有するものなのである。

それにも増して吾人の目的に對して重要なものは、職業種類による市民階級の編制である。吾人今此れを仔細に點檢し來る時んば、同業組合(又はその組合員)の數が都市人口の職業行爲に對する適切なる尺度を與へ得るかか如きよく懐かれる見解は先づ以て拋棄せざるべからざるを覺ゆるのである。然り、斯かる見解は狹義の營業生活に對して到底、正鵠を得たるものと云ひ得ざるものである。即ちフランクフルトに於ては、同一組合の中に、極めて異なる種類の手工業の従業者の含まれるものあり。そはなほ忍ぶべしと爲すも、何等の手工業をも營まざりしものをもその中に數へつ

1) Geschlechter



あるを見ること決して珍らしからぬ状態であつた。加之その組合員にして全然何等の營業者とも稱すべきものに非ずして、或は園藝を營み、葡萄の栽培をなし、或は商業又は仲賣を業とし、或は都市の勞役にさへ服してゐる者のあると云ふ組合さへ存したのである。況んや、同業組合組織以外にあつた手工業者の數に至りては決して僅少なるものにては非ざりしに於ておや。

かるが故に、職業による市民階級の組織につきて斷案を掴まんとせば、到底他の方法によらざるを得ないのである。即ち近世統計學の方法に基きて、市民を各人が實際に従事してゐる職業に應じて分類せねばならぬのである。然るに斯くの如き研究は中世に對しては非常なる困難を伴ふものであつて、豊富なる材料の殘存するかフランクフルトの都市記録にありてさへ、尙ほ僅かに一四四〇年の一年のみにつきてなし得るにすぎぬのである。

〔五〕詳細のことに關しては、拙著『フランクフルトの人口』(Bevölkerung von Frankfurt a. M.) 第一卷、二一〇頁以下を參照せんことを希望す。故に此の章には主なる事柄を記すに止めて置く。

全體に於て、一四四〇年には約一千八百の獨立して營業に従事しむたる男子を算する。而して夫等は百九十一を下らざる職業部門に分れてゐる。然かもそれは決して中世のフランクフルトに現はれてゐる一切の營利種類の總數にては非ずして、其の他に十四五世紀に單獨に生じたる職業種類をも、特殊の職業名を以て他より識別さるゝ限り、それに加算し來る時は、約一千五百の名稱を有する表を得るであらう。尤も其の中には他のものと全く同一の意味を有してゐるものも少なからざるべく、凡べてが同時に相併んで世に行はれるたりしものにもあらざるべけんも、しかも尙ほ同業組合名簿によりては到底窺知するを得ざる職業生活の雜多性を物語るものがあるのである。

斯くの如き多數の職業種類の存したりしことは、都市人口の社會的編制に於ける最も重要な要素の一である。それは中世の分業の發展に對する尺度を吾人に與ふるものにして、この中世の分業の獨得の性質と當時に於ける營業の經營方法を觀察し來る時、初めて十分なる意味が評價さるゝものである。

營業の近代的經營方法は資本主義的なものである。即ちその基礎は貨幣を商品に變じ、而してこの商品をヨリ多くの貨幣に代へんとする所にある。企業家は原料、道具、機械、勞働給付を買ひ、而して此等の經營諸要素の共働によつて生じたる生産物を利潤を得るのである。而してその出費の額のいよ／＼高く、資本折返しの度數のいよ／＼頻繁ならば、その利潤は益々大となるのである。

近代的營利行爲が、各個々人に指示する世界は實に廣大なる世界にして、各人は他の一切の人々との競争の渦中に投ぜられてゐる。而して萬人皆、増加し行く幾百萬の人間を養ひ行き得べき新らしき手段を常に案出することを社會に強要しつゝある絶えざる人口増加の壓迫の下に苦しみつゝあるのである。

繙つて中世都市を見るに、それは各個々人の營利努力を到る所に制限した狭き世界であつた。而してその都市の勢力的地位は、その都市が養ひ得たる數以下に住民の數を常に減せしめず置き得るや否やにかゝつてゐたのである。然るにフランクフルトは此の數にまで達せざりし場合多くして、爲めに時々、歳市に方つて更らに他都市の商業仲立人を呼び寄せ來る必要があり、又婦人が職業生活に於て多數にその地位を占めることが出來たのである。此の職業生活はなほ未だ、十七八世紀の都市に固有なる安定の特徴を示してはるすして、職業構成の過程はなほ活潑に進行しつゝあり、後世に至り再び抛棄し去るに至れる種々様々なるものを擱んではるが、然しこの過程は急速なる技術的進歩の標識を帶ぶるものには非ず。蓋しそれは絶えず増加し行く人口の壓迫の下に行はれたるものには非ずして、寧ろ既存の營利機會を使役し得る人力の間に分配するものとしてのみ表はれて來るが故である。



近代的分勞は主として分業である。此の分業に於て中心となつてゐることは、一個の商品を完成せんが爲めに同一の生産場所にて異なる性質の多數の手が共働し、尙ほ多くの場合、之を助くるに原動機械及び作業機械を以てするといふことである。かくて分業の進歩とし云はゞ、それは何れも經營の擴張、必須なる經營資本の増加、普通には更らに之に加ふるに設備資本の増加を條件とするのである。

中世の工業經營は通例、單なる勞働經營である。道具の單純なるが爲めに、營業者は包括的な勞働機巧を必要とする。原料は營業者の手に成る作品を自家の使用に供せんとする註文主より其の營業者に供給されるのが屢々である。かくて其の際に手工業者が儲けるもの、それは勞働所得にして、此の類の多寡は作品の技巧の精疎の度如何によるのである。

中世の分勞は主に職業構成であつた。其の目措す所は、一個の職業部門より多數のそれを作り出さんとするにある。その以前一人の親方が唯だ一人全權を握りたる勞働範圍に、今や多數が互ひに相獨立して、活計を立て行くことゝなるのである。而して技術の進歩とし云はゞ、それは唯だ從來同系の生産物の一群に向けられてゐた勞働手續がその生産物中の或る一種にのみ特に指向せられると云ふことと、此の生産物の爲めの道具が特に作り出されると云ふことと、その新らしき道具の製出が更らに新らしき手工業者の生活任務となると云ふこととである。然れども常に生産の動機は手工業者を或期間一時自己の爲めに使役する消費者より發するものなるが故に、ある一つの貨財種類の生産者とその顧客に對しては、以前全貨財種類の生産者とその顧客に對したるそれと同じ關係に入るのである。

この過程は、此處に一例を掲げ來らば、多分容易に了解し得るであらう。即ち舊式の裁縫匠は布を裁ち、衣類や麻布を縫ひ又は刺し、頭巾や帽子又は毛皮製品を調へ、男女の衣服を作る。然るに十四五世紀に至り此の一つの裁縫師の營業から種々特殊なる職業部門として、剪布匠、帽子製造人、毛皮匠、補綴匠の手工業が發展したのであり、麻服及び婦

人服の裁縫は女子の手に委ねらるゝに至つたのである。

尙ほ今日にありても、資本主義的經營を爲すを許さざる如き勞働範圍に於ては、それと相似たる過程に接することが出来る。例へば學術及び個人的勞務給付の如きものにありて然り。その爲めには唯だ今日の醫家の職業と愈々多數になりつゝある専門醫家とを指摘しさへすればよい。而してその専門家が技術の完成に貢献しつゝあるは、かの中世の工業が同じ方法で努力して効果を擧げ得たものと何等擇ぶ所がないのである。實に最高の個人的機巧が昔の都市に於ける親方に對してあり、又現今の専門醫家に對してあるものは、近代製造業者に對してかの特許權を得たる機械及び取扱方法とかの好く訓練された勞働者團があるのと同一のものである。

近代的分勞に於ては、何れの進歩も勞働者をして獨立の状態に達することを、よ／＼困難ならしめ、必然的に勞働と資本との分裂を條件付けてゐるのであるが、中世の職業分割によつては、獨立的經營の數いよ／＼増加し、個人的繁榮に對する勞働の意味は増大されたのである。

吾人は此處にその職業編制の巨細につきて詳細に論じてゐることを許されぬ。故に夫等を大なる集團に區分すれば、フランクフルトの一千八百名の獨立營業者は左の如くなる。

職業名	人数	率(%)
狹義の工業	一、〇五〇	五八・三
原始生産業	三三〇	一八・三
商業交通業及び接客業	二三〇	一二・八
不定種類の賃銀勞働	六〇	三・三



公務に従事するもの

六〇

三・三

四二六

自由業

三〇

一・七

其の他

四〇

二・三

此の数字は近代職業統計の報告と同一に見做されざらんことを希望する。即ちその数字は市民をたゞその主業によつてのみ分類したりしものにして、市民の多数が副業として營める二個もしくは數個の他の職業部門によつてその生計の一部を得つゝあつたと云ふことを考察の外に置いての結果である。斯くの如く多數の場合に行はれるる聯力の結果は、多くの生産範圍がその眞の意味を發揮せずにあるといふ事なのである。

斯くの如き意味よりして、吾人は原始生産業者中に僅か百三十名の純農民を算入するに止めたのである。實際上よりすれば、尙十六世紀の餘程後までも、殆どどの市民も農業を營んで居つたのであり、假令それ程でなくも尙ほ都市の共同耕地又は近郊の村有耕地にて園藝を營み、葡萄栽培を爲しつゝあつたのである。又同じく、下級の都市公務は六十名よりは遙か多數の人を要したりしが、自分の役の收入によつて實際に生活を立て行くを得たりしもの、數に至りては六十なほその多きを感じるのである。之に加ふるに門、塔、看樓、望樓及び屏の見張りに要した人員は其の數極めて夥しく、それは多くは貧しき手工業者にして、其の役を果しつゝも尙ほ己が本來の職を營んでゐたのである。なほ加ふるに市場商業及び取引に立會ふ半官吏の多數があり、更らに市雇の土工、市附の鍛冶匠、市附の料理人、市有水車場の磨者、市營製麵所の麵粉焼工の如き都市のパンを得つゝあつた營業者があつた。故に其等を總計すれば、都市雇備者の數は、傭兵を別にして、尙ほ且つ約二百人を數ふるのである。而して多數の小さい役が一人の手に合同されてゐたことも稀ではなく、市民が營める營業に於ても亦、それに類似せる職業聯合に接するのである。

然れども都市の職業構成の最も著しき特性とし云はゞ商業の後退といふことである。この現象は、中世に於ては商業はたゞ大都市生産が及び得ざる所にのみ手を延ばし得たものであり、然かも都市の市場にては出來得る限りは、消費者が外地の生産者と直接に取引をなすべきこととなつてゐたといふ事よりして、容易に説明し得るのである。斯くの如くにして中世に於て商業行爲らしきもの、現はれてゐるのは、唯だ僅に生産者消費者兩者の間に、取引をして確實ならしめんが爲めに宣誓せる仲買人(轉賣人)、測定者及び秤定者の一群が入り込んだのに過ぎなかつた。前表に掲げたる商業交通業及び接客業に従事する人二百三十名の中、その僅か七十名が小賣商業及び行商に屬し、十五名が卸賣商業に従事するたりしに過ぎず。しかも尙ほ此の少數の卸賣商人なるものも、今人の普通考ふるが如き常設の商店を有する富裕なる商人ではない。彼等は市の評定官となり得る資格ある家柄の家族のものにして、現今にあつても屢々見るが如く、富豪が一時取引所で投機を爲すそれと等しく、大部分は土地所有權、地代、年貢より成れる彼等の財産の一部を、二三年の期限で、會社式に經營されてゐる商取引に投資したのである。斯くの如くなるを以て、吾人は彼等を呼ぶに金貨業者の名を以てすべきか、農夫と稱すべきか、或は又、商人中に數へて可なるべきかに窮せざるを得ないのである。

今彼等を擧げて商人に算入すとも、近代的の意味の全商業は獨立營業をなしつつある人口の僅かに5%をも包括しなかつたのである。今これを一九〇七年に見るに、その一七%以上の多きを要求してゐるのである。商業交通業及び接客業を總括して中世にあつては一二・八%なるに、一九〇七年には三〇・五%である。之に反し中世に於ては、工業に於て直接生産的なる職業種類及び原始生産に従事したりしものは人口の八〇%を算するたるに、一九〇七年には人口の僅か四七%がそれに屬してゐたのである。斯くの如く人口の五分の四が自己の力を働かせ、自家の道具を使用し、又屢々自己の原料を用ひて、工場、田畑、庭園、葡萄山にて生産の爲めに働き、而して彼等の勞働の收穫は凡べて集めて彼



等の有に歸するといふ點に、中世の都市經濟に強味の存する第二の要素が横たはつてゐるのである。事態已に斯くの如し、現代の惱みとなりつゝある分配的職業種類のかの寄生的繁茂なるものは、中世の社會にあつては到底その餘地がなかつたのである。

この職業編制に聯關せしめて、吾人は更らに、社會的見地よりすれば特殊の位置を占めてゐる定住的なる人口の二成分に就きて考察せんと欲する。それは即ち僧侶階級の人々とユダヤ人とである。

僧侶階級は十四五世紀に於ては八十五人乃至百人の僧侶、八十人乃至百人の僧侶、四十人乃至五十人の尼僧及び三十人乃至五十五人の他國勳爵士組合、寺院、僧會の代表者を有し、従つてその總數二百四十人乃至三百人を算したのであつた。然るに此等多數の人員の生存は確實なる寺扶持又は寄進によつて確證されて居り、時に例へば托鉢僧が市民の喜捨に訴ふるものありしに過ぎざりしを以て、一見してさう思はれ得た程には、其の多人數が都市の經濟に對して決して負擔とはなつてゐなかつた。されど他の側面より考ふれば、彼等には租税の免除があつた爲めに、本來よりせばその財産に應じて輸すべかりし都市支出への寄與を寸毫もなしてゐなかつたのである。

ユダヤ人團は一三六〇年より一五〇〇年に至る間に於ては、曾て三十家族に達したりしことを見ず。稅表によつて毎年その家族の數を算し得る此の期間中、それはその現在數を激しく變化させて居るのであつて、一四四〇年の頃には、僅か六乃至九世帯を算するに過ぎなかつた。而して彼等が唯一の營業と稱すべきは金貸業及び質屋業にして、商品商業を營むもの中世のフランクフルトに於て一人のユダヤ人も見なかつたのである。

さりながら、人もしこの二個の人口の特殊集團たる僧侶及びユダヤ人の經濟的意義を評價するに餘りに小なるあらんか、それは甚しきに誤謬に陥るであらう。此の經濟的意義なるものは、たゞ單に彼等が都市の營業に對する購買力旺盛なる顧客なりといふのみに止まらずして、彼等が全住民に對する信用給付者なりと云ふことによつて更らに大なる重要性を有するのである。即ち僧侶はその夥しく入り來る現金を内地の不動産に對する定期金賣實に投資し、かくして貧者にも家屋を所有せしめ、獨立の事業を營むを得せしめたのである。ユダヤ人は再々襲ひ來る厄災に際して、受信用者にとつて常に必しも好意的なりとはいひ得ざるは勿論なるも、しかも兎に角當時にあつて可能なる唯一の形式によつて消費信用の給付を爲しつゝあつたのである。

次に究めんと欲するは、動搖人口、即ち今日云ふ労働者階級、中世にありて奴婢と稱されるものである。然か現代に見るが如き内地の常住的労働者階級なるものは中世にてはこれを見ることを得ず。假令存したりとするも、それは唯だ極く少數の日傭取と葡萄園労働者といふ形を取つたのにすぎなかつた。他地方より來住せる職人、農僕及び家婢の數に就いては、フランクフルトの材料よりしてはそれを定めることが出來ないのである。かくて余は今ニュルンベルクを範として、一四四〇年に對し其の數を一千五百乃至一千六百人と假定したのである。然れどもフランクフルトは當時工業的發展に於て到底ニュルンベルクに一籌を輸さざるを得ざる状態にありしが故に、この推定は確かに尙ほその多きにすぐるものがあるであらう。

住民の財産分配につきては直接之を調査することは出來ないが、フランクフルトに行はれるたる財産稅 (Hofz) に對する表の殆んど全部が今日に保存されてゐるのであつて、これによつて少くとも當時の財産分配の概略を描き出し得るのである。今一四四〇年に近くして、しかも完全に保存されてゐる一四二〇年の稅表を我々の考察の爲めに選び出せば、先づ第一に認め得る事柄は、その稅が各世帯が支拂はねばならなかつた十二シリング (四マルク二十フェンニヒ) と云ふ一定の額 (Herdseilling) と、各個々の財産物件に應じて段階を定め變化のある稅額、即ち動産にては一分三厘、不動



産にあつては殆んど七分といふ法外の額に達したそれとから成つてゐたといふ事である。其の外なほ注意すべきは、財産の可なり多額の部分——一種の生存最低限度——が課税せられずしてありし事實にして、即ち各戸に對し住宅の第三部分、馬一頭、牝牛一頭、家財、衣服、銀杯二個併びに穀類、酒、薪、菊林、菓の一年分の貯へがそれであつた。

【六】一八九四年のライプツヒ歴史家會議に宛てし祝文たる「歴史に關する小論述」(Kleine Beiträge zur Geschichte)中に掲げたる拙稿『中世に於ける二種の税法』(Zwei mittelalterliche Steuerordnungen)に叙べたる一四七五年の財産税法を參照す。

斯かる事情の下に、一四二〇年に於て、納税義務者二千三百八十二人中、

納税義務者	割合(%)
貧窮その他の理由にて免税となれるもの	九四
一〇ターレル(三マルク五〇)までを課税されしもの	三八七
一〇ターレル乃至一リブラ(ニヒル—七マルク)の課税をされしもの	一六・三
一リブラ乃至一〇リブラ(七マルク)の課税をされしもの	五一・二
一〇リブラ——五〇リブラ(三五マルク)の課税をされしもの	二三・四
五〇リブラ(三五〇)以上課税されしもの	一三二
	五・五
	一七
	〇・七

而して百リブラ以上を納むるものは僅かに七名にして、最高税額即ち一四五リブラ、今日の金額にて一千十五マルクを出すものは二人である(ヨハン・フォン・ホルツハウゼン<sup>1)</sup>とハインリヒ・ウイッセ・ツム・ウイッセン<sup>2)</sup>)。これは可なり多額の税額と云はざるを得ない。假令そは中世に於ける貨幣價值の高かりしことを全く考の外に置いて

1) Johann von Holzhausen 2) Heinrich Wisse zum Wissen

さへ、尙ほ且つ然りである。此事は中世都市が不規則に徴収した財産税によつて市民をその能力の極限にまでも誅求した事を見來る時のみ、始めて解し得る所である。然しながら一四二〇年の租税分配の中に示されてゐる財産分配が今日のそれと異なる點は、これを僅かな數語にしてよく云ひ表はし得るのである。曰く、中小財産の優勢、納税不能者及び非常なる大資産家の少數といふこと、即ち之れである。生活需要を超えて財産を所有してゐたもの、數は固より僅かに三五%を算するにすぎざりしが、其れ以外に已に述べたる十二シルリング(Herschilling)を納めたる多數の人々の存したりしを忘るべからず。而して彼等の多くは確かに可なりの生活を営みつゝあつたのである。蓋し彼等の厩舎には一頭の牝牛と一頭の馬を養ひ、其の二頭の爲め枯草、燕麥、菓は十一月半ばの聖マルチン祭までの分が貯へられ、更らに衣服家財に加ふるに、次の收穫までを支ふる麵麩、酒、薪の蓄積を以てす。然り斯種の人々は、これを以て貧民と目せんは大いに當らず。殊に彼等にしてなほ手工業の儲けの爲めに手が空いて居る場合には、今日フランクフルトに於いて所得税の最低額を賦課されてゐる人の多數よりも一層裕福な活計を立て居たりしものあるべきが故である。

【七】此の見解に對して近來反駁を試むる者なきにあらねど、余が如上の見解は、拙著『フランクフルト・アム・マインに於ける人口』第二卷の示が如く、徵税原簿に準據して確實に立論せられしものにして、同市にては單に Herschilling のみを納め居たるにすぎざりし人々の多數もなほ寺領地租を課せられたりしを見れば、彼等が土地を所有しゐたりしことは之れを斷するに難からず。一四〇六年 Herschilling を納め居たりし上、町の納税義務者四百十一名中、百九十一人は家屋又は土地の所有者にして、彼等が經濟の所得よりして支拂ふべき地租は驚くべき額に達するものがあつた。

然しながら中世に於ける財産所有が、全然土地所有者にのみ限られてゐないといふことは、各種の租税階級への手工業者の配分状態が全人口のそれと非常によく似た構成を取るものあり、唯だその僅かに異なる點は最下の租税階級にては其の數少なく、最高の階級を全く缺きゐるといふことよりして十分に推し得るのである。然るに三〇リブラ乃至四〇リ



ブラの租税を納付する親方に至りては決して稀有ではないのである。茲に於てか、當時のフランクフルトの營業の上に、一般に「手工業は黄金の地盤を有す」と云ふ古き句を當て嵌めやうと欲する者があれば、かの財産税簿はそれと相悖る所を見ないであらう。

中世と近代との租税状態の比較對照は何れも、殆んど打ち越え難き三個の困難と戦はなくてはならぬ。即ち(一)は租税制度の相等しからざることである。蓋し直接主税の計量基礎をなすものは、中世にあつては財産、現代に於ては所得なるが故である。(二)は中世と近代とに於ける貨幣價値の差異である。而して(三)は中世の税額の背後に存し居たる財産價値を貨幣もて見積り得ざることである。この第三の困難は吾人が研究の對象となりたる時代の末期、即ち一四九五年に至りて始めて除かれ得たのである。即ち其の時に至りて財産税は全部貨幣に見積られた財産の上に不變なる歩合を以て課せられて規則的に反復される租税となつたのである。しかも斯くの如き全く近代的な種類の財産課税の實行は、そのはじめに方りては極めて缺點の多いものであることは明白である。然かも尙ほそれをしも意とせずして、此の制度に従つて最初に行はれた一四九五年の評定によつて生じた都市住民の間に於ける財産分配に關する二三の數字を此處に報告するのであるから、吾人は何時も最少の數字を取扱ふべきであるといふ事に留意せんことを希望せざるを得ない。而して當時の納税義務者百名中、

課税財産	今日のマルク本位にては	全人口に於ける割合(%)	手工業に於ける割合(%)
アルデン(金貨)			
二〇未満	一四〇未満	四五・七	三三・七
二〇—一〇〇	一四〇—七〇〇	二六・八	三二・六
一〇〇—二〇〇	七〇〇—一四〇〇	八・二	一一・五
二〇〇—四〇〇	一四〇〇—二八〇〇	五・九	一〇・六
四〇〇—六〇〇	二八〇〇—四二〇〇	二・九	四・三
六〇〇—一〇〇〇	四二〇〇—七〇〇〇	三・二	四・三
一〇〇〇—二〇〇〇	七〇〇〇—一四〇〇〇	二・二	二・〇
二〇〇〇—五〇〇〇	一四〇〇〇—三五〇〇〇	二・三	〇・八
五〇〇〇—一〇〇〇〇	三五〇〇〇—七〇〇〇〇	一・一	—
一〇〇〇〇以上	七〇〇〇〇以上	一・七	〇・二

此の表に於ても亦、手工業者が中位の財産段階に於て高き相對數を示すといふことに特徴が現はれてゐる。然れども人もし適度な富裕階級が斯くの如く廣く分布してゐる原因を、たゞ躍進的なる工業經營の上へのみ歸して、當時の親方なるものを平均して、巨額な經營資本を有するたりと推測せんとするものあらば、それは確かに迷誤に陥れるものであらう。然り、當時親方の若干の者、例へば木綿織工、屠獸者及び一部の麵麩焼工も亦、さうであるが、彼等の許では、已に早く單純なる賃仕事より代價仕事への過渡を完了したものが無いではない。従つて彼等が發展せんと欲せば、到底独自の營業資本を必要とするのである。これと同じ事は又、常に都市から都市を其處らぢう漁り廻つて、遠くフルダ、ノエルドリッゲンへまでも、その市場を求めたる多數の金屬工、二三の製革匠、本履工及び其れに類似せる手工業者にも當て嵌るのである。然しながら大多數の手工業者に至りては、彼等は少しく大なる仕事となれば何れも、顧客が原料を供給し呉れることを當てにしてゐたのであつて、それは當時の都市の計算よりして容易に推察し得る所である。



之に反して手工業者の大部分は土地及び家屋の所有者より成つてゐた。その家屋所有者より成りし事は、今日保存されてゐる一四三八年の家屋臺帳によつて之れを知り得るのである。惜しい哉、その臺帳は必要な完全性を排除しゐる爲め、吾人をして統計的攻究をなさしむべき便を絶つてはゐるが。手工業者所有の家屋の多數は小さくて、更らに課せらるる地代、土地定期金、差益等のありしに拘らず、しかも尙ほその所有者の經濟的生存に對して確實なる支持を與へてゐたのである。然るにそれが土地所有となれば、一層この事が當て嵌るのであつて、その土地所有は單にフランクフルトの境域内のみ限らず、殆んど凡べての外圍に横たはる村落に及び、ウェッテヌウの沃野にまでも散在して、専ら自家耕作に供せられてゐたのである。かるが故に大多數のフランクフルトの人はその當時にはその活計の大部分を、依然農業より得つゝありしものと云ひ得べく、市民的工業はたゞまことに有り難い現金の餘分収入を與へてゐたのに過ぎざりしものである。この二重の經濟的基礎こそ、實にかの不安なる時代にありて、都市人の生活に比較的大なる保障を與へてゐたのであり、そは更らに引いて、單に己が腕一本にて生活してゐた者もそれと無關係に止まり得なかつたのである。如何にも、此の考察は唯だ永續的に定住しゐる都市人口に對してのみ妥當してゐる。時々、接み込んで來た移住者の激しく變化する狀況は、どうしても顧慮してゐる譯には行かなかつた。

今や吾人は我々の遍歴の終點に達した。此の最後に到達した地點に立つて顧望すれば、人口の自然的成層には種々の不都合あるに拘らず、職業階級及び財産階級の上に築かれたるその社會的結合は徹底的に健全なる相貌を示しつゝあるを認め得るのである。然り、都市的經濟は市民の大部分にその獨立を助け、生産的職業階級を幸し、財産分配及び所得分配の間に餘りに險峻なる差等を示さなかつたのである。

此の狀態の價値は、吾人が一度眼を都市の城郭を越えて平原の上に投ずる時、十分明かに解し得るのである。田舎に於ては、當時なほ土地所有權が唯一の財産形式にして、農業が唯一の職業であつた。しかるにこの土地所有は貴族及び教會の手中に、少數の大集團に合一されてゐた。農業的勞働は物的に又時には人的にも不自由なる農民——即ち土地より離るゝことを得ず、軍務より除外されて、多くは悼ましき壓迫の下に苦しみつゝありし階級の肩の上に置かれてゐたのである。

都市にありても、固よりその生活は未だ全然土地の耕作より脱離しゐたりしに非ず。然れどもこの時已に鋤耕の收約的形態を取るに至つた農耕と相併んで、多方面に分歧して驚歎すべき多様の發展をなせる獨立的職業行爲の範圍が花を開くに至つたのである。そは即ち工業であつた。この工業は其の性質上、小經營たらざるを得ざりしと雖も、そは何かしら出來るから何かしら値打があるのだといふ不羈獨立にして勤勉なる人々の強力なる一階級を作り出すのである。生産者は自らの腕を揮つて働き、自己の道具を以て働き、否、已に自己の經營手段を使用して仕事を營むことも珍らしとしない。彼等の働くや、通例廣き市場を目的とするに非ずして、己が同市民及び市の周邊にすむ近郷人の狭き顧客範圍を目標としつゝある。斯くの如くにして貪慾なる中間商人輩をして紛然彼等と彼等の製品の使用との間に立ち交りて、利を射るの餘地なからしめてゐるのである。

工業が遂に不十分となりし所に、商業が關係して來るのであるが、その最初は市場販賣の性格的形式として表はれる。中世の市場制度に於ては、比較的多數の半官的仲介人を要した。即ち多數の宣誓したる下買人、鹽・石炭・麻布の測り手、擔夫、天秤棒擔ぎ、檢秤吏、巡察官、倉庫人足、酒拔取役、酒僕、荷車曳、火夫、使丁、船夫が居り、兩替屋はその臺机を、代書はその机を並べて、多數の文盲者の爲めに代筆の勞をとる。而して此等の人々の多數は一年のある期間は慘憺たる生計を営みゐるが、六箇月毎には一度歲市立ち、其の間には或は競技會の催さるゝあり、或は國會の開かる



るあり、或は皇帝選挙の行はるゝありて、多數者に十分に仕事と麵麩とを與へてゐたのである。特に歳市の期間、居室又は店舗を貸し、多數の外來者の宿をなすことは、當時のフランクフルト人にとりて經濟上非常な意義を有してゐたのである。

●●一つの營利方法にして人をして十分にその活計を立て行かす得ぬ場合には、その人は多數のそれを合せ行ひ、或は他の職業を掴むのである。蓋しその時代に於てはなほ未だ營利生活が同業組合方式の爲めに剛直化せず、骨化しなすして、絶えず新らしき職業種類が陸續として簇生しつゝあるものであり、古き手工業が意地悪き閉鎖主義をとらんとするが如き素振りを示すものあらんか、都市評定官はそれに干渉して、これに公益に害ある條文を撤回させるが故である。

此の經濟的並に社會的基礎の上に、中世はその種類に於て完璧なる勞働と政治的協同體との組織を築き上げるに至つたのである。而してその勞働の體制を支配するものは實に二個の理念にして、一は曰く、共同福祉の理念、他の一は曰く、如何なる勞働者も自己の手を働かせて營む工業の上に、自己一家の活計を支へ行くべきものなりとの理念である。この二個の理念の前者の當然の結果として、都市に於ける工業經營の權利は共同體が各個の親方併に組合全體に賦與して、同時に夫等に義務を課した一つの官職と見らるゝに至つたのであり、第二の理念の歸結として同一職業に従事する仲間の裡に一般的な平等と友愛とが要求されるに至つたのである。斯かる都市經濟を支配しつゝある思想と互ひに相參差して、政治的範圍に於てもそれと相類せる二個の思想が存する。即ち曰く、一は、共同體は市民の何人たるを問はずこれを保護し、庇補し、それに『責任を負ふ』と云ふ思想にして、他の一は、市民は各自その都市の危急に際し己が生命財産を賭してこれを防護すべきの義務ありと云ふ思想である。かくて前者の思想よりは市民階級の連帶責任觀念を生じ、後者のそれよりは一般的防衛及び納税の義務を發生せしむるに至つたのである。

此の連帶責任觀念即ちかの一般友愛の念は一家一門、手工業者、職人等が他よりも一層密接に結合してゐた多數の小さい組合、同業組合、部屋仲間、兄弟組合の中だけに停止してゐるのではなかつた。それは都市の全市民を打して誓約に立つ一致團結たらしめ、其處に各人をして『一旦緩急に際しては、都市の中に苦樂を共にせん』との決心を懐かしめつつあつたのである。

都市行政の規定的行爲が文書に體現されてゐる多數の規定又は市參事會決議を手にしてこれを檢すれば、吾人は殆んど凡べての個人が政府の爲めにその地位を得、各人にはある一定の義務——非常に細々した種類のそれも屢々であるが——が課せられてゐる狭き小世界に接するの思ひがするのである。今、近代の都會人をして、許さるゝ所の極めて寡くして、禁ぜらるゝ所の甚だ多く、束縛と制約とに満てる此の世界に思ひを致さしむれば、彼等は必ずや驚嘆して轉々長息を洩らさずして止み得ぬであらう。然れども彼等が己が見地を昂揚してかの公共團體立法の據つて來る最高原則を探究し來る時は、職業の理念は共同體に對する義務と結合して離れざる人生の任務にして、各人何れも其の據る所に立つて應分の力を輸すべきものであると同時に、斯かる勞働を提供する人にはその何人たるを論ぜず、その生計を確保する努力であると云ふ事を解し得よう。而してかの手工業立法が如何に巧妙なる處置を捉へて、一人の親方が他の親方と同等の活計を立て行くを得せしめしかば、同業組合規定を繕かば、隨所にこれが證左を得ること決して難くない。而して世間より餘りに注意を支持はれずに来たことは、都市も亦、市場及び取引の爲めの多數の半官吏を任命することによつて、同様の原則を追求してゐると云ふ事實である。それ等半官吏は一定の條項に就きて宣誓をなして居り、公衆より手数料を支拂はるゝが、各人平等に利得すべきこととなつてゐる。即ち擔ぎ人足又は枴量り人は終日働き夜に入りて一同一所に會する。各人はその儲け得たるものを一つの錢箱中に投じ、かくて後それを等しく凡べての仲間の間に分配するので



あり、病人又は稼働不能者はその半分の分前を得るのである。又或る布測り人ありて、商人の爲めにその布の尺を測りるとせんに、其處に他の測り手の來るあらば、次の布はその新たに來れる測り人の手にて測るべきこととなり居て、次々と交代し、『何人も他の人の邪魔を爲さざるやうに』なつてゐるのである。

殆んど一切の住民（統治者の一族を除きて）は官權的職業編制の下に隸屬し、共同組合式に組織され、あらゆる生活關係に於て共同組合的指令に服さねばならぬこととなつてゐる。而して此等の規則が外的な儀禮にまでも干渉し、恐ろしき強辯を用ゐて、武器の使用と不躰なる言辭の使用とを禁じて居るが、これは他面より善意に觀察し來れば、兎角粗野很戾に傾き易き人々に平和にして和氣霽々たる共同生活を強ひ、彼等を社會の統體に融合せしむべき大規模なる教育の一吹なりとも解釋し得べきではあるまいか。

斯くの如き満足なる經濟關係の確乎たる基礎の上に立つ社會の組織に、中世都市の強さが存してゐたのである。都市はその住民の數の僅少なりしにも拘らず、田舎に對して優越の地位を占めてゐたのである。蓋し、都市に於ては、人が貴ばれてゐたが故であり、田舎に於けるよりも一層その價を認められるたりしが故であり、又個人は『一人の爲めに萬人が、萬人の爲めに一人が』てふ原則に従つて、進んで協同體への奉仕に挺身しむるたりしが爲めである。

然るに、それにも拘らず、それは一方的のみにみ先走りすぎて或る意味よりすれば利己的とも稱すべき發展といはざるを得ぬものがある。而して吾人はそれに對して此處に一言を爲すの要を見る。斯種の發展の生ずるを可能ならしめし抑抑の原因は、都會と田舎との間の社會的差異がいよいよ益々峻険に完成され行きしこと、都會が田舎を廣い範圍に於て經濟的に己れに依從せしめたこととだけ存するのである。而して斯くの如き發展をしてその極點に達せしめんか、其の極點に田舎をして政治的に都會に從屬せしむるの結果に立ち至つたであらうが、かのフランクフルトは地方公共團體

を蠶食して意識的に如上の目的に進まんとしたる少數のドイツ都市の一に屬してゐるのである。

然しながらドイツに於て此の都市の發展が一方的にして不完全なるものに止まりたる事の中に、何故に都市が其の頭初に於て裝つてゐたやうに、國家に對して結合的要素とはならずして、寧ろ逆に解體的要素となつたか、又何故に十七八世紀に入りては、其等をして遂に其の全盛の頂點より、先きに其等が其處に到達するまでに要したる時間に比すれば更らに幾層倍の急速度を以て轉落するに至つたかの主要原因が横はつてゐたのであると、余は思料するのである。

今日にありては都市は最早それ自身閉鎖したる協同體にては非ずして、一層大なる統體、即ち國家的に組織せられたる社會の一承役的部分である。而してそが斯かるものとして、社會的勞働の最も光彩ある結果を己れに收めつゝあるのであるが、然かも吾人が到底閉却し得ざる事實がある。それは今日の都市が現社會の社會對立、その不安及びその不満をも最も慘ましく表現したと云ふこと、即ち之れである。人誰れか、中世都市の社會組織がその市民階級に於けりしが如く、個人にも又國民統體にも等しく好都合なる勞働の組織を完成することが近代社會に成し遂げ得られん事を冀はざるものがあるであらうか。



一三 進化史的意義より見たる國內移住  
と都市制度



先史時代の研究にして、それが生物界の現象を取扱ふ限り、その凡ては移住の臆説に没頭してゐる。即ち植物、動物及び人類が地球表面に分布し、言語、宗教觀念、童話、傳説、習慣及び社會制度に同族的關係ある事は、「移住」なる一事を假定せば、その一般的説明を發見するやうに思はれるのである。

勿論今日に於ては、水草を追うて漂泊する生活法を以て、各民族が定住以前に一度は經過せねばならなかつた一般的文化分位であり、家畜の馴致といふ事を以て狩獵生活より「自然的に」農耕に移り行かした一般的文化分位であると見んとする見解からは離去してしまつたのである。さりながら今日の人種學的研究は、一切の自然人は、その生活の經濟的基礎の奈邊に存するに論なく、無雜作にそして屢々殆んど云ふに足らざる瑣末の原因よりして其の居所を變更するといふこと、而して彼等の間には放浪生活と定住生活との中間に非常に多數の中間段階の存するといふことを十分に説明したのである。即ち人間の棲息する地球の南北兩極地方には、今日尙ほ一定の居所を有せざる人間が住んで居り、大陸内部に於ても絶えざる民族移動の状態が支配する廣大なる地域がある。大多數の文化民族は斯かる状態の傳説もしくは史的傳承を有してゐるのである。

今日の言語中にも、此の太古草昧の時代に於ける一般的移動性の深き痕跡を残すものがある。例へば *gesund* (健康なる) といふ語は本來「旅裝已に成れり」との意味にして (*ganden* 即ち「行く」旅する) より出でし語)、今日「家僕」なる意味に使用されてゐる *Gesinde* なる語は古語にては「旅の従者」の義に外ならず。 *Gefährte* (男の伴侶) *Gefährtin* (女の伴侶) とは其の嚴格なる語義よりせば「旅の道伴れ」を表はし、 *Erfahrung* (經驗) とは旅中獲たる事柄を指し、 *bewandert* (熟練せる) とは旅慣れし人に就きて稱さるゝ言葉である。斯かる表現の表は尙ほ未だ以て残らすが汲み盡されてゐないのである。然り而して夫等が今日能く普遍的意味を表はして居る一事は、夫等を最初に生ぜしめた具象的な



る直観と観察との範圍の普遍性を表はすものなのである。

四四四

斯くの如き状態よりして、當然立てられざるべからざる結論を生ず。曰く、かの普遍的移動運動の状態は民族の間に根を卸せる移住習慣によつて、直ちに靜止に來ることが出來ずして、寧ろ今日にまで發展し來れる全過程は人間が漸次定住的に赴きて、一片の小天地にいよ／＼躑躅し行き、其處に人間が生活を始めると云ふ一經過であつたといふ事が手近かな結論なのである。

多様の徴候が此の解釋の正當なるを語つてゐる。吾人の祖先の間にありては、家屋は動産の一に數へられ、歴史時代に入りても、多數の居所は頻りに其の位置を變じたことを證し得る。人工道路と輕快なる交通手段の缺けるたるに拘らず、中世に於ても尙ほ、個人は後世に於けるよりも遙かに移動的なりしが如き觀がある。其の好箇の例證を語るものは、先づ多數の巡禮行に指を屈せざるを得ず。そは遠くスペインなる聖ヤイゴにまでも及んだのである。次ぎは、曰く、十字軍、曰く、大衆團を結びて旅行せし人々、曰く、王及びその宮廷の移住生活、曰く、邊陲慣例法中の賓禮權、曰く、完成せる護衛制度、即ち之である。

文化に於ける新らしき進歩は何れも、謂はゞ新らしき移動時期と共に始まるものである。最も古代の農業は遊牧的にして、年々歳々その耕地を變更するものに非ずや。最も古代の商業は移動商業にては非ざるか。個人の職業的作用として家内經濟より離脱する第一着の工業は遊歴の間に營まれ居るものにては非ざるか。偉大なる宗教の開祖、古の詩人、哲學者、前史時代の音楽家、美術家は、何處にありても大遊歴者にては非ざるか。否な、今日に於ても尙ほ、近代通信交通の怖ろしく發達しゐるにも拘らず、新らしき教理の發見者、その宣傳者、名匠達人は己が門弟及び畏敬者を求めんが爲め放浪の生を送りつゝあるではないか？

古い時代の文化は定住的と云ふ意味である。ギリシヤ人はフェニキア人に比して定住的にして、ローマ人はギリシヤ人よりは更らに定住的であつた。蓋し一は他の文化承繼者なりしが故であつた。これと類する現象は今日なほこれを目睹し得べく、かのゲルマン民族はラテン民族よりも移動的にして、スラヴ民族はゲルマン民族よりも移動的である。即ちフランス人は故山の土に甚しき執着を有するに、ロシア人はその廣き祖國の他の土地に青山を求めんとして極めて氣輕に郷土を去るのである。フランスに於ては、工場労働者すら尙ほ季節的に移住する農民たるに過ぎぬのである。

斯くの如く人類はその歴史の經過中にいよ／＼定住的となるものなりとの命題に對して、經驗上これを肯定する多數の引用が爲されてゐるが、夫等一切に尙ほ、二重の種類の一般的考量が附け加はつてゐる。即ち其の一は、文化の進歩と共に、資本固定の範圍益々増加し來ることである。即ち生産者はその生産手段を抱へて漸やく非移動的となる。見よ、南スラヴ地方の遊歴鍛冶とウェストファーレンの鐵工場、中世商人の馱馬と現代都市に於ける百貨店、(譯者註) テスピの車と常設劇場、此等は實に此の發展の出發點とその結終點とを示すものにては非ざるか。其の二は、近代交通手段は旅客輸送よりも一層高度に貨物輸送を容易ならしめたることである。それによつて労働力の土地的に與へられた分配は生産手段の自然的分布よりも一層重要な意義を得ることとなる。斯くて生産手段は労働力の後を追ふこととなるのである。然かも以前にありてはその逆の場合が行はれてゐたのである。

〔譯者註〕「テスピの車」(Thepiskarren)——テスピス(Therpis)は紀元前五百三十四年、ギリシヤのアッティカの産、悲劇の創始者と云はれ、ホラーツに依れば、其の劇團を車に載せて諸方を巡回公演させたと云ふ。この車を「テスピの車」と稱し、今日も尙ほイタリアの諸地方に行はれて居り、最近同國のドッボラヴォーロの運動に取り上げられて居る巡回舞臺の一形態となつてゐる。



勿論以上述ぶる所に對し、それに反對する二三の他の考量及び事實なきに非ず。先づ其の一つは、人間は古の農業時代に於て土地に法的に緊縛せられ、近代に於ける人及び財産の自由に對立して一切の經濟法的關係が物化してゐる事である。其の二は、第一の事實と關聯して、近世に於ける單に流動資本又は人的勞働機巧に基く多數の生存の成立であり、其の三は、土地所有の動産化の増大であつて、今日に於ては農民をして家、屋敷を金に代へて、大洋の彼方に新生活を營むを許しつゝあるのであるが、翻つて中世を顧るに、當時の農民は精々郭外市民として隣接の都會に移り住むことが出来て、其處から村に残せる己が經濟を或は引續いて自ら經營するか、或は何等かの形式に於て毎年支拂の實物地代に代へて他人にその經營を委ねるかしてゐたのである。而して其の四は、地方人の都會への殺到がいよゝ増加することの觀察なのであつて、此の半世紀以降、都市の非常に急激なる人口増加と地方人口の所によつては停頓を示すのみか、中には減退の傾向をすら語るものがあるそれである。以上數へ來りしが如き一切の狀況を顧慮して、世間多數の人々は社會が絶えず可動性を増加し來るものなりと云ふ事を正當なりと考ふるに至るのである。

此の二個の現象系列は如何にしてか能く相互に相一致し得るであらうか？ 夫等は抑々二個の全く相反せる發展傾向を取扱ひつゝあるものなりや？ 或はさにあらず、寧ろ近代的移動は往古のそれとは全然その類を異にしてゐるものを見るべきか？

惟ふに世人はこの後者の考を信ぜんと欲するものであらう。即ち、歐洲の人類の歴史の初期に現はれし移動は民族大移動である。幾世紀にも跨る全種族の東より西への推移である。然し中世の移動は常に個々の階級だけに關係してゐる。即ち十字軍の騎士、商人、貸銀手工業者、職人、手品師、遊歴樂人及び都市城壁の内に保護を求める農奴の如きそれである。之に反し近代の移動に至りては乃ち然らず。それは通例、極めて異種の動因によつて指導される個人に關する事件で

ある。實にそれは殆んど常に組織化されるものであつて、此の日々幾千と繰り返されてゐる過程を結合歸一せしむるものありとすれば、それは唯だ一つの特徴であつて、それは即ち一層有利なる生活條件を求めんとする人間の居所變更と云ふ事が到る所で重大事となつてゐるといふその事なのである。

然りと雖も、斯くの如きの差別を立つるありとも、吾人は到底近代の移動併びに中世の移動の本體に透徹し得べからざるを奈何せん。吾人にしてその眞正の進化的意義を掴まんと欲するならば、統計學併びに經濟學が幾多の辛勞を重ねつゝあるにも拘らず尙ほ依然この全問題を取り捲きつゝある錯綜せる叢林の中へ一道の明光を投ずることによつて所期しなくてはならぬのである。

然れども統計が達し得る社會生活の一切の大量現象中にありて、始めから因果の一般法則に服してゐるやうに思はれるもの、移動に優るもの殆んど之れ有る無く、しかもその最も近き原因に就いて極めて漠然たる觀念の支配するもの、また此の移動に優るものあるを見ないのである。

唯だ單に大衆の範圍と新聞雜誌に於けるのみならず、科學的著述中にさへも「郷土心と移住本能」と云ふ事を論じ、斯くして人間が一所より他所に移動する現象を意識的動作の範圍以外に据えてゐるではあるまいか。官廳の統計的勞作の大部分が廣い範圍で殆ど顧みられずゐるに反して、輿論はこの移出數の公表に關して多くの場合極めて活潑な意見を發表してゐるといふ事は、上述の事柄と不可思議的矛盾をなしてゐることは言ふ迄もない。然り、移出數の増減には、恐怖と希望、賛成と不賛成、社説と議會演説が必ず結び付いてゐる。其處では、かの移住本能と稱し、かの郷土心といふが如きはその片言隻語をすら耳にするを得ざるは勿論にして、世人はこの移住現象の背後には極めて具體的な原因の存するといふ漠然たる感じを懷いてゐるのである。然かも此の具體的厚因に就いて、これを明らかにしてゐることの如











出生地	人口数	割合(%)
一、調査地区内	二、九七五、一四六	六一・二
二、調査地方團體管内	一四三、一八六	三・〇
三、調査局管内	六七七、七五二	一三・九
四、バイエルン國內	九四四、一〇一	一九・四
五、獨逸帝國内	七八、二四一	一・六
六、外 國	四四、一五〇	〇・九

〔六〕 ヲイヤ博士編纂『出生地より見たるバイエルンの人口』(Die bayrische Bevölkerung nach der Gebürtigkeit. Bearbeitet von Dr. G. Mayer) [バイエルン王國統計附録第卅二號]一〇頁。

因是觀之、一八七一年のバイエルン人口は一八八〇年のプロイセン人口、一九〇〇年のスキス人口に比して幾分定住的なるが如き觀あれども、これ思ふに、該人口調査の行はれし時の古かりしが爲めに存するものであらう。定住的はしかく定住的なりと雖も、なほ此處に於ても其住民の約五分の二(四、八六三、〇〇〇)中の一、八八八、〇〇〇)は彼等の住みゐる土地に於て出生せるものには非ずして、従つて或る時に此處に移り住めるものである。而して直轄都市に於ては他郷出生者の數五四・六%を占め、小なる地方都市にては四三・二%を算し、平原地の地方團體に於てさへ、それは僅かに三五・六%に減じゐるにすぎないのである。

此處に於てか、吾人はこれを妻まじき集團運動と目すべきである。而してもし吾人をして一つの概算を敢てするを許さしめば、尤もその事實的根據は此處に一々これを報告し得ないけれども、歐洲住民中、彼等が現在の地に生まれしに

ては非ずして他より移住し來れる者の數はよく一億以上を算すと主張し得ると信するのである。これと比較し來らんか、かの八釜しき問題とされるる海外移住の數に至りては正に九牛一毛の感なくんば非ずである！

〔七〕一八二一—一九〇五年の八十五年間に北米合衆國に全歐洲より移住し來れるもの數は二千二百九十二萬三千五百六十八人であつた。

斯る集團運動が人口を其の根底より攪拌するものあるべきは、瞭然火を睹るより熾らかな事柄である。その結果は主に經濟的併びに社會的なものである。移住の凡べての種類の經濟的結果は勞働力の局地的及び地方的交換を招致せしむることであり、又人間は到底經濟的裝備より分離し得ざるものなるが故に、屢々資本の遷移をも生ぜしめる。斯くの如くにして、勞働が資本又は天産物に隨從するにせよ、又は資本が無職業者を求むるにせよ、此の人類が棲息せる地球上に一層合目的なる勞働及び資本の分配と結合とを生ぜしむるに至るのである。次ぎに其の社會的結果は小歇みなき波動運動によつて、現存の營利利益と平衡を保ち行かんとする人口の大推移である。それは或る地方に於ては人間數の増加を抑遏し、他地方に於てはそれを促進せしむるものである。斯くの如くにして出產過剩に由る自然的有機的增加によつて與へられたと見ゆる如き人口の局地的配分は打破せらるゝのである。

然しながら實に此の點に於てこそ、各國夫々に對して、國內移住と國外移住との間に著しき差別が存在するのである。

抑々國外移住がその母國に及ぼす直接的作用は一面的のものである。即ちそれは母國の人口を輕減し、殘留者の爲めに活動の餘地を得せしむると云ふことである。而して其れと同時に人口稀薄なる植民地に於ける人口を増加せしめ、その空地の利用を促進せしめることが、本國に對して作用を及ぼすものありとせば、それは或は處女地に於ける農業の經營によつて、本國の農業生産と危險なる競争を開始するに至るか、或は外國へ工業上の機巧と生産手段とを移轉することに依



つて、祖國の工業の販路を断ち切つてしまふ助けとなる時にのみ、間接的影響の認め得るものあるに過ぎぬのである。之に反し國內移住の作用は常に二面的である。即ち其の一面は出發地點に於けるそれにして、他の一面は結終地點に於て感ぜらるゝそれである。前者にあつては、それは人口を緩和し、後者にあつては、それを稠密ならしめる。かくて謂はゞ居住地と地方とを区分して、一は人間生産地たらしめ、一は人間消費地たらしめるのである。その人間生産的居住地と稱するは通常田舎及び小都會にして、その人間消費的居住地とは大都會及び工業地區である。斯くて後者にありては、其の人口は出産過剩の自然的尺度を超過するに反し、前者に於ては著しくそれ以下に減退してゐるのである。ドイツ帝國に於ては、次の如き計算となつてゐる。

土地	人口總數		增加率(%)
	一八七五年	一九一〇年	
人口十萬以上	二、六六五、九一四	一三、八二三、三四八	四一八・六
二萬以上十萬迄	三、四八七、八五七	八、六七七、九五五	一四九・一
同五千以上二萬迄	五、一三八、四三八	九、一七二、三三三	七八・五
同二千以上五千迄	五、三六七、九六三	七、二九七、七七〇	三六・〇
同二千以下	二六、〇七〇、一八八	二五、九五四、五八七	減〇・四
計	四二、七二七、三六〇	六四、九二五、九九三	五一・九

人口増加の大濶は殆んど、大都會へと朝しつゝあつたのである。然りと雖も、此の國內移住の現象を如上の數字系列が示しつゝある程に、その現象は然かく簡單にして明瞭なものではないのである。此の數字は確にまざ／＼と「都會へ」

の合言葉を解き明かしてはゐるけれども、此の合言葉は半面の眞理を語るに過ぎざるものである。即ちこの合言葉は相互補ひ合ひ、従つて居住地の住民數の變化の中には何等の表現をも見出し得ざるが如き國內移住の多數を觀過してゐるのである。

或る比較的大なる土地の總内部移住を、それによつて行はれた土地表面上への住民の配分には顧慮せずして眺めれば、その移轉の方向は宛として絲の幾うねり幾縫れして彼方此方に走せ違える絢爛眼を奪ふ厚き織物のその如くに見えるのである。田舎及び小都會より大都會又は工業地區へと張り詰められたる可なり簡單なる經線を通して、五彩陸離たる色絲の織り込まるゝあり、此の絲は更らに小なる居住地の間を縫ひ十重二十重に走つてゐるのである。更らに他の種の比喩を取り來らんか、吾人のみが認める廣くして還ましき波を立てゝゐる表面の流があるのみならず、其の下には多數の細漣が夫々に獨自の戯を演じつゝあるといふそれである。

然るに此の後者の事實に就きては、今日に至るまで殆んど注意を拂はれず、又それ相當に尊重されしことは曾てなかつたのであり、一例外として曾て一度、この事が統計的に確定されたことがあつたが、其の場合に於ても亦、然りであつた。一八七一年に於けるバイエルンの人口調査に於ては、

土地	調査地出生者		來住者		合計
	直轄都市	その他の人口二千以上の都市	直轄都市	その他の人口二千以上の都市	
合	三〇一、四九四	二〇五、八八七	三六一、八九九	一五七、〇〇〇	六六三、三九三
地方團體	五〇七、三八一	二、四六七、七六五	五一八、八九九	一、〇二六、二八〇	三六二、八八七
地方團體	二、四六七、七六五	一、三五七、九八一	三、八二五、七四六		四五五

一一 進化的意義より見たる國內移住と都市制度



總計 二、九七五、一四五 一、八七六、八八〇 四、八五二、〇二六 四五六

是れによつて乃ち知る、最近世代間に地方團體への來住者の數は都市移入者のそれに比して倍以上であつたことを。而してこれと等しき状態が必ずや凡べての大聯邦州内に繰り返されてゐるであらう。

然りと雖も、地方の居住地は人口交換に關して受入作用あると同時に供與作用を有するものなりと云ふ所に其の眞趣があるに非ずして、他の二個の事情に於てそれがあるのである。即ち其の一つは、それが受入れるよりも更らにヨリ多く人口を供與すること之れにして、其の二は、その移入は主として近隣なる地方團體より補充するに反し、その移出は一部分は遠隔なる都市に向つて企てらるゝこと之れである。かるが故に移出の移入に超過することは、これ比較的高次の局地的協同體にとつては利益となるのである。即ち此の超過分は他種の經濟的社會的生活範圍へと突入するものである。

今、或る地區に生まれて其の州内の何處かに住んでゐる人口の凡べてを其の州の出生人口と稱する時は、上述の人口交換状態によつて、地方地區の出生人口はその調査人口（現在人口）よりも大にして、都會に於ては逆に小であるであらう。斯くて一八七一年の調査によれば、バイエルンの地方縣にては出生人口は現在人口の一〇三・五%なるに、直轄都市にては僅かに六一%を算するに過ぎぬのである。オルデンブルク大公國にては、一八八〇年十二月一日の調査によれば、

	都會人	田舎人
他地區よりの移入	二五、三七〇	五七、三六六
他地區への移出	一〇、二〇八	七二、五二八

1) Geburtsbevölkerung

〔八〕 マイヤ著前掲書、緒論五三頁以下。

〔九〕 「オルデンブルク大公國統計報告」(Statistische Nachrichten über das Grossh. Oldenburg) 第十九卷、六四頁。

此處に於てか、國內移住の貸借對照表に於ては、都會は一萬五千六百六十二人の超過額、地方團體は同數の缺損額を生じてゐる。都會と田舎とは人口家計の點に於ては、宛かも兄の節したる所を弟が使ひ果すが如き二人の相似ざる兄弟の經濟と等しく、相互に相俟ちつゝあるの状態にある。故に吾人が都市を人間消費的社會構成體と爲し、地方團體を人間生産的社會構成體と稱したるもの、其の限りに於て決して無稽の言に非ざるを知るべきであらう。

然しながら地方團體の「人間支出」中、都市に供給したる分を控除せる殘分一切は、上掲の小聯邦州の例に見るも尙ほ、都市へ供給せる過剩分の四倍以上に達してゐる。而して地方團體相互間に於て收納し合へる「人間收入」の數量はそれと殆んど同じである。斯くの如く地方地區相互的入口交換はその數に於て極めて大なるものあれども、それには比較的唯だ僅かの學問的興味が懸けられてゐるだけである。蓋しそは地方居住地の社會的制約に由來せる移住の一種たるに過ぎず。従つてその團體の小なるに隨つていよゝ多くの重要さを得來るものなるが故である。オルデンブルク大公國全體に於て、居住公共團體内にて出生せざりし人(即ち移入者)の數を見るに、左の如し。

土 地	割 合(%)	土 地	割 合(%)
人口五〇〇以下	五五・〇	人口二、〇〇〇—三、〇〇〇	二八・七
人口五〇〇—一、〇〇〇	三七・四	人口三、〇〇〇—四、〇〇〇	二二・二
人口一、〇〇〇—一、五〇〇	四一・七	人口四、〇〇〇—五、〇〇〇	二〇・六
人口一、五〇〇—二、〇〇〇	四〇・四	人口五、〇〇〇以上	二九・四

一一 進化的意義より見たる國內移住と都市制度 四五七



これに因れば、比較的小なる團體（人口四千までの）に於ては、其の地の人口増加するに従ひて、その地出生者に対する移入者の割合の減少し行くものあるに反し、比較的大なる團體に至りては、その反對に増加し行くものなるを解し得るのである。

マイヤはこれと同じことをバイエルン王國に就いて立證したのである。即ち該王國にては一八七一年に、大地方團體（人口二千以上を有する）に於ては其地出生者の數は六六・九%なるに、小地方團體に於ては六四・四%に過ぎず。然るに都會に至りては、正にそれと反對の結果を示すものあり、即ち直轄都市に於ては其地出生者は四五・五%、他の（比較的小なる）都市に於ては五六・八%を算してゐる。茲に於てか、彼は一命題を律して曰く、『都市にありては人口の其地出生者數の割合は都市の大いさに逆比例し、地方團體にありては團體の大いさに正比例す』と。

〔10〕『出生地より見たるバイエルン人口』(Die Bayer. Bevölkerung nach der Gekürtigkeit) 緒論、一五頁。

〔11〕此の原則は一八九〇年のオーストリア人口調査によりて確認せらるゝに至りしものである。ラウフェルグの著書『一八九〇年十二月卅一日の人口調査結果に基けるオーストリアの人口』(Die Bevölkerung Österreichs auf Grund der Ergebnisse der Volksz. v. 31. Dez 1890) 一八九五年ウィーン版 一〇五頁に依れば、その現居住地にて出生したる人の數の割合は、人口百に就き左の如し。

土 地	土 地
人口五百以下	人口五千乃至一萬
人口五百乃至二千	人口一萬乃至二萬
人口二千乃至五千	人口二萬以上
六五・七%	五五・六%
七三・五%	四六・四%
六九・九%	四三・一%

此の州に對する此の現象の説明は、之を行ふこと極めて容易なるものがある。即ちその居住地の住民數の小なるが爲

1) Mayr

めに、農民がその土地にての己が奴僕の選擇に甚しき制限を受けてゐる所にては、近接せる團體は相互に相補はざるを得ざるものがある。同様に、小なる地方の住民は、大なる土地の住民がその結婚に際して同郷者の間に比較的豊富な選擇を爲し得るに反し、近隣の地方團體所屬者間に結婚の行はるゝ場合が多いのである。斯くの如くにして近距離への移住を極めて多數ならしむる動機が與へられてゐるのである。しかも斯種の移住たる單に社會的に近似せる要素の局地的交換たる作用をなすに過ぎないのである。

斯くの如き状態は屢々述べたるオルデンブルク人口の出生地に關する研究により更らに證明し得る所である。それには任意に選り出せる三個の地方團體への移入者の原地がその出生地の距離地帯に準じて示されて居るが、平均して該移入者の七七%は二哩以内の土地に生れたるものにして、其の移出者に至りても、その八六・七%までは其の移出目的地は二哩を超えて居ないのである。

然るに二萬五千七百七十五の人口を有して、しかも尙ほ小都市中に數へらるゝに過ぎぬ主都オルデンブルクの情況は、その點に於て、何と全然別様の觀を呈するものがあるではないか！ その總移入人口（一萬三千三百六十四人、割合より云へば六四・九%）中

移入原地よりの距離	人 數	割合(%)
二 哩 未 滿	二、九一六	二一・八
二 哩 乃 至 十 哩	五、六二五	四二・一
十 哩 以 上	四、八二三	三六・一

此處に於ては、移入の大部分は遠隔移住にして、他地出生者の新共同團體への加入は、これ同時に新らしき社會状態、

一一 進化史的意義より見たる國內移住と都市制度



異なる経済方法に入るを意味するものである。而してかの都市團體はそれが他の地方より受け入るゝと同數だけ其の地の出生者を他地方に送り出すものでは決してないのであつて、それは寧ろ廣き周邊より移入者を吸収し、其の中の極めて小部分だけを逆送するに過ぎざるものと云ふべきである。

〔一二〕 オルデンブルク市にては、一八八〇年に於て、他の地方團體より八千七百二十五人の移入者ありしが、移出者は僅か一千九百二十五人に過ぎなかつた。前掲書、二二二頁。

これ實に近代都市の特徴である。此の近代都市併びに移住の點に關しては夫れと殆んど同列に陳べ得る工業地區を先づ以て抽き出し來りて、其等を考察の前景に置く時は、國內人口推移の結果が此の部類の移住に於て最も明瞭に現はれて來ると云ふ事情により、上述の事柄の正常なることが餘りにも十分に感じ得られるのである。然り而して移入要素の數が最も大なる此の近代都市及び工業地區にありては、彼等と其地出生者との間に社會鬭争——最もよき營利條件を獲得んとする鬭争、更らに謂ふべくんば生存競争が展開されるのであつて、この鬭争はその一方の部分が他の部分に順應すること、多くは一方が他方によつて究極的に克服されることを以て其の終結を告ぐるものである。シュリーマン<sup>1)</sup>によれば、スマルナの町は一八四六年には八萬のトルコ人と八千のギリシヤ人と<sup>2)</sup>の居住者ありしが、一八八一年に至りては、之に反しトルコ人は唯だ僅かに二萬三千人なるに、ギリシヤ人は七萬六千人の多きを數へたのである。故に三十五年にして、トルコの人口は七一%を減じたるに、ギリシヤ人は同時に九倍したるのである。

〔一三〕 『一八八一年五月に於けるトロヤ旅行記』(Schliemann, Reisen in der Troas im Mai 1881) 二九頁以下。

固より斯かる鬭争が必ずしも到る處に於て、斯種の一般的驅逐過程となるべきものなりとは限り居ざれども、一國內に於ては、強力にして武装優良なる部分は虚弱にして武装劣悪なるものを驅逐することが、個々の場合には無數に繰り

返されつゝあるのである。

斯くして一九〇〇年ミュンヘンには、五十萬の住民中約三十二萬は同市出生の者に非ずして、しかも同市出生者約四萬八千はドイツ帝國の他の土地にゐたのである。尙ほ同年に於てドイツの三十三大都市は他の地方出生人口五六・七%を有するに對し、此等大都會出生人口の二六・七%はドイツ帝國の他の地方に住むことが調べ上げられたのである。<sup>3)</sup>此の現象の更らに較著なるは一九〇一年のイギリスの人口調査よりの結果表はれたる事實にして、即ちイングランド及びウェールズに於ては、その地方がロンドンに供給したるとは餘りに劣らざる數のロンドン出生者が居住してゐたのである。<sup>4)</sup>

〔一四〕 『ドイツ帝國統計』(Statistik des Deutschen Reichs) 第百五十卷、一五七頁以下。殊に注意すべきはその一六一頁に示されたる大都市相互間に行はるゝ人口交換てふ一條である。例へばベルリン出生人口中、七十七萬二千七百八十四人はメルリンに、八萬三千五百五十六人はドイツの他の大都市に、十九萬一千八百十四人はドイツ帝國の他の地方に住み居ることを示す。

〔一五〕 一九〇一年ロンドンには四百五十三萬六千五百四十一人の人口あり。而し其中

人	數	割合(百人中)
ロンドン出生者	三、〇一六、五八〇	六六・五
ロンドンを除けるイングランド及ウェールズ出生者	一、二〇七、六二一	二六・六
スコットランド出生者	五六、六〇五	一・二
アイルランド出生者	六〇、二一一	一・三
外國出生者	一九五、五二四	四・三

而して他の側面を見るに、ロンドン出生者の一百十一萬五千七百七十八人はロンドンを除けるイングランド及びウェールズに居住しつゝあり。故に此等の地方よりロンドンへ移住したるもの百人に對しロンドン出生者の九十二人が都を後にして地方に去りしこと

一二 進化的意義より見たる國內移住と都市制度

1) Schliemann



かるが故に此處に、吾人は自然界に幾度か繰り返されてゐる過程に接するのである。即ち高等の組織を有する植物もしくは或る動物が最早やその食餌を得べき餘地を十分に有せざるに至れるその土地には、貧しきに甘んずる他の種類のものが移住し來りて、此處に樂しき繁榮を見出すのである。否、此等貧に安んずる他種類のものゝ移住し來ることこそ、高等なる種類のものゝその地を去り、更らに有利なる場所へ退去する原因たるものが珍らしくないのである。

然りと雖も、人間社會にありては、此の過程は驅逐過程であるべきものではなく、其地出生要素の裝備薄弱にして、他より移入せる要素の優秀なることの結果であるべきではない。

それとは反對の場合が多分同じ位屢々出現し來るであらうし、已に述べたる例に於ては、確かにそれが普通の場合であるものゝ如くである。近世國民經濟に於ける勞働力の無制限なる分化によつて、精練勞働者をして、彼等が生れて育ち、そして職を習得せる土地にあつて彼等の技能を適當に使用し利用せしむることが極めて困難である場合が多いのである。蓋し其の地に於ても競争が極めて激烈なるものがあるが故である。此處に於てか、彼等は去つて、他に一層有利なる營利條件を求むるのであるが、同時に其の土地には精練の度低き勞働力の需要が生じ得て、これが他よりの移入者を俟つて満たさるゝ要を生じ來るものである。然るに此の精練の度低き勞働力は其の郷里にあつては、比較的強力にして裝備優良なる要素を構成し得るものであり、此處では同じく、利益を齎らす利用への餘地なくて濟まし得るのであるが、併し何物を以てするも満たすに由なき間隙をも残すことゝなるのである。

斯くの如くにして、程度高く精練せられし技能力が都市より移出することが重大なる意義を持つたことは、一八七〇年代初期の所謂經濟的躍進時代に於ける程しかく著しかったことは未だ曾てなかつたのである。然るにそれと同時に、

其等の都市は地方より大量の勞働人口を招致したのであつて、爲めに此の勞働人口の移出は逆に大土地所有の地方に作用して、顯著なる農業勞働者缺乏の状態を惹起し、東部地方の如き、所によりてはかの放浪せるヌラヴの勞働者を以て土着ドイツ民の不足を補はざるを得ざるに至らしめた。

此處では到る處、比較的強力なる者移出し去つて、比較的脆弱なる者が止まつたのである。強弱互ひに相驅逐し合ふが如き現象には實際に於て逢着し得ざりし所である。

斯かる考察方法は、その成因が一層有利なる營利場所を得んとする努力にあるに非ずして、一層好都合なる消費條件を求めんとするにあると云ふ如き國內移住の場合には、上述の場合よりも尙ほ一層存立することが困難であらう。物價高き大都會を去つて田舎又は物價低き小都會に移り住む恩給暮しの官吏及び軍人、儂ない株券を手堅き地所に代へる濡手で粟を掴み取つた投機者、粒々辛苦の餘に貯へ得たる財産をつましましやかな別荘の閑寂裡に使ひ果し行かんとするパリーの小賣商人、又それ等とは反對に、相場に手を出さんとて都會へと出で來る牧畜成金のユダヤ人、かのフリッツ・ロイテ<sup>1)</sup>ルの穿てる筆に寫し出されしメクレムブルクの『お大盡』、即ち財産を子供に譲つて己は都會の歡樂を味はんとする豪農、我が兒によき教育を興へ又下宿人の世話をして自分の乏しい恩給のたしにしやうが爲めに都へ引移る貧しい牧師の寡婦、此等は何れも、その新しい居住地に於て、其處に生れた勞働人口に對して危険なる競争者として登場するものではないのである。

然しながら移住の目的地に於ては、驅逐と云ふ如きことは問題とはならない斯かる場合にあつても尙ほ、其の地主着の者と移入し來れる者との間に常に行はるゝ社會的混濁過程に其の一切を歸し得べき無数の争鬭と摩擦とが演出されるのである。即ち移入者の側に於ては、その新らしき居住地の生活條件、局地的經濟方法、習慣、方言及び政治的信教

1) Fritz Reuter



的社會的諸施設に順應すべきであるが、其の地在來の居住者自身の側にありても、假令彼等が泰然として自己流に生活してゐるとしても、彼等の上に殺到する他郷よりの影響を毫も蒙らずして止み得るものではない。然り、彼等に對して此の影響は屢々、勞働力の增高、見解の擴大、腐朽せる地方の情況への一服清新の氣を意味するものあるは否むべからずとするも、多分はなほそれにも増して一層多く、古き善良なる習慣、堅實なる經濟性、公民的共同心、殊に必ず社會的特性の喪失といふことを結果することであらう。

扱て斯かる交互的順應闘争は、それが相互相似たる要素の間に行はるゝか、もしくは夫々相異なる要素の間に行はるゝかに從ひて、其の形態と経過とに甚しく異つた経過を取るものなるは何等疑念を挾むの要を見ざる所である。而して此の理由からこそ、此の状態の特徴を明らかにせんとして都市統計によつて利用されてゐる其地出生人口と現住者人口との間の區別は繊細なる社會統計的研究に對しては不十分たるを免れ得ざるものがある。

其理由蓋し他奇あるに非ず。今例へばミュンヘン市に於ては一九〇〇年其地出生者の數三六%にして、ハンブルクに於ては五〇%であつたといふ事が調査されたとして、ミュンヘンにはハンブルクに比し他地出生者の數一四%の多數を占めてゐるといふ單なる事實を以てして、ミュンヘンの人口はハンブルクのそれに比してそれだけ一層雜種であり、ミュンヘンに於ける交互的社會的順應の過程はハンブルクに於けるよりも一層激烈なる摩擦及び闘争の伴ふものあるに相違ないといふ事は證明されてゐないからである。又同じく二つの都市（例へばボローゼンとフランクフルト・アム・マイン）に於て、他地出生者と其地出生者との割合相等しきこと（五九%對四一%）を示すありとするも、これを以てしては、未だ以て此の兩都市に於てかの交互的社會的順應過程が相等しき経過を取るべしとは言はれてはゐないのである。此の際大いに考へらるべき事は、一方の都市に於ける移入者は比較的近接せる種族近親の環境の間より來れる

ものなるが爲め、自分等の間や土着人口と風俗、方言、經濟力及び社會的習慣に比較的大きな同種性を示してゐるのに反して、他方の都市に於ては、遠隔の地より來れる異種の要素が混入してゐると云ふ其の事である。

前者の場合にありては、他地出生人口と其地出生人口との交互的順應の終局の結果は、後者の場合に於けるそれとは全然その趣を異にするものがあるであらう。然り、前者にありては、殆んど相等しき經濟的裝備と相似たる社會的性格とを有する個人及び集團は平穩無事に既存の營利條件中に參入するに反し、後者に於ては、他よりも生活力旺盛にして精神的なるしかも乏しきに安んずる種族は親代々承け繼いだ地位にあつて、他に比して老衰し虚弱となりしかも多きを望みつゝある種族を克服して、遂に當時最も有利なる營利範圍より彼等を驅逐するに至るのである。殊に生活程度の一段と低き事が移入者をして能く生存競争に際して、其地出生者を凌駕せしむるものにして、それがやがては其地出生者に對して慘ましき結果を齎らすに至るものである。見よ、ボローゼン労働者の西部地方への移住、イタリヤ人のスキス及び南部ドイツへの移住、而して支那人のアメリカ諸都市への移住を。其等は如上の経過を語る著しき例證なのである。

然るに經濟的併びに社會的同化作用が眞劍な闘争なくして行はれてゐる所にありても、移入者と其地出生者との間には、到底解消し得べからざる而して一共同體の住民の以前の結合性を妨害的方法に於て破壊する乖離が存續し得るものである。余は此處に特に信教、母國語及び政治的歸屬の差異を考へてゐる。かの世人が普通に新教の牙城なりと目してゐるスキスの國境都市、ジュネーヴ及びバーゼルは、今日に於ては移入の爲めに、其の人口中に三分の一以上の外國人を有してゐる。而已ならずジュネーヴには人口の約二二%はフランス語以外の母國語を有してゐる。而してバーゼルのに於ては一八三七年より一九〇〇年に至るまでの間にカソリック教徒は人口の一五%より三三%に増加し、ジュネーヴにては四六%に達したのである。かくて此の二小共同體の内部歴史に詳かならざる者すら、尙ほ且つ斯くの如き對立は



危険なきものに非ずと自問自答せざるを得ぬであらう。

此等の論述が、国内移住の大多數は其の終止點を決して都市に見出すものにては非ざることを吾人に示したのであるが、夫等の論述よりして又生ずる事は、大なる人口中心點への移住のみがヨリ大なる社會的併びに經濟的意義を要求し得るものであるといふそれである。かゝる移住は實に國家領域内に於ける人口分布の異動を生ぜしめ、其の出發地點併びに終止地點に於て種々の紛議を醸成し來り、それが克服の爲めに立法及び行政は今日に至るまで勞しながら、殆んど何等効果の認むべきなき有様である。實に斯かる移住は夥多の人間を主として實物經濟的なる生活範圍より、殆んど忽焉として、貨幣經濟及び信用經濟的生活範圍に置き換へ、これによつて筋肉労働者階級の生計と其の社會的慣習とに對して、博愛家の心を甚しき憂悶もて満たさずには止み得ぬ結果を招來するものなのである。

多數の學者は地方人口の都市への大量的流入と都市の一般的急激的膨脹とを全然新しき現象なりとなしてゐる。彼等の見解には或る意味に於ては正當なるものがある。即ち十八世紀は未だそれを知らないでゐる。少くともドイツに於てはそれを知らない。かの人口統計の偉大なる創始者ジョースミルヒ<sup>1)</sup>は、都市に於ける人口異動の徹底的合法則性を發見するを得ずして曰く、「都市は神の御心のまゝに、その人口が或は増加し、或は又減少するものなり」と。ユステイ<sup>2)</sup>も亦、新しき移住者に特別の利益が賦與されざらんか、都會を膨脹せしむることは殆んど不可能なりとなしてゐる。十七世紀後半より一八二〇年頃に至る各都市の人口數に於て吾人が知り得る事實は、夫等の言と符節を合すものがある。即ちその人口數は時に或は減少するかと見れば、時に或は増加して、その變化の間に何等の規範あつて存するを見得ないのである。之に反してフランスにありては、近代的異動は已に約百五十年も早く始まりしものゝ如く、彼地にては十

1) J. P. Süßmilch

2) J. H. G. v. Justi

八世紀に於て已に早く標語式の方法で、『田園の荒蕪』と云ふことが語られてゐたのである。

〔一六〕『世界の大神率者たる神はかく國々町々に力と富と榮えとを與へさせ給ふも、時には彼等より之を奪ひて神の心のまゝに他の國他の町に賦與させ給ふ。強力あるものを其の得意の玉座より衝き落して、卑きものを昇さしめ給ふ』『神の秩序』(Göttliche Ordnung) 第二卷、五四六條(第二版、四七七頁以下)。

〔一七〕『警察學原理』(Grundrätze der Polizeiwissenschaft) 第五十四節。尙ほ『政治財政學論集』(Gesammelte politische und Finanzschriften) 第三卷、四四九頁以下。

〔一八〕これに關する多數の事實は『國家學辭典』(Handwörterbuch d. Staatsw.) 第二卷、四三三頁以下にイナマ・シュテルネック (Inama-Sternegg) によつて集められてゐる。

〔一九〕其の證據はレノマ著『人口の都市聚積と地方移出との進歩につきて』(Tagort. Du Progrès des Agglomération urbaines et l'émigration rurale) 一八七〇年、マルセイユ版、八頁以下に蒐集されてゐる。

之れに反して一度歐洲人類の歴史を更らに溯らんか、それと相等しき現象を大きな延長に於て示す所の二つの時代に接するのである。即ちその一つは古代、殊にローマの皇帝時代にして、他の一つは中世末期、即ち十四五世紀である。

この兩時代の中間には逆行、衰頹、否な然かく甚しからずとも尙ほ停滞を示す長い時代がある。

然り而して都會への移住のかの古き時代は、進化史上これを如何に解釋すべきものなりや。そはその完成せる交通機關を有する現代に留保されてゐた目的に到達せんとする早やまつた先走りであらうか。然らずとせば、そは現代に於ける夫れと相應する運動とは別に、他の動機に従ひ、従つて異なる結果をも齎らすに至れるものにてはあらざりしか。就中その人口論上の結果とその經濟上の性格とは相等しいものであつたらうか。



古代に對しては、其の今日に傳へられてゐる人口數が不精確たるを免れ得ずとするも、都會が異常なる膨脹を爲したる原因は地方人口の都會への流入であると假定さるべきであると思はれるのである。<sup>(110)</sup>然りと雖も、此の際觀過すべからざる事は、その都市移入者のたゞ一部分のみが自己の決意によつたのにすぎなかつた。即ちそれは自由民であつた。而して遙かに大きな部分、即ち奴隸は或はその主人の手にて都會へ呼び集められ、或は人身賣買によつて彼處に送られしものであるといふことである。然かもかの自由民が地方を去るに至れるその由來に考ふるも、それは普通に都市には經濟上一層有利なる生活が招いてゐるからといふには非ずして、大規模なる奴隸經濟の進展によつて自己の土地所有を奪ひ去られしが爲めなのである。斯くして彼等自由民は都市に於ても、一切の儲かる營利範圍は如何にも奴隸又は自由奴隸の手中に收められてはゐるが、然かも彼等は此處にては餓死を懼るゝ要がなかつたのである。蓋し彼等が伍するに至れる都市の無産者大衆は公私の救恤によつて扶助されたるが爲めである。

〔一〇〕 以下説かんと欲する所に就き參考すべきは、殊にホエールマン著『都市文明の總發展と相關する古代大都市の人口過重』(R. Pöhlmann, Die Uebervölkerung der antiken Grossstädte im Zusammenhang mit der Gesamtentwicklung städtischer Zivilisation) 一八八四年ライプツヒ版である。その他、ロッシュェル著『經濟學體系』(Troscher, System der Volksw.) 第三卷頭初、及びマッロー著『紀元前一四三年より一二九九年に至る不自由労働者の暴動』(Bücher, Die Aufstände der unfreien Arbeiter 143-129 v. Chr.) 一八七四年、フランクフルト・アム・マイン版。

ギリシャ・ローマの古代に於ける大都市は本來消費協同體である。而して其の強大の因は實に統御階級が居住してゐた一地點に廣き地方領域の財寶を寄せ集め來る政治的中央集權にあるのである。<sup>(111)</sup>従つてそれは一國の首府少くも一地方の首都である。斯くの如くなるを以て、夫等のはじめて生じたりしはアレキサンダー帝歿後の時代にして、その頂點に

達したりしはローマの皇帝時代である。その首府ローマそのものはその食料品輸入を地方の調租に俟ちつゝありしが、後世コンスタンチノーブルも又同様なる状態の下にあつたのである。<sup>(112)</sup>これ實に空前にして且つ絶後なる共產主義的帝國主義的給與組織にして、官吏の苛斂、租税貸貸、高利貸業、奴隸に經營されし富裕私人の大土地所有及び國家の公認せる大衆への麵麩・肉・酒の救恤義務等によりて、全世界の半分の生産的労働をその首府の用役に供せしめたのであつて、其處では私的營利の爲めに取り残されたものは、精々個人的勞務給付の範圍にすぎなかつたのである。大なる地方都市に就きて知り得る所も、それと相似たる情況にあることを斷じ得るのである。<sup>(113)</sup>

〔一一〕 オグヴァイドはこれを極めて美しく叙べて曰く(Ars am III. 113) 『ローマは今や黄金の都にして、被征服地方の多額の財寶を有す』

〔一二〕 クラカヴァー著『皇帝時代末期に於けるローマ市の給與制度』(Krauker, Das Verpflegungswesen der Stadt Rom in der späteren Kaiserzeit) 一八七四年、ライプツヒ版、及びグーブレハルト著『皇帝時代及びローマ末期のコンスタンチノーブルの給與制度研究』(E. Gebhardt, Studien über das Verpflegungswesen von Rom und Konstantinopel in der späteren Kaiserzeit) 一八八一年、ドルネート版。更らに(Jhb. für N.Ö. und Stat.)誌、第八卷、殊に四〇〇頁以下なるロートベルトウス(Rodbertus)の所論。

〔一三〕 クーン著『ローマ帝國の都市制度及び市民制度』(E. Kuhn, Die städtische und bürgerliche Verfassung des Römischen Reichs) 第一卷、四六頁以下は地方都市に於ても首都ローマに見たと同様の「食料給與」(cura annonae)の組織の存しあたるを示す。

古代の大都市は自由労働の爲め好都合なる市場、即ち輸出の爲めの精練的大量生産の地ではない。<sup>(114)</sup>而してその工場に似た工業によつて作り出さるゝ物は、かの農業的大經營と等しく、奴隸労働によつてゐるのである。従つて古代の文筆



家が自由なる地方人口の都市への殺到の動機として數へつゝあるものゝ中には、今日に於ては普通のものと思はれるかの「ヨリ好き貨銀を得る見込み」といふ事は何等の役割をも演じるを見るのである。セネカがその母に送りし書信の一節に曰く、『かゝる大衆を見申候へばこの廣大なる都の家々としてその人々を容るゝには十分にては之れ無くと存せられ候。自治の町々、植民地の彼方より、否な全世界よりして此等の人々は押し寄せ來りしにて候、その或る者は虚榮の爲め、或る者は公務に餘儀なくせられ、或る者は委ねられたる公使の役により、或る者は惡徳を行ふに都合よき紅燈の地を求むる遊蕩の心の爲め、或る者は學問の研究の爲め、或る者は芝居を観んものとして此の地にこそは集り來るにて候。又或る者は友を訪ぬべく、或る者は己が得意の腕を示さん<sup>etc</sup>十分なる機會を求むべく、或る者は己が美を誇ぐべく、或る者は己が辯口を賣るべく、此の都へこそは志すにて候、さにて候へば、如何なる種類の人とても此の都に集り來らぬものとは無之、此の地は實に高き徳も卑しき惡もこよなく榮ゆる所にて候』と。

〔一四〕ギリシヤの都市に關しては、今日にてはフランコット著『古代ギリシヤに於ける工業』(Erancoite, L'Industrie dans la Grèce ancienne) 第一卷、特に一四九—一五八頁に確かなる記述がある。

〔一五〕Cons. ad. Helviam, 6

〔一六〕原文は Quosdam industria latam ostendendae virtuti nacla materiam. にして、これ「努力」といふ意味である。ホエールマンはその前掲書一七頁に漢然「工業」と譯出したるが、それは誤解である。

然るに中世に入るや、都市への移住は全然その趣を異にするに至つたのである。これを大體より觀察し來らんか、それは固よりその數に於てはローマ皇帝時代に見たるそれに比して決して劣るありとも覺えざるものがある。然れども其の行はるゝや、少數の消費中心點に向けらるゝものには非ずして、國內に遍ねく分布されるて防禦を施されある場所の

多數に向けられてゐたのであり、此等の場所は土地に結び付けられてゐない一切の職業を集め來つてその城壁の後に收めてゐたのである。中世都市は實にその住民の社會的併びに經濟的編制に於て、相互に何れも皆甚しく酷似し、吾人が知り得る限りでは、その住民數に著しき差等を示してゐないのである。而して地方人口の移住は其の創設の頭初にあつては多くは彼等の自由意志によりしにはあらざりしが如くなるも、漸く後代に至つて、生命財産の安固の度一層高く、土地を所有せざる自由民及び家人に都市が提供した營利機會が一層豊富であるといふ事が都市移住の主なる動機となつたのである。然るに各都市の内部に、その狭き販路を養ひ得る丈けの一切の手工業發生し、親方の數が十分に備へ付けらるゝに至つた其の時に於ては、全發展は經濟的併びに人口論的に停止せらるゝに至つたのである。其の時までは、都市の側には、完全なる移住の自由が行はれ、同業組合權及び市民權の獲得に對する妨害は殆んど無かつたのであるが、之に反し地方に於ける地主は己が家人の喪失を防がん爲めの移出制限によつて自己の安全を圖らんとしてゐたのである。然るに都市がその住民の內的増加によりて、一切の營利範圍を充實せしめ得るに至つては、都市も亦、外部よりの移入を阻止せんと努むるに至り、移住と營業經營への加入とに對する種々煩雜なる制約を設くるに至つたのである。而して斯かる制限は長く近代にまで存續し來りしものにして、斯くて都市と地方との間には峻乎たる溝渠の穿たるゝに至つたのである。固より其れ以後に於ても、なほ引き續き移出入の行はれたりしことなきにはあらねど、そは主として都市自體相互間の勞働力交換に限られてゐたのである。斯くの如くにして都市の發展は一種の硬直状態に陥り、新らしき經濟制度に還るに及びて初めてそれより脱するを得たのである。

此處に吾人は如上の所論を、その二三の點に於て統計的に證明することが出来るのである。フランクフルト・アム・マインの人口の出所に關する徹底的研究<sup>etc</sup>と、最近には又中世に於けるキョルン市の人口の數個部分に關する精確なる研



究とが行はれたのであるが、その示す所によれば、十四五世紀の兩世紀間に此の兩都市にて市民權を附與せられたる人々の多數は地方より移住し來りしものなりといふことである。即ち新市民百人中

都 市	時 期	都市よりの移入者	村落小邑よりの移入者
キヨルン	一三五六一一四七九年	三七・四	六一・六
フランクフルト	一三一一一一四〇〇年	二八・二	七一・六
同	一四〇一一一五〇〇年	四三・九	五六・一
〔一七〕	拙著『フランクフルト・アム・マインの人口』一六三頁以下、三〇四頁以下、四二二頁以下、五二二頁以下、五二二頁以下、六一七頁にあり。		
〔一八〕	ドローン著『中世商業組合史研究』(A. Doren, Untersuchungen zur Gesch. d. Kaufmannsgilden des Mittelalters) [Schmollers Forschungen 第十二卷 二] 附録一、及びブンガース著『キヨルン市の中世風土學、法制史、社會統計學論考』(H. Bunge, Beiträge zur mittelalterlichen Topographie, Rechtsgeschichte und Sozialstatistik der Stadt Köln) 一八九六年、ライプツヒ版、第三節。		

これより知り得ることは、中世最後の二世紀にありても尙ほ、田舎より都會への人口の動きは依然として繼續されつゝあつたこと、然れども其の動きは漸く衰退せんとしつゝありしが、それに反し都會的要素の新市民の間に混ざるの率がいよく増加し來りしことである。フランクフルト住民中の二三の階層は、十五世紀に於ては已に他の都市出生の移入者によりて主として其の缺を補ひつゝあつた。例へば移入ユダヤ人中の九〇%、又金屬職人組合員中の七九・三%は都市の産であつた。而して此の最後の比例數を得たる材料が尙ほ十六世紀の前四半世紀を包括することは云ふ迄もない。然るに此處に遺憾に堪へ得ざるは、十六世紀及び十七世紀からの其の後の數字の存せざることである。之に反し十八

世紀の初期より十九世紀中葉以後までの時期に就きては、二三の數字が報せられて、依つて以て都市の手工業はその労働者を殆んど唯だ僅かに他の都市より得てゐた時期の存したりしを知り得るのである。殊にフランクフルトの市記録貯藏所には、製本職工の宿舍名簿の多數が所藏されてゐて、これには一七二二年より一八六七年に至る期間にフランクフルトに旅して來た製本業の職人は残らず(總計一萬四千三百四十二人)その姓名と出生地とを記載したのである。余は數年前此の貴重なる材料を統計的に編整して、次の如き結果を得たのである。即ち此の地に旅し來れる製本職人百人中

時 期	都市よりの移入者	村落小邑よりの移入者
一七二二一一七五〇年	九七・五	二・五
一七五一一一八〇〇年	九四・三	五・七
一八〇一一一八三五年	八九・二	一〇・八
一八三六一一八五〇年	八六・〇	一四・〇
一八五一一一八六七年	八一・二	一八・八

因之觀是、或る特殊に都市的な工業にありては、優に一世紀半に渉る期間に於て地方的労働力のそれに混和し來る度のいよく増大し行くのであつた。今もし此の研究を現今に至るまで繼續せしめ得たりしならんには、一八六七年以後の時代に對しては、村落出生の職人が以前にも増して更らに強度に進出したであらうことは疑ふを要せざる所であると思ふのである。

現代の都市の移入には、吾人が嚮に十五世紀に對して確定したる所とよく似たる都市と田舎との混淆が再び現はれて



るが如くに思はれるのである。<sup>三九</sup>他地出生者百人中

都 市	調査年度	都市出生者	田舎出生者
ライプチヒ	一八八五年	五〇・六	四九・四
バーゼル	一八八八年	一一三・五	七六・五

〔二九〕此處にはその調査の極めて簡單なる結果を示したるに過ぎず。その詳細は拙著『一八八八年十二月一日に於けるバーゼル市州の人口』(Bevölkerung des Kantons Basel-Stadt am 1. Dez. 1888) 九二頁以下に就きて見るべく、尙ほハッセ著『ライプチヒ市に於ける一八八五年十二月一日の人口調査結果』(Hesse, Ergebnisse der Volkszählung vom 1. Dez. 1885 in der Stadt Leipzig) 第二部、七頁以下を照合すべし。バーゼル市にありては田舎よりの移入者の數比較的に大なるは、該調査編纂に際し三千人を以て都市と田舎とを區別する標準となしたることよりして説明し得らるゝのである。

而して中世に於けると同じく、都會的要素はその移住目的地と出生地との距離に正比例して増加し、田舎的要素はそれと逆比例して減少するのである。此の事柄は各種の人口階級に於て餘り大差あるを見ざるが、總じて特別の習練を必要とする職業種類にありては、平凡なる筋肉勞働の範圍に於けるよりも、都會的要素の混入するの度多きを示すのである。

これに類する統計的研究が近代都市の大多數に就きて行はれることは、以て大いに痛歎せざるべからざる事柄なるが、今日までに存する一切を綜合し來らば、大都市に於ける他都市出生の來住者の數は中小都市に於けるものよりも比較的に大なるものありとの結論に到達せざるを得ないのである。<sup>三〇</sup>此の現象の説明は極めて易々たるものがある。即ち大都市は、中小の都市が田舎の住民に對すると同様の牽引力を中小都市の住民に及ぼすが爲めである。斯くの如くにして一の社會圈及び經濟圈より脱して他のそれに移行行くことが餘り面倒とはなつてゐない。此處に移住する大衆の漸次

的増大が行はれ、幾世代かに跨る大都市生活の要求に對する準備が完成されるのであり、此の準備が大都市生活の域内に於て、避くべからざる順應闘争を緩和すべきものなのである。

〔三〇〕已に述べたるライプチヒ市に關する研究以外、其後發表せられたる一八九一年のフランクフルト・アム・マイン市移出入に就きての詳細なる記述あり。それはフライヒョー博士(Dr. Reichel)が『フランクフルト市統計論述』(Beitr. zur Statistik der St. Frankfurt) 第二卷、二九頁以下に發表したりしものにして、本文中の事實に對して興味ある解明を下してある。

都市が今日、上述せる所に依つて、已に一度び中世に於て行はれたりしが如き人口の新分配過程を示すものありとするも、中世と現代との該過程間には、僅に表面的類似の認め得るものあるに過ぎぬのである。即ち十四五世紀に於て問題の中心點となりしものは、生産の獨立的構成によりて一は他と全く相類似し居たる多數の小なる自主的經濟範圍の完成がその究竟目的であつた發展の最終段階であつたのであるが、現代に於ては即ち然らず。其の問題とする所は一層大なる統體即ち國家的に組織せられたる國民經濟の目的に適應せる各個居住地の漸増的分化に存するのである。<sup>三一</sup>概觀するに、人口中心點及び國內移住の目的地點の數は今日にありては中世後半に於けるよりも少である。然しながら尙ほ他の一點に於て、今日國內移住によりて生じたる人口の新分配は中世のそれとは區別されるのである。それは即ち生命財産の安全度の増加、併びに又健康の聰明なる保護によつて、一世紀半此の方、人口の不斷なる増加を見たることである。斯くの如きは實に暴れずさみたる流行病、私闘、飢餓を携へたる中世には到底見るを得ざりし現象であつた。従つて今日行はるゝ大都市及び大工業地區への移住は多くは唯だ人口の過剰分をのみ吸収するにすぎぬのであつて、もしそれが生じたる所、即ち地方團體及び小都會にその儘に放置せば、到底十分なる食料の餘地を發見することが出來ないであらうものである。故に今日の大都市及び工業地區への移住は、地方團體併びに小都會に對して人口の稠密化を緩漫ならしめ



又は全然それを防止しつゝあるのであるが、他面その堆積地點たる大都市に於ては、間斷なく急激に増加し行く人口に對して、場所的併びに經濟的な妨礙もこれに對抗し得ないのである。

〔三一〕 これに就きては三九二頁以下参照。

之に反し中世に於ては、來住は或る一定の間隔を保ちて全國に散布され城郭もて繞らされたる居住地の多數に分配されたのである。而してこの來住は都市の充實し終る迄を限りとしてゐた。城郭樓門を警備し、一切の生業を充實せしむるに必要であつた丈の住民の備はるあらば、都市は夫れ以上の人を住まはしめる能はず。當時とて固より都市膨脹なるもの無かりしには非ず、それは職業構成と職業分割の増進と相關聯してゐたのであるが、併し大都市なるものは中世に於てはその完成を見なかつた。その經濟制度併びに交通制度によつては到底それを作り出し得なかつたのである。中世は屢々、土地の耕作に必要としてゐた人口を地方から引き抜いて來たのである。それは再々生じた大きな人口の喪失に際して、都市の住民數を安定に維持せん爲めであつた。

以上敘ぶる所を以てしては、中世都市經濟の完成に隨伴した國內移住が、今日居住制度の國民經濟的構成が喚び起す所の人口の適正なる空間的移動及び推移に比較して多數なりしか否かは、固より不確實たるを免れ得ないのである。之に反して近代大都市が小都會及び田舎の住民に及ぼしつゝある牽引力に至りては、中世都市がその近郷に及ぼしたるそれに比して、空間的にヨリ廣き範圍にそれを窺ひ知り得るものであることは疑ひ得べからざる事實である。然りと雖も之を以て直ちに、一都市の人口補充範圍が近世初期以來、その住民數と正比例して擴張し行けるものなりとは斷じ得ないであらう。寧ろ其の反對に、交通機關の完備と移住自由の實施とが規則的なる國內移住の延長範圍に及ぼしたる影響の極めて微々たるものに過ぎざりしは、吾人をして却つて驚愕に堪えざらしむるものがある。

二三の數字はこの事を直觀的に語るであらう。移入人口百人中、これをその距離より分てば、

都 市	人口類別	時	〇—二哩	二—一〇哩	一〇哩以上
フランクフルト	新市民	十四世紀	四六・七	三九・三	一四・〇
同	同	十五世紀	二三・一	五二・七	二四・二
同	金屬工	十五世紀	二・七	四五・〇	五二・三
同	オルデンブルク	他地方出生の住民	一八八〇年	二一・八	四二・一
同	同	同	一八八八年	一六・七	五〇・二
同	手工業職人	同	同	一三・九	四〇・〇
同	工場労働者	同	同	一七・一	五九・六
同	同	同	同	同	二三・三

此處に區別された三つの來住地帯の中、その最も遠隔なる地帯は、總人口に於て占むる重さが現代にては中世に於けるよりも一層大であり、最も近接せる地帯はそれよりも小である。これ察するに、今日にありては、都市近郊の人口は日々自轉車又は勞働列車等によりて都會の作業場に通勤するにせよ、都市の大工業がその郊外に事業場を設けるにせよ、それ等の近郊の住民は都市内に居住せずして都市の勞働市場の利益を利用しつゝある事情に歸し得べきものである。而して手工業職人の來住範圍は中世に比すれば寧ろ縮小せられしが、それと關聯して、此の労働者階級は今日その人員の四分の三が田舎より補充されてゐるのである。これを中世末に於いて村落小邑出身者の數僅かに四分の一にも及ばざりしに比すれば大差ありと云はなくてはならぬのである。十五世紀に於けるフランクフルトの金屬職人中、田舎に其の郷國を有し居たりしもの、數は僅かに二〇・七%に過ぎざりしもの、一八八〇年に於てはパーゼルの麵麩燒職人及び



屠獸職人中七八・七%、その他の手工業職人中七五・二%はその出生地を田舎に有するものであつた。しかも尙ほ手工業職人は、今日にありても、現代の類型的勞働者範疇たる工場勞働者に比し、その數に於ても遙かに大に、距離に於ても一層遠隔の地に移住しつゝあるのである。即ち一八八八年には、バーゼルの工場勞働者の二五・八%はその町にて出生せしものなるに、手工業職人にありては僅かに一六・三%を數へたるに過ぎぬのである。而して彼等の中の幾何が近郷に生まれて定住してゐたかに就いては、残念ながら何等報する所がない。然しながら近時の全工業發展は、其の極途に一個の固定的勞働者階級を引き出し來るべく、而してこの階級は今日に於て已に、早婚の爲めに昔の手工業職人に比し遙かに移動の度を減じらるゝが、將來に於ては、恰かもかの中世の大土地所有の下にありし隸屬的勞働者階級が土地に緊縛せられるたりしが如く、同様に固く工場に結び付けらるゝであらう事は疑ふ餘地がないのである。然かも今日此のことの認めらるゝことの少きは、これ他儀あるに非ず。即ちかの大工業の大多數は今日まで尙ほ未だその生長の到着點に到達しざることゝ、それ等がその設備の擴充を爲しる限りは、地方地區よりその人口過剩分を斷えず招來して、その勞働者に對する過剩需要を填補せざるべからざることゝに據由するものである。

〔三二〕 大企業による勞働者住宅の建築は、それが遂に勞働者の有に歸するにせよ、又は彼等に貸貸するにせよ、今日已に一種の工場隸屬關係 (Fabrikabhängigkeit) を生じ、古代に於ける土地隸屬關係と甚しく酷似しあるものあるは、眞に痛惜すべきことなりと云はざるを得ない。之れに就きては Brauns Archiv f. soz. Gesetzg. und Stat. 誌、第四卷、四八四頁以下に載せたるベルギーに於ける社會立法に關する余の所論を参照すべし。

以上述べし所に依つて知り得る事は、かの社會の動化增高を交通網が稠密となり完全なる運輸手段が發明されし結果なりとは見るべからざることである。現代は過渡の時代である。此の時代には、かの都市的及び領土的經濟秩序より國

民的經濟秩序への變化尙ほ未だ全く完成せざるの結果、分業の限界と生産諸部門の立場との斷えざる推移を招來し、爲めに勞働人口の推移をも來さしめてゐるのである。

各種の移出制限及び居住制限ありて、人口をその父祖の地に緊縛し居たる幾百年に渉る經濟的併びに社會的骨化の時代去りて、現代の領土的集團運動は多數の人に對して何かしら苦惱の種である。而してその運動は一般的移住の行はれたる原始時代への復歸であると見られ易い。然れども此の際に觀過されてゐることは、かく可動的となりしものは人口の僅か一部にのみすぎないのであつて、即ちその大多數は十九世紀初頭に至るまで土地に緊縛されるたる地方住民なのである。もしそれ、商人、職人、學者に至りては、今日に於ては、例へば宗教改革時代に於けるよりも可動性を減じてゐる。又工場勞働者は今日にありては、尙ほ十八世紀に於けりしよりも、移住の度比較的少なく、その距離も比較的短くなつてゐる。たゞ工場勞働者の數は甚しく増加し、尙ほ引き続き増加せんとしつゝある。而して此の工業の成長は地方勞働者を一部分その住み慣れし土地より離れしめる。彼等の頼りなき境遇を利用して私腹を肥さんとする人々の利害關係を除きては何物の彼等を引き止むるものなき彼等が住み慣れし土地を去らしめるのである。斯かる運動にしてなほ引續き遂行せられんか、思ふに二三十年後にして已に、人類は總體に於てその發展の進むにつれて、いよく定住的となつたといふ事が生じ得るであらう。

斯くて吾人は此處に最後の斷案に達す。曰く、かの滔々として都市及びその近郊への群をなしての殺到の中に、吾人は中世後半に於て我等の祖先が已に一度び眺めた事柄、即ち新らしき經濟秩序、新らしき社會秩序及び新らしき居住秩序への過渡を今日再び體驗するのである。當時かの運動は都市經濟及び都市田園峻別の時代を導き出したのであるが、今日吾人が其の中に坐しつゝあるその運動も亦、吾人が進化の一新時期に一步を踏み入れしを語る外的標識と見るべき







家 屋

家屋建築……………一三、三九、四〇、五三  
 家屋所有……………一〇三、一〇八、一七六、三三九、三三四  
 家人及び家人制度……………一〇三、一〇八、一七六、三三九、三三四  
 家計……………一八、三四、四〇、九七、一五五、二〇四、三三九  
 家産經濟……………一〇四  
 家族制度……………二一、五三、五五  
 家畜……………七三  
 家畜貨幣……………一七八  
 家畜盜奪……………一七八  
 家庭織麻布……………一七八  
 家内經濟……………一七八  
 閉鎖的家内經濟……………九六、九四、三九六、三〇四  
 家内經濟の自主權……………一〇三、一〇四  
 家内經濟の現象範圍……………一八〇  
 家内工業……………一四四、一五八、一六〇、二九四、三三八  
 家内工業地區……………一四四、一五八、一六〇、二九四、三三八  
 家内工業と工場工業の工場……………一四四、一五八、一六〇、二九四、三三八  
 家内仕事……………一五八、一七二、一八六  
 家内仕事の第二段階……………一八〇  
 家内仕事人……………一八〇  
 家父(生産指揮者としての)……………一三三  
 貨財……………一三三  
 貨財界……………一三五  
 貨財供給……………一九八  
 貨財交換……………一四一  
 貨財交通……………一八〇  
 貨財流通……………一六二、一九一、一三三、一七三

貨幣……………七、一七、二五、三〇、三三、三五、五六  
 貨幣權……………一三三、一四一  
 貨幣使用……………一六七  
 貨幣種類……………七二、二六七  
 原始貨幣……………七二  
 果樹(熱帯産)……………一七〇  
 課税……………一七〇以下  
 過剰生産……………七〇、二二六、三三、一七六、三三三  
 價格……………一九  
 價值觀念……………三三  
 鍛冶匠……………一七八、一七二、一八三  
 ガリシア……………一七五、一七六  
 回廊……………一三六  
 快活……………一三  
 開市權……………一三  
 海……………一三  
 階級……………一三  
 階級移動……………一三  
 階級組織……………一三  
 壞敗……………一三  
 畫一化……………一三  
 學事……………一三  
 掛合……………一三  
 貸地制……………一三  
 貸付資本……………一三  
 活計……………一三  
 官職……………一三

官職性(手工業の)……………一三、四三、四六  
 關稅自由……………一三

キ

キオコ族……………一七六  
 キヨニヒスベルク……………一七六  
 キヨルン……………一七六  
 企業……………一七六  
 企業家……………一七六  
 企業家階級……………一七六  
 企業家利潤……………一七六  
 企業資本……………一七六  
 危險(消費者の)……………一七六  
 規定……………一七六  
 貴族制、貴族政治……………一七六  
 歸化人……………一七六  
 機械……………一七六  
 賭……………一七六  
 ギリシア人……………一七六  
 技術……………一七六  
 技術の進歩……………一七六  
 工業的技術……………一七六  
 自然人の技術……………一七六  
 擬制資本……………一七六  
 居住……………一七六  
 居住條令……………一七六  
 居住地……………一七六

居住地の分化……………一七六  
 漁撈……………一七六  
 漁撈民……………一七六  
 牛乳嗜飲……………一七六  
 教育……………一七六  
 教育の影響……………一七六  
 教育事務……………一七六  
 協議……………一七六  
 行商……………一七六  
 行商人……………一七六  
 共働……………一七六  
 共同小屋……………一七六  
 共同財產制、共有財產……………一七六  
 協同感情……………一七六  
 共力……………一七六  
 一時的共力……………一七六  
 金庫在高……………一七六  
 金屬(その加工)……………一七六

ケ

ケトルレー(Quetlet, A.)……………一七六  
 ケロノス……………一七六  
 經營形式、經營式、經營組織……………一七六

ク

クラブ族……………一七六

工業の經營式……………一七六、一八六、一七二  
 商業の經營式……………一七六、一八六、一七二  
 新開業の經營式……………一七六、一八六、一七二  
 經營式の闘争……………一七六、一八六、一七二  
 落伍せる經營式……………一七六、一八六、一七二  
 經營資本……………一七六、一八六、一七二  
 經營設備……………一七六、一八六、一七二  
 經濟……………一七六、一八六、一七二  
 分勞的經濟……………一七六、一八六、一七二  
 資本主義的經濟……………一七六、一八六、一七二  
 經濟學說……………一七六、一八六、一七二  
 經濟原則……………一七六、一八六、一七二  
 經濟史……………一七六、一八六、一七二  
 經濟主義、經濟性の本則……………一七六、一八六、一七二  
 經濟前期的なるもの……………一七六、一八六、一七二  
 經濟段階……………一七六、一八六、一七二  
 經濟的個人主義……………一七六、一八六、一七二  
 經濟的個別化……………一七六、一八六、一七二  
 經濟的性質……………一七六、一八六、一七二  
 經濟的範疇……………一七六、一八六、一七二  
 經濟範圍……………一七六、一八六、一七二  
 都市經濟範圍……………一七六、一八六、一七二  
 經濟立法……………一七六、一八六、一七二  
 景品……………一七六、一八六、一七二  
 揭示……………一七六、一八六、一七二  
 血統階級……………一七六、一八六、一七二  
 牽引力(大都會の)……………一七六、一八六、一七二  
 健康狀態……………一七六、一八六、一七二

權利保護……………一七六  
 原始貨幣……………一七六  
 原始社會……………一七六  
 原始狀態……………一七六  
 原始人……………一七六  
 原料(新原料)……………一七六  
 原料生産國……………一七六  
 現金……………一七六  
 現金在高……………一七六  
 現金取引……………一七六  
 現象範圍……………一七六  
 家内經濟の現象範圍……………一七六  
 都市經濟の現象範圍……………一七六

コ

コルベール(Colbert)……………一七六  
 子供……………一七六  
 貨財に對する子供の態度……………一七六  
 小賣……………一七六  
 小賣業者……………一七六  
 小賣商業……………一七六  
 小型動力機械……………一七六  
 古代……………一七六  
 固定資本……………一七六  
 個人の分化……………一七六  
 個人的食料探求……………一七六  
 個數貨幣……………一七六



簡數註文	一八、三四、三六〇
顧客	九六、一八八、三三〇、四三三
顧客生産	二六
顧客範圍	二九、七〇、二五八、二七三、二八三、三六〇、三九〇、三九九、四〇〇、四三三
工業	二六
工業の成立	六三、一六七
工業の分界	二四〇
工業の經營式・經營形態	一五八、一六八、一七一
官職としての工業	二二七
工業警察	二二八
工業史	一六九
工業場	一六九
工業地域	一七〇
工業都市及び工業村落	一七〇
工業部門(新しき)	一三六、一四三、一四四、一四五
工業民法	一六八
工場、工場工業、工場制工業	一四四、一六八、一八九以下、二〇六、二二六、三三八
工場地区	一八九
工場労働者	一四七
工場労働	七九、八三、一三八
公家計	一三八
公共建築物	一三八
公然的賣店	一三八
公的労働	一三八
公民階級	一八九
交易	一八九
交易貨財	一八九
交易經濟	一六三
交易現象	一六三
交易論	九七、三三三、三三四、三三七
交換	六四、六六、六七八、二二五
交換の成立	九六、一三〇、一三三
直接交換	九六
交換無き經濟	九六
交換價值	一三三
交換規則	六三以下
交換交通、交換取引	一五五、一五九
交換手段、交換資料	七、一七九
交換商品	七一
交換本能	三二六
交互拍節	三二六
交通	三二六
交通機關、交通手段	二五、二三八、四四五、四七九
交通記號	八二
交通事務	一五九
交通制度	七九、四一
交通隘路	七九
皇帝(その人格)	四七
高地スコットランド	一七三
香貨	二五以下
拘束	四三、四四
郊外地	四七
耕地	四九、七三
耕地變換	五二
耕地保護	五二
廣告業	二五三、二六二、二六四
購買權	二二九
合力	二九六、三〇八
單純合力	三〇一
國家	四〇七、四〇八
國家と社會	四〇七、四〇八
國家活動(教育的なる)	一四四
國家經濟	一四三
國家施設	一四三
國家信用	一四八、一五九
國家任務	四〇二
國家移住	四〇五、四〇六
國境塞	三九三
國條令	一四一
國民經濟	九一、九四、九六、一〇〇、一〇四、一〇六
開放的國民經濟	一五一
國民主義	一五一
國有奴隸	一〇八
黑死病	四一八
黒人(ニグロ族)	一四二、二二六、四九三、五〇六、六一
乞巧	一八
乞巧根性	一八
作業繼續	二七五
歲市	一四三、二六二

歲市時貸貨	一四三
材料變形	一四三
財產	一八、二四、六六、二九、三七、五七
課税可能なる財產	四三
財產共同	六五
財產刑	六五
財產稅	一四〇、一三九、四九
財產分配	一四〇
分勞の原因としての財產分配	一四〇
資本主義的組織に於ける財產分配	一四〇
殺戮	一五〇
嬰兒殺し	一五〇
老殺し	一五〇
雜種形式	一八二
シエツフン(Schaffle, A.)	一八二
シユタイエルブルク	一八一
シユモラー(Schmoller, G.)	一八一
シーザー(Caesar)	一八〇
シユネーツ	一八〇
氏族	一六〇、一七六
氏族制度	一六〇、一七六
市郭地	一三三
市場	一三三
國民的及び國際的市場	一四〇
市場商業	一五六
市場制度	一四三
市場手數料	八三
市場取引	一三三
市場平和	一三三
市場法	一三三
市場労働	一八八
市政	一四一
市民	一四五
市民表	三九、四九
仕事賃	一〇、三三
仕事場(公開の)	一〇、三三
自然人	三三、四〇、八五
自然人の労働	三三
自然民族	七、四、四六、一七、四四
使者	八〇、一五九、二四
使丁局	二四三、二五
使用	二六
使用價值	一三三
使用財產	一三三
使用貸借	一三三
使用分割(道具の)	一三三
資本	一八、一四、一四三、一五七、一七二、一八二、一九六、三六一
擬制資本	一四六、四九
固定資本	一八、二四
流動資本	一八
資本の循環過程	一五七、一九六
資本固定	一四三
資本主義	一四三以下
資本要求	一八九、一九三
シヤーナリズム	二二七
ジメンス(Ziennens, W.)	三六
自己生産	九六
自主權	一四〇
政治的自主權	一四〇
家内經濟の自主權	一四〇、一四一
都市經濟の自主權	一四〇、一四一
自轉車工業	一四一
自動的労働	一四一
自由主義	一五一
自由奴隸	一四〇
時間	二七五、二八〇、二八六、二九六、三〇
時間の使用	三〇、二七、二八二、二八四
寺院使者	二四
下受購買者	一三九、一四〇、四三
實驗衝動	二九
社會	一四三
社會の組織	一四三
社會化	一五三、一五五
社會的驅逐	一四三
社會的向上	一四三
社會的混成過程	一四三
社會的地位、社會等級	一四三
社會的職業階級	一四三







スミス……………三三、三四、三三三  
水上交通……………四五一  
鋤、犁……………七九  
犁を用ゆる労働……………三〇七

セ

世界經濟……………一五、一五三  
施米……………一六七  
正常的經濟方法……………一六七、一六八  
生活程度……………四六五  
生業、生計……………二八三、二八一  
市民的生業……………三三四、三三六、三三七  
生産  
生産の初期段階……………二九、二九九  
職業及び生産の集中……………三二六  
生産上の長所……………三三二  
生産協同體……………一三三、一三五、三三四  
永續的生產協同體……………三三四、三三九  
一時的生產協同體……………三三五  
生産技術……………三三六  
生産指揮……………三三七  
生産手段の分布……………三三九  
生産信用……………一〇〇、三九  
生産設備……………二八  
生産統計……………二八九  
生産任務(工業の)……………三三  
生産範圍の縮小……………二八

生産裁節減……………三二、三三三  
生産分割……………一三三、三三七、三八、三六〇  
生産方法……………三三二  
生産力……………三三三  
生産力の合同……………二七四  
生存  
生存願慮……………一六  
生存最低限度(免稅する)……………四三〇  
生存闘争  
集会的生存闘争……………八  
社會的生存闘争……………四六〇  
生命保護、生命願慮……………一三、八五  
政治的自主權……………一四〇  
性交……………一八  
清算設備……………一四八  
請願労働……………一〇三、八二、二九八、二九九、三〇五  
精神病者……………四二七  
精神労働……………三二  
製造業者階級……………三六一  
稅表……………三九、四二  
設備形態……………一四九  
窃盜……………八五  
先賣……………二九  
占有階級……………三六〇  
洗濯所……………一八三  
專制主義……………一四一、一四四  
專制(君主的)大都會……………三六、三七九、四〇〇  
專門化……………一〇、三六三、三八、三九、三六一

八

労働者の専門化……………三〇  
戦利品……………六五、一七六  
租稅……………八三、一〇〇、二九、四九以下  
相互扶助……………二九六  
相隣者……………一八二、二九六  
倉庫……………二二五、三三、三五  
倉庫兼屬性……………三五  
僧侶階級……………四八  
葬祭の習慣(經濟的進歩の妨害としての)……………三四以下  
造船……………六〇  
贈與……………六八、二八、一七  
贈與風習……………六七八  
東縛……………四七、四四六  
其地出生……………四八  
村落工業……………六二、一八  
ダンツイヒ……………三九七  
大量生産……………二八、三三九  
古代に於ける大量生産……………四六、九  
太鼓……………八二  
太鼓の言葉……………六六、一四、一八  
貸借、貸與……………三六八  
賃費……………三六八  
體僕制度……………三〇八、三〇九

リ

タ

大學……………三〇四  
大學使者……………三三三  
大總督……………一三  
大工業……………四〇〇  
大倉庫……………三二五  
大都會……………三七五、三六六  
大都會の成長……………三九七、三八  
大都會の牽引力……………四〇三  
代金仕事……………一八八  
單獨經營……………二〇八、三三七、二八五  
鍛工……………二八、七、七七一、一八三  
男子労働……………三三、三六、七三、七五、七六、二八〇  
團體請負……………三〇七

チ

チューネン(Thünen, J. H. v.)……………一〇〇  
知行……………一〇〇  
地代……………二九、三六、一七  
地方……………三六、三六、四〇  
地方公共團體……………三六、三六、四〇  
地方手工業……………三六  
地方人口……………四六  
地方通信……………四二  
地方都市……………三六、三九  
貯蔵……………三六、三九  
貯蔵品、貯蓄……………一八九、四五、三、八五、二八、一七  
朝鮮……………九九  
銅貨……………六五、八五

調租……………一〇  
徵稅簿……………三九、四二  
城砦……………一〇  
醸造場……………一〇三  
中央集權(政治的)……………二四〇、二八四  
中間階級……………三三、二八四  
中世……………三三、三六、六一、六八、四〇七、四七〇  
中世の社會と國家……………四〇七  
貨銀……………一八八  
貨銀學說……………三六三  
貨銀労働者……………三三、三六、三六一  
貨仕事……………三三、三三、三六、三六、三六〇  
三六、三六、三六、三六〇

タイムアグツ……………三九七  
テーパー……………三六、七  
テール(Thaler, A.)……………三三、三三、三三  
手紙……………一六〇  
手數料……………二八、一八〇、一八二、一八六、三三六  
出職……………一八七  
出職人……………三〇八、三〇三  
弟子……………三三  
定期市商業……………一三一  
定性……………四四  
定率……………一八  
抵當賣買……………一三五  
帝國主義……………一五三  
帝都……………三六六、三九三  
天産物……………四六  
天賦……………三六、三五五  
轉賣人……………二九、三〇、四二七  
田地荒しと家畜盜奪……………二八  
電氣……………一六、三六  
電氣工業……………一六、三六  
電氣動力傳達……………三六  
電報代理店……………三六

ト

土地……………九八、三二  
土地所有……………四三  
土地所有の動産化……………四三  
土地定期金賣買……………一三、四三

索引







ペーテ帳	四二	北米合衆國	五六	無思慮	一八
ベルギー	四二	牧畜	四九、五五	潜り職人	一八七
メルリン	四二	牧畜民	四六		
メシエル(Peschel, O.)	五七、一四	本位(貨幣の)	三七	メラネシア族	四九
メルシヤ人	三七六	磅税	一三七	メラネヒトン(Melanchton)	四九
併合	三三	マイクロナシア族	三五	モエーセル(Müser, Justus)	六三
手工業の併合	二八、三九	マルク協同體	二二	模倣	三九、三八
返禮(贈與の)	六六	マルクス(Marx, K.)	七四	盲者	四九
編輯	三六	マンレー族、馬來人	四六、五五、五六一、六三、〇五	盲跛托鉢僧組合	四九
鞭打教徒巡行	四八	前拂	六八	門閥家	四二
<b>ホ</b>		<b>ミ</b>		<b>モ</b>	
ホイオチア	六二	ミュンヘン	四六	家賃	三三
ホリネシア族	五五、四七、五五、五八	ミンコビー族	七六	焼物の術	九、二九、七六
保険業	一四	未開人の精神生活	一三以下	ユダヤ人	一三
補足的労働	三〇	未開人の心調	三	ユダヤ人虐殺	四八
俸給	一六一	未開人の無關心	一四	ユダヤ人團	四八
報告者	二四〇	未開人の冷酷	一五	有業者	四八
報知	二四	身分階級	一三	有業者の分化	三五
報知の集積點	二四	南スラヴ族	一七、一七、二九	遊戯	二九以下
報知公布	三九、二六	民族大移轉	四六	遊漁の民	五
報知蒐集	二六、二六	無産者	一〇、一〇	遊牧生活	四四
報知事務	三三	<b>ム</b>			
貿易權衡説	一四				
紡績	一九				
紡績室	一九				

遊牧民	四七	リズム	三〇、三〇	歴史	九、一六、二一、七〇
郵便	一四、一五、一六	リツムルト(Lippert)	六三	歴史學派	九、一六、二一、七〇
郵便局長	二五	リュロー(Renleux, F.)	三	歴史的證明	一、一四、七
<b>ニ</b>		リール(Riell, W. H.)	三	連鎖力	一〇、一四、一六
輿論	二六	吏員	一六〇	連力	一〇、一四、一六
幼兒	一、三六	利己心(未開人の)	一五、二二	聯力	二七、二七、二九、三三、三三、三三、三三
要求權	一、一	利息禁制(寺法上の)	一〇	聯力の範圍	三六
様式模範	一七	社會立法	一三	<b>ロ</b>	
養子取	一七	經濟立法	二五以下、四二以下、四七	ロビンソンクルソー式譯	一八、一八、一九
寄合仕事	二〇、二〇	律動	三〇、三〇	ロシア	一八、一八、一九
寄合場	二〇、二〇	留置權	三〇、三〇	ロシュトック	一八
線の入	二〇	流行性精神病	三〇	ローマ	一八
<b>ラ</b>		流行性精神病	三〇	ローマ人の都市	一八
ライプツェ	一〇、一三、一四	流通	三〇	ロッシュャー(Roscher, W.)	一八
ラウ(Rau, K. H.)	一〇、一三、一四	流通過程(資本の)	一五、一六	ロートベルトウス(Rodbertus, K.)	一八
ラホック(Lahock, John)	一〇	流通範圍	一五、一六	ロンドン	一八
未耕作	一〇	流動資本	一八	老者遺棄	一七
懶惰	一〇	旅客交通	一八	老者殺し	一七
癩病	一〇	領主制	一〇、一三		
癩病院	一〇	領地隸屬制	一〇、一三		
癩病患者	一〇	領土經濟	一〇、一三		
溢費	一〇	量定人及び秤定人	一〇、一三		
<b>リ</b>		林業	一〇、一三		
リカルドー(Ricardo, D.)	一〇	輪裁	一〇、一三		
リスト(List, Friedrich)	一〇	輪番遊戯、輪番居歌	一〇、一三		
<b>索 引</b>					



労働の成立	二九
精神労働	三二
自動的労働	三八
拍節労働	三〇三
閉鎖的家内經濟に於ける労働	一五八
自然人の労働	三
労働階級	一五一
労働警察	一九三
労働者	一九五
労働者移住	四三、四七
労働者聯合	二七八
労働収益性	三三
労働推移	三三、三三、三六
労働組織	一〇五、四四
労働賃銀	一九、一九六
労働能力	三六
労働分配(性による)	三、三、三、四八、五三
勞賃	一九、二六
矮小經營	二〇
矮小民族	一一、七五
居職	一八〇、一八二

ワ

キ

索引終



## 譯語對照表

## A

譯語對照表

Abgabe = Steuer	工業の分界
Abgrenzung der Gewerbe	依存關係
Abhängigkeitsverhältnis	販賣優先權
Absatzvorrecht	專制主義
Absolutismus	移出制限
Abzugsbeschränkungen	農耕, 耕耘
Ackerbau	農耕民
Ackerbauvolk	養子取
Adoption	聚堆, 堆積
Agglomeration	單獨經營
Alleinbetrieb	混成過程 (社會的)
Amalgamierungsprozess, sozialer	手工業の官職性
Amtscharakter des Handwerks	取付け工業
Anbringungsgewerbe	生産の初期段階
Anfangsstadien der Produktion	併, 合
Angliederung	集積力
Anhäufungskraft	設備形態
Anlageform	廣告業
Annoncenwesen	順應
Anpassung	順應鬭爭
Anpassungskampf	大都會の牽引力
Anziehungskraft der Grossstädte	勞働
Arbeit	勞働者
Arbeiter	勞働階級
Arbeiterklasse	勞働者聯合
Arbeitervereinigung	勞働者移住
Arbeiterwanderung	勞働能力
Arbeitsfähigkeit	共力
Arbeitsgemeinschaft	勞働組織
Arbeitsgliederung	合力
Arbeitshäufung	



Arbeitslohn	勞賃, 勞働賃銀
Arbeitsplatz, öffentlicher	仕事場 (公開)
Arbeitspolizei	勞働警察
arbeitsteilige Wirtschaft	分勞的經濟
Arbeitsteilung	分勞 (俗: 分業)
Arbeitsverbindung	連 力
Arbeitsvereinigung	聯 力
Arbeitsverkettung	連鎖合力
Arbeitsverschiebung	勞働轉移
Arbeitsverteilung nach den Geschlechtern	性による勞働分配
Arbeitszerlegung	分業, 勞働分割
Aristokratie	貴族制
Aufsteigen, soziales	向上 (社會的)
ausschliessliches Kaufrecht	獨占的購買權
äussere Wanderung	國外移住
Austausch, direkter	直接交換
Auswahl von Waren	特選品
Auswanderung	移出, 國外移住
automatische Arbeit	自動的勞働
Autonomie	自主權
Avischreiber	通報者, 通信記者

**B**

Bannmeile	市郭地
Bann- und Stapelrecht	追放權と留置權
Bargeschäft	現金取引
Barvorrat	現金在高
Baumwohnung	樹上住居
Beamte	吏 員
Bedarfsdeckung	需要充足
Bedarfskonzentration	需要集中
Bedarfsproduktion	要需生產
Bedarfstausch	需要交換
Bedarfsverschiebung	需要推移
Bedarfswirtschaft	需要經濟

Bede	財產稅
Bedebuch	ベータ帳 (財產稅表)
Begabung	天賦, 賦性
Bekinnenhaus	受惠婦の家
Berichterstatter	報告者
Berufsarbeiter	職業勞働者
Berufsart	職業種類
Berufsbeamtentum	職業的吏員階級
Berufsbezeichnung	職業名, 職業別
Berufsbildung	職業構成
Berufsgliederung	職業組織, 職業編制
Berufsklasse	職業階級
Berufsprinzip	職業原則
Berufsspaltung	分 職
Berufsstand	職業階級
Berufstatistik	職業統計
Berufstätige	有業者
Berufstätigkeit	職業行爲
Berufstypus	職業型式
Berufsvereinigung	職業聯合
Berufswahl	職業選擇
Berufszweig	職業部門
Besitzstand	占有階級
Begsteuerung	課 稅
Besoldung	俸 給
Betrieb	經 營
Betriebsanlage	經營設備
Betriebsform	經營形式, 經營式, 經營組織
Betriebskapital	經營資本
Betriebssystem	經營組織, 經營式
Bevölkerung	人 口
Bevölkerungsaustausch	人口交換
Bittarbeit	請願勞働
Boden	土 地
Bönhase	潛り職人
Bote	使者, 飛脚



Botenanstalt  
Brautkauf  
briefliche Zeitung  
Brüderschaft der Blinden und Lahmen  
Bürger  
bürgerliche Nahrung  
Bürgerverzeichnis  
Burgrecht

使丁局  
嫁の買入  
信書新聞  
盲跛組合  
市民  
市民的生業  
市民表  
ブルグレヒト

D

Daseinskampf  
dauernde Produktionsgemeinschaft  
Degeneration  
Despotengrossstadt  
Diadochenhauptstadt  
Diebstahl  
Differenzierung  
Differenzierung der Berufstätigen  
Differenzierung der Individuen  
Differenzierung der Städte  
Differenzierung der Stämme  
Differenzierung der Werkzeuge  
Differenzierung der Wohnplätze  
direkter Austausch  
Dorfgewerbe  
Dualismus

生存闘争  
永續的生產協同體  
類廢, 壞收  
專制(君主的)大都會  
アレキサンダー大王後繼者の首府  
窃盜  
分化  
有業者の分化  
個人の分化  
都市の分化  
種族の分化  
道具の分化  
居住地の分化  
直接交換  
村落工業  
二元論

E

Egoismus  
Eigenproduktion  
Eigentum  
einfache Arbeitshäufung  
Eingliederung des Handwerks  
Einkommen

利己心  
自己生産  
財産, 所有權  
單純合力  
手工業の併合  
所得

Einkommenserwerb  
Einkommensverteilung  
Einwohnerzahl  
elektrische Kraftübertragung  
Elektrotechnik  
Emporkömmling  
Entwicklungsstufe  
Erbleihe  
Ernährung  
Erscheinungskreis der Hauswirtschaft  
Erscheinungskreis der Stadtwirtschaft  
Erwerbsgesellschaft  
Erwerbstauch  
Erwerbswirtschaft  
Existenzminimum  
Existenzsorge  
Experimentiertrieb

所得獲得  
所得分配  
住民數  
電氣動力傳達  
電氣工業  
成上り者, 成金  
進化段階  
永代小作  
榮養  
家内經濟の現象範圍  
都市經濟の現象範圍  
營利會社  
營利交換  
營利經濟  
生存最低限度  
生存顧慮  
實驗衝動

F

Fabrik  
Fabrikantenstand  
Fabsikarbeiter  
Fabrikbezirk  
Fahrradindustrie  
Familienverfassung  
Feldschutz  
Feld- und Viehdiebstahl  
Feldwechsel  
Fernsprecheinrichtung  
Feuergebrauch  
Feuerzeichen  
fiktives Kapital  
Fischervolk  
Fischfang  
Fischnomade

工場制工業, 工場工業, (工場)  
製造業者階級  
工場勞働者  
工場地區  
自轉車工業  
家族制度  
耕地保護  
田地荒しと家畜盜奪  
耕地變換  
遠隔通話設備  
火の使用  
發火信號  
擬制資本  
漁撈民  
漁撈  
遊漁の民

譯語對照表

五



Fleischnahrung	肉食料, 動物性食料
Forderungsrecht	要求權
Forstwirtschaft	林 業
Frauenarbeit	女子勞働
Frauenfrage	婦人問題
Frauenüberschuss	女子超過
Frauenzunft	婦人の同業組合
Freigelassene	自由奴隸
Freizügigkeit	移住自由
Fronarbeit	莊園勞働, 賦役
Fronhof	莊 園
Fronhofsordnung	莊園制度
Fronhofswirtschaft	莊園經濟
Fruchtfolge	輪 栽
Fuggerzeitungen	フツガーの新聞
Funktionsteilung=Arbeitsverteilung	

G

Garnisonstadt	衛戍都市
Gastfreundschaft	賓客接待
Gastgeschenk	賓客贈與
Gebrauchsleihe	使用貸借
Gebrauchsteilung der Werkzeuge	道具の使用分割
Gebrauchsvermögen	使用財産
Gebrauchswert	使用價值
Gebundenheit	束縛, 拘束
Gebürtigkeitsstatistik	出生地統計
Geburtsbevölkerung	出生人口
Geburtsstand	家柄に基く階級, 血統階級
Gegengeschenk	返 禮
Gegenleistung	反對給付
gegenseitige Hilfeleistung	相互扶助
Geisslerfahrt	鞭打教徒巡行
Geistesepidemie	流行性精神病
geistige Arbeit	精神勞働

六

Geistlichkeit	僧侶階級
Geld	貨 幣
Geldgebrauch	貨幣使用
Gemeinde	公共團體, 町村團體
Gemeindeverwaltung	市 政
Gemeinschaftsgefühl	協同感情
Gemeinschaftshaus	共同小屋, 寄合場
Gesamteigentum	共有財産, 共同財産制
Geschäftskapital	營業資本
Geschenk	贈 與
Geschlechter	門閥家
geschlechtlicher Verkehr	性 交
Geschlechtsfunktion	(Arbeitsverteilung を見よ)
geschlossene Hauswirtschaft	閉鎖的家内經濟
geschriebene Zeitung	手記新聞
Geselle	職 人
gesellige Arbeit	寄合仕事
Gesellschaftsarbeit	寄合仕事
Gesellschaftshaus=Gemeinschaftshaus	
Gesetzgebung	立 法
Gesundheitszustand	健康狀態
Getreidespende	施 米
Gewandschneider	織地切賣商
Gewerbe	工 業
Gewerbefreiheit	營業自由
Gewerbegeschichte	工業史
Gewerbepolizei	工業警察
Gewerbebezirk	工業部門
gewerbliche Produktionsaufgabe	工業的生產任務
gewerbliche Technik	工業的技術
Gleichtakt	同時拍節
Gliederung der Arbeit	勞働組織
Gliederung der Gesellschaft	社會組織
Grabstock	土頭杖(棒)
Grenzfestung	國境塞
Grenzstreitigkeiten der Zünfte	同業組合の境界爭

譯語對照表

七



Grossbetrieb	大經營
Grosshandel	卸賣商業
Grossindustrie	大工業
Grossmagazin	大倉庫
Grossstadt	大都會
Grundbesitz	土地所有
Grundherrschaft	領主制
Grundrente	地代
Grundsatz der Wirtschaftlichkeit	經濟性的原則, 經濟主義
Gruppenakkord	團體請負
Gültkauf	土地定期金賣買
Gut	貨財
Gütertausch	貨財交換
Gütergemeinschaft	財產共同
Güterumlauf	貨財流通
Güterverkehr	貨財交通
Güterversorgung	貨財供給
Güterwelt	貨財界
Gutsuntertänigkeit	領地隸屬制

H

Hackbau	耒耜耕作
Halbbeamte	半官吏
Halbfabrikate	半成品
Halbfabrikation	半成品製造
Halbjahrszeitung	半年刊新聞
Handarbeit	手工勞働
Handel	商業
Handelsbilanztheorie	貿易權衡說
Handelsflotte	商船隊
Handelskapital	商業資本
Handelsreise	行商
Handelsvolk	商業民族
Handwerk	手工業
Handwerker	手工業者

Handwerksgeselle	手工業職人
Handwerkslohn	手工業賃銀
Handwerkssklave	手工奴隸
Hauptberuf	主業
Häuserbesitz	家屋所有
Hausfleiss	家內仕事
Haushalt	家計
Hausindustrie	家內工業
Hausindustriebezirk	家內工業地區
häusliche Arbeitsteilung	家內的分勞
Hauswerk	家內仕事
Hauswirtschaft	家內經濟
Hegemonie in Städtebünden	都市同盟の霸權
Heimarbeiter	家內仕事人
Heimwerk	居職
Hirtenvolk	牧畜民
historischer Beweis	歷史的證明
historische Schule	歷史派
Hocken	行商人
Hörige	家人(かきべ)
Hörigkeit	家人制度

I

Immobilienverwerbskredit	不動產營利信用
Imperialismus	帝國主義
individuelle Nahrungssuche	個人的食料探求
Industrie	工業
Industriebezirk	工業地區
Industriedorf	工業村落
Industrieland	工業國
Industrieplatz	工業場
Industriestadt	工業都市
Industrievolk	工業民族
innerer Zuwachs in Städten	都市の內的増殖
innere Wanderung	國內移住



interlokale Arbeitsteilung  
internationale Arbeitsteilung  
internationaler Markt

超地方的分業  
國際的分業  
國際市場

J

Jag.  
Jägervolk  
Journalismus  
Judengemeinde  
Judenschlächtere

狩獵  
狩獵民  
ジャーナリズム  
ユダヤ人團  
ユダヤ人虐殺

K

Kapital  
Kapitalerfordernis  
Kapitalfixierung  
Kapitalismus  
kapitalistische Wirtschaft  
Kassenvorrat  
Kasten  
Kauf  
Kaufleute  
Kaufrecht  
Kinderkreuzzug  
Kindersterblichkeit  
Kindestötung  
Kleinbetrieb  
Kleinfamilie  
Kleingewerbe  
Kleinhandel  
Kleinkapital  
Kleinkraftmaschine  
Kleinstadt  
Klosterbote  
kollektiver Daseinskampf

資本  
資本要求  
資本固定  
資本主義  
資本主義經濟  
倉庫在高  
階級, 世襲的階級  
賣買  
商人  
購買權  
小兒十字軍  
小兒死亡率  
嬰兒殺戮  
小經營  
小家族  
小工業  
小賣商業  
小資本  
小型動力機械  
小都會  
寺院使者  
集合的生存鬭爭

Kolonat  
Kolonie  
Kombination  
komplementäre Arbeit  
Konföderation der produktiven Kräfte  
Königsstadt  
Konsument  
Konsumtion  
Konsumtionsbedingung  
Konsumtionsgemeinschaft  
Konsumtionsverbot  
Konsumtivkredit  
Konzentration des Bedarfs und der  
Produktion  
Kooperation  
Korrespondent  
Korrespondenz  
Korrespondenzbureaux  
Kostensparnis  
Krämer  
Kredit  
Kreditgeschäft  
Kreditwesen  
Kulturmensch  
Kulturvolk  
Kundenkreis  
Kundenproduktion  
Kunstindustrie

賃地制 (ロ-マの)  
植民地  
聯力  
補足的勞働  
生産力の合同  
王都  
消費者  
消費  
消費條件  
消費協同體  
消費禁止  
消費信用  
需要と生産との集中  
共働  
通信員  
通信  
通信局  
生産費節減  
小賣業者  
信用  
信用取引  
信用制度  
文化人  
文化民族  
顧客範圍  
顧客生産  
美術工業, 美術工藝

L

Ladengeschäft  
Landbevölkerung  
Landesordnung  
Landgemeinde  
Landhandwerk

商店營業  
地方人口  
國條令  
地方公共團體  
地方手工業



Landstadt	地方都市
Landwirtschaft	農業
Lebensfürsorge	生命豫慮, 生命保護
Lebenshaltung	生活程度, 生計
Lehen	知行
Lehrling	弟子, 徒弟
Leibeigenschaft	體僕制度
Leibrente	終身定期金
Leihen	貸借, 貸與
Leihkapital	貸付資本
Leitung der Produktion	生産指揮
Liberalismus	自由主義
Liquidationsanstalt	清算設備
Lohn	賃銀
Lohnarbeiter	賃銀労働者
Lohntheorie	賃銀學說
Lohnwerk	賃仕事

M

Magazin	倉庫
Magazinhörigkeit	倉庫隸屬性
Makler=Unterkäufer	
Männerarbeit	男子労働
Markgenossenschaft	マルク協同體
Markt	市場
Marktarbeit	市場労働
Marktfrieden	市場平和
Marktgebühr	市場手数料
Markthandel	市場商業
Marktrecht	市場法
Marktverkehr	市場取引
Marktwesen	市場制度
Maschine	機械
Massenbewegung	集團運動, 大衆運動
Massenproduktuon	大量生産

Mass und Gewicht	度量衡
Merkantilismus, Merkantilssystem	重商主義
Messe	歲市
Messer und Wäger	量定人及び秤定人
Messhandel	定期市商業
Messrelation	歲市報道
Messvermietung	歲市時貸貸
Metallbearbeitung	金屬加工
Metoiken	歸化人(ギリシヤ時代の)
Mietpreis	家賃
Mischform	雜種形式
mittelalterliches Kreditwesen	中世の信用制度
mittelalterliche Volkszählung	中世の人口調査
Mittelstand	中間階級
Mobilisierung des Grundbesitzes	土地所有の動産化
Modenwechsel	流行變換
Münzrecht	貨幣權
Musikbegleitung	伴奏

N

Nachahmung	模倣
Nachbar	相隣者, 隣人
Nachrichtenbureaux	通報局
Nachrichtendienst	報知事務
Nachrichtenpublikation	報知公布
Nachrichtensammlung	報知蒐集
Nachrichtenverkehr	通信交通
Nahrung	生計, 生業, 活計
Nahrungsbedürfnis	食慾
Nahrungsgewinnung	食糧獲得
Nahrungssorge	食料顧慮
nationale Arbeitsteilung	國民的分業
nationaler Markt	國民的市場
Nationalhauptstadt	帝都
Nationalitätsprinzip	國民主義



Nationalökonomie	國民經濟
Nationalwirtschaft = Volkswirtschaft	
Naturalzinsen	調租
Naturanlage	天賦
Naturgabe	天產物
Naturmensch	自然人
Naturvolk	自然民族
Nebenberuf	副業
Nebenbetrieb	副業的經營
Neuigkeitenfabrik	新報製造工場
Nicht-Arbeit	非勞働
Nicht-Wirtschaft	非經濟
Niederlassung	居住地
Nomade	遊牧民
Nomadenleben	遊牧生活
normale Wirtschaftsart	正常的經濟方法
neue Rohstoffe	新原料

O

offene Volkswirtschaft	開放的國民經濟
öffentliche Arbeiten	公的勞働
öffentliche Bauten	公共建築物
öffentliche Meinung	輿論
öffentlicher Arbeitsplatz	共同仕事場
öffentlicher Haushalt	公家計
öffentliche Verkaufsstelle	公然の賣店
Oikowirtschaft	家産經濟
ökonomisches Prinzip	經濟原則, 經濟主義
Ordinari	常規使者
Ortsgebürtigkeit	其地出生

P

partielle Sonderwirtschaft	部局的特殊經營
periodische Wanderung	定期移住

Personenverkehr	旅客交通
Postjahr	惡疫流行の年
Pfandkauf	抵當賣買
Pflanzenkost	植物性食料
Pflanzstadt	植民都市
Pfundzoll	磅稅
Physiokrat	重農主義者
Plakat	揭示
Polis	都城, 都市國家
politische Autonomie	政治的自主權
politische Zentralisation	中央集權
Post	郵便
Preis	價格
Preiswerk	代金仕事
primitives Geld	原始貨幣
Prinzip der Wirtschaftlichkeit	經濟性的本則, 經濟主義
Produktion	生產
Produktionsanstalt	生產設備
Produktionsaufgabe	生產任務
Produktionsgebiet	生產範圍
Produktionsgemeinschaft	生產協同體
Produktionsmethode	生產方法
Produktionsmittel	生產手段
Produktionsstatistik	生產統計
Produktionstechnik	生產技術
Produktionsteilung	生產分割
Produktionsvorteil	生產上の長所
Produktivität	生產力
Produktivkredit	生產信用
Proletarier	無產者
Provinzialkorrespondenz	地方通信
Provinzialstadt	地方都市

R

Raub	盜奪
------	----



Rechtsschutz	權利保護
Redaktion	編輯
Reihenarbeit	序列勞働
Reihenbacken	輪番燒餅
Reihenschlachten	輪番屠獸
Rentenkauf	土地定期金賣買
Reparaturarbeit	修繕仕事
Reparaturgewerbe	修繕業
Residenz	帝都
Rhythmus	律動, リズム
Risiko des Konsumenten	消費者の危険
Rohproduktionsland	原料生産國
Rohstoff	原料
rückständige Betriebsform	落伍せる經營形式

S

Sachkapital	物的資本
Sammelpunkt für Nachrichten	報知の集積點
Sammler	蒐集者
Satzung	規定
Schmälerung des Produktionsgebietes	生産範圍の縮小
Schmiede	鍛冶匠, 鍛工
schwarzer Tod	黑死病
Seehafen	海港
Sesshaftigkeit	定住性
Sippe	氏族(うち)
Sippenverfassung	氏族制度
Sklave	奴隸
一六 Sklavenarbeit	奴隸勞働
Sklavenverleihung	奴隸貸與
Sklavenwirtschaft	奴隸經濟
Sonderwirtschaften	特殊經營
soziale Berufsklasse	社會的職業階級
soziale Gesetzgebung	社會立法
sozialer Daseinskampf	社會的生存鬭爭

sozialer Rang	社會等級, 社會的位階
soziales Aufsteigen	社會的向上
soziale Verdrängung	社會的驅逐
Sozialisierung	社會化
Speiseverbot	食物禁止
Spezialisierung	專門化, 特化, 分職
Spezialisierung der Arbeiter	勞働者の專門化
Spiel	遊戲
Spielgewinn	賭博の儲け
Spinnerei	紡績
Spinnstube	紡績室
Staatsanstalt	國家施設
Staatsaufgabe	國家任務
Staatsbürgertum	公民階級
Staatsfeindlichkeit	反國家性
Staatskredit	國家信用
Staatsklave	國有奴隸
Staatstätigkeit	國家活動
Staatwirtschaft	國家經濟
Staat und Gesellschaft	國家及び社會
Stadt	都市
Stadtbezug	都市概念
Stadtbevölkerung	都市人口
Städtebünde	都市同盟
Städtewesen	都市制度
Städtezwang	都市強制
Stadthandwerk	都市手工業
städtischer Dienst	都市公務
städtischer Mittelpunkt	都市的中心點
städtisches Wirtschaftsgebiet	都市の經濟範圍
Stadtrecht	都市權
Stadtrechtsverleihung	都市權交附, 市權附與
Stadtstaat=Polis	
Stadtwirtschaft	都市經濟
Stammgewerbe	種族工業
Stammprodukte	種族生産物



Stammverkehr	種族交通
Stand	身分階級
Ständegliederung	階級組織
Ständewanderung	階級移動
Stapelrecht	留置權, 開市權
stehendes Kapital	固定資本
steuerbares Vermögen	課稅財產
steuerfreies Existenzminimum	免稅される生存最低限度
Steuerlist	徵稅簿, 稅表
Steuer	租 稅
Stilmuster	樣式模範
Stipendium	貸 費
Stoffumwandlung	材料變形
Stör	出 職
Störer	出職人
Stückbestellung	個數注文
Stücklohn	個數賃銀
Symmachie=Städtebünde	
Synoikismos	集團移住, シノイキスモス

T

Taktarbeit	拍節勞働
taktmässige Arbeit	同 上
Tausch	交 換
tauschlose Wirtschaft	交換なき經濟
Tauschmittel	交換手段, 交換資料
Tauschregel	交換規則
Tauschtrieb	交換本能
Tauschverkehr	交換交通, 交換取引
Tauschware	交換商品
Tauschwert.	交換價值
Taxe	定 率
Technik	技 術
telegraphische Agentur	電報代理局
temporäre Arbeitsgemeinschaft	一時的共力

temporäre Produktionsgemeinschaft	一時的生產協同體
Territorialwirtschaft	領土經濟
Tierzähmung	動物馴致
Töpferei	燒物の術
Transportwesen	運搬業, 運輸業; 運搬制度
Tribut	調 貢

U

Überschussproduktion	過剩生産
umlaufendes Kapital	流動資本
Umlaufgebiet	流通範圍
Uniformierung	畫一化
Unterkäufer	下受購買者, 轉賣人
Unternehmer	企業家
Unternehmergewinn	企業家利潤
Unternehmerstand	企業家階級
Unternehmung	企 業
Unternehmungskapital	企業資本
Unterrichtswesen	教育事務, 學事
Urgesellschaft	原始社會
Urmensch	原始人
Urzustand	原始狀態

V

Verbreitung der Produktionsmittel	生産資料の分布
Verdinglichung	物化, 物上化
Verdrängung des Handwerks	手工業の驅逐
Vererbung	遺 傳
Vergesellschaftung	社會化
Verhandlung	掛合ひ, 協議
Verkehr	交通, 取引
Verkehrsdienst	交通事務
Verkehrerscheinung	交易現象
Verkehrsgut	交易貨財



Verkehrsmittel	交通機關, 交通手段
Verkehrsrecht	取引法
Verkehrssymbolik	交通記號
Verkehrstheorie	交易論
Verkehrsweg	交通陸路
Verkehrswesen	交通制度
Verkehrswirtschaft	交易經濟
Verlag	家內工業, 問屋
Vermittlergeschäft	周旋業
Vermögen	財產
Vermögenssteuer	財產稅
Vermögensstrafe	財產刑
Vermögensverteilung	財產分配
Verschiebung der Bevölkerung	人口推移
Verschwendung	濫費
Versicherungswesen	保險業
Verstadtlichung	都會化
Viehgeld	家畜貨幣
Viehzucht	牧畜
Vielweiberei	一夫多妻
Völkerwanderung	民族大移轉
Volksvermehrung	人口增加
Volkswirtschaft	國民經濟
Volkszählung	人口調查
Vorausbezahlung	前拂
Vorkauf	先賣
Vorort	郊外地
Vorrat	貯蓄, 貯藏(品)

二〇

W

Wachstum der Bevölkerung	人口增加
Währung	本位(貨幣)
Wandergewerbe	巡回工業
Wanderhandel	行商業
Wandertrieb	移住本能

Wanderung	移住
Ware	商品
Warenhaus	百貨店
Warenkapital	商品資本
Warenproduktion	商品生產
Waschanstalt	洗濯所
Wasserverkehr	水上交通
Wechseltakt	交互拍節
Weltwirtschaft	世界經濟
Werkfortsetzung	作業繼續
Werklohn	仕事賃
Werkzeug	道具
Wertvorstellung	價值觀念
Wiederkauf	買戻
Wirtschaft	經濟
wirtschaftliche Gesetzgebung	經濟立法
wirtschaftliche Kategorie	經濟的範疇
wirtschaftliche Natur	經濟的性質
wirtschaftlicher Individualismus	經濟的個人主義
wirtschaftliche Vereinzelung	經濟的孤立
Wirtschaftlichkeit	經濟性
Wirtschaftsgebiet	經濟範圍
Wirtschaftsgeschichte	經濟史
Wirtschaftsstufe	經濟段階
Wirtschaftstheorie	經濟學說
Wochenmarkt	週市
Wochenzeitung	週刊新聞
Wohnplatz	居住地

Z

Zeit	時間
Zeitgebrauch	時間使用
Zeitung	新聞
Zeitungsverlag	新聞發行所
Zeitungswesen	新聞業, ジャーナリズム

譯語對照表

二一



Zins	利子
Zinsverbot	利息禁制
Zirkular	回章
Zirkulationsprozess	流通過程
Zirkulationsprozess des Kapitals	資本の流通過程
Zoll	關稅
Zollfreiheit	關稅自由
Zugabe	景品, おまけ
“Zug nach den Städten”	「都會へ」
Zunft	同業組合
Zunftwesen	同業組合制度
Zwergbetrieb	矮小經營
Zwergvolk	矮小民族

(終り)



昭和十七年十一月十五日 印刷  
昭和二十一年七月十日 發行

國民經濟の成立  
定價參百五十圓



大原社會問題研究所  
著作權者 代表者 森 戸 辰 男

東京都千代田區神田神保町一ノ三九  
發行者 永 田 修 策

東京都千代田區駿河台二ノ二三  
印刷者 清 水 長 晃

(清水印刷所)

發行所

東京都千代田區神田神保町一ノ三九  
振替東京二三八三八番  
電話神田(25)二二〇〇五一八七

第一出版株式會社  
會員番號A一〇四〇〇一番



終